

か然らずんば恐らくは唯自家の事に忙しくして他を顧るの暇なきに至れり。個人新聞の文體 一個人の意見を主體とする新聞紙は一種特有の文體を具ふるを例とす。此書風の佛國に行はれて大に勢力を有せしこと已に久し然れども今日は殆ど全く頽廢して行はれざるに似たり。此種の新聞紙流行せし頃には主腦となる個人の文章に一機軸の格調を具ふること最も必要にして、その筆に成れることを明知せしんが爲め故らに特異の臭氣を文體に添ゆる習慣起れり。例へばエミール・ド・ジラルダン(J. Girardin)は極めて各句を短からしむるを一家の流とし、時ありては僅に五六語づより成れる句を夥しく堆積せり、而して人はこの短句の一々に無量無限の深意を含蓄し、智恵の光明濃縮結晶し、毎句をなせりと想像せり。又この許多の短句は餘白を存するに拘らず屢、一行づゝに分記し、恰も許多の揭示を告示板に貼付せるの觀ありしが、要するに各句の語勢を強からしむる目的にして、その他何等の理由あるにあらざりき。ヴィクトル・ユゴー(Victor Hugo)の如き文章を以てすら尙且つこの慣習を破ること能はず、依然流行の弊竇に倣つて揭示板式を取れり。然れども流行の勢力は理を以て論すること能はず、當時エミール・ド・ジ

ラルダンの筆とし言へば人争ひ讀んで唯後れんことを恐れたり。フランス新聞の販賣部數非常に大なりしは全くその論說ありしに由れり。

ルイ・ヴイヨール(Louis Veuillot)一八一三年に生れ一八八三年に死すの頃に榮へし、ユニヴァーサル(Univers)も亦同一の軌轍を走れり。其頃政治に容喙し戦争を嗜める天主教徒即ち當時所謂教皇全權黨なほ勢力を奮ひたるが、彼は該黨の爲め新聞紙上に巨槌を揮ひし文雄なりき。惡罵的文章に至りてはその筆鋒の鋭利なること干將莫邪の如く、ロシユ(Russia)より月桂冠を横奪する亦難しとせざりしが、若し夫れ榮麗優長の文を綴らんと欲する時は意の到る所筆自から之に隨ひ、リュッセー侯(Marquis de Lucay)をすら顔色なからしむべき詞藻を有したり。彼素と桶匠の子なりしに、桶邊を離れ去つて遂に文學の林に入りしが、翹然として傑出せる論說は平生之を仇敵視する諸輩すら其一種特有の香味を嗜んで熱心に之を誦讀せり。而して其手の運轉一朝停止するや彼の名文に由つて久しく盛名を維持せし新聞は忽ち政論の紛争場裡に勢力を失ひ、殆ど全く世に顧られざるに至れり。

ポール・ド・カッサニヤック 個人新聞の文體が容易に社會の眼目を吸引して大名を博する方便たりし實例はポール・ド・カッサニヤック(Paul de Cassagnac)一八四二年に生れて一九〇四年に死すに於ても亦之を見る。而して著作家として之を見れば彼は實にロシュフォールに及ばず、文學の力に至りてはゾイヨの作「巴里の臭氣」(Les Odeurs de Paris)に比肩すべくもあらざれど、名高の目的を達せしに至りては則ち一なり。然れども彼は新聞上の議論に於て最高の一地位を占め、且つ多年の間之を維持する方法を解せり。斯かる高名を博せし所以半ば一枝の筆に由れりと雖、半ば又その一把の劍に由れり。人は言ふ愛蘭人は争闘を好むと、然れども彼の如く常に争闘を好む愛蘭人はあらず。斯くの如き亂暴の氣質を以てして而も新聞上の論争を職とするを以て、決闘はその職業中肝要の一部となりしのみならず、數年間は實にこの蠻行を以て精神を爽快ならしむる快事とせり。その好む所の武器はクレマンソー君の如く拳銃にあらず、又此兇器を以て君と雌雄を決せしことなし。然れどもその常に愛用せし劍を利器とする時は剛勇にして前なき敵手なりき。その幾回かの決闘中今日最も善く人の胸臆に存するはロシュフォール

と戦ひしもの、共產論者にして又猛惡の新聞記者たりしリッサガリーと戦ひしもの、ブルラン及びオレリアン・シールと戦ひしもの等なり。斯く屢、危険に出入せしかども彼未だ曾つて對手を殺せし事なく、且つ其回数多きのみならず、時々又自己に劣らざる決闘の名手と戦ひしことあるも、終に重傷を負ふに至らざりしは奇なり。思ふに敵我の兩者は決闘を以て一種の娛樂とし、各、その身を全うし互にその業務を害せざらんと欲せしにあらざるなきか。何れの場合に於てもカッサニヤックはこの争闘に赴くに意氣の軒昂なること實に驚くべく、その奇勝を博するも亦頗る驚くに堪へたり。彼が廣くその名聲を轟かせしもの一はこの方法に由り、一は共和國建設後二十年間猛烈なる演説と妨害を試みて絶えず議會を騒がせしに由れり。彼は誠心誠意を以てボナパルト家の爲め一身を獻じ、已に死せる帝國に電流を通じて之を蘇生せしめんと竭力せり。然れども自己の爲め必要なりしは帝國にあらず。寧ろル・ペー(Le Pays)及び「ロトトリテ」(L'Autorité)なる二新聞にして、前者は久しき以前消滅し、後者は今尙存して、其二子之を發行す。彼は現在の共和政治を確立するに勉めし一切の共和黨員を疾視して不倶戴天の讎と

し、常に共和國を賤んで之を呼ぶに、娼婦てふ醜名を用ひ、熱罵激憤口を衝き出でて霹靂の如く日々の紙上に轟々たりき。其新聞紙が全國を走つて販路を廣めし所以實に「ポール・ド・カッサニヤック」と署名せる「娼婦」の攻撃文毎日その紙上に現れたるに由れり。その頃佛國には帝國の遺愛を追慕する人民尙夥しくカッサニヤックの嘲罵を讀んで一椀の茗よりも須要なりとし、精神を作興するに效ありとする輩に乏しからず。他方に至らばこの種の僞父野人殊に多く、或る老紳士はカッサニヤック君が日々萬丈の氣箠を吐いて新聞に論述する意見實に我意に投合する者なりとし、老後の病苦を慰むる福音なりとて其好意を感謝し、交筆と劍とを以て力闘するこの記者を銘記して懷に忘るゝ能はざりしといふ。

アンリー・ロシュフォール 罵詈攻撃文體の最も著名なる代表者として今尙生存するものはアンリー・ロシュフォール (Henri Rochefort) にして、吾人はこの人物を該派の第一流に置くことを得べし。然れども時潮次第に變化して新時代の嗜好は大に遷移し、一時猛將の名を博せし彼は已に角闘場外に排除せられたり。アントランシシユアン (Intransigant) は彼が一八八〇年に起したる新聞紙にして、殆ど一日

としてその特徴たる峻烈の論説を掲載せざることなく、その論文は對敵を殺すを目的とし、趣味溢るゝが如き奇語警句芒刺の如く聳立せしが、近來に至り該紙は他人の手に歸せり。人若しその最近の筆に成れる論説の一を取つて之を讀み、その用語の輕快活潑にして而も毒矢を放つ弓力異常なるを見れば、恐らくは之を一八三〇年の昔に生れし人の筆なりと思惟するを得ざるべし。ロシュフォールの公生涯は誤謬と矛盾と無定見の三者を打つて一團とするものなりしかども、暴風沙石を飛ばすが如き論争と政治上の活劇に殆ど五十年の長日月を涉りしを以て、近世の佛國を研究する史家は偏に興趣を寄せて止まざるなり。而して彼は近き過去の時代に於ける人民の心性状態を代表する人物なれば、實に過去と現在の兩時期を連続する鍵鎖にして又生くる鍵鎖なり。

エドワール・ドリュモン 既説の如く往時主要なる新聞紙は一個人の性格を現すを以て存立の要素とし、個人は新聞紙を以て自己の意見を發表する機關とし、且つ之を以て自己の生命の一半と見做せり。エドワール・ドリュモン君 (M. Edouard Drumont) も亦この種の新聞紙を有したる一人なりと謂ふも妨なからん疑もなく

ドリュモンは「リブルバール新聞(Libre Parole)」の生命にして且つ其精神なり。該紙は一般のイズラエル人を腐懲する特別の使命を有せりとし、共和政治の下に在つて財政、政治、新聞の企畫に關し非常に威力を増加せし猶太人は最も其攻撃の衝に當れり。ドリュモンは一八四四年に生れたるが、ナポレオン三世の帝國が管絃鐘鼓の聲に心を奪はれて外界に沸騰する不平の聲を知らず、舞踏踊躍に疲れて漸々死期に近からんとせし頃、少壯の新聞記者は頻に腕を撫して好機を窺へり。ドリュモンも亦その一人なりしが、巴里に於ける文學の空氣方に稀薄にして極めて刺戟し易かりし爲めに之に由つて大に自ら利益せり。その後彼は猶太人を窘迫せんとする狂熱に驅られてその文體の躁暴なること恰も奔馬の如く最初は理論に訴へて正當の辯説に勉めしも忽ち曲筆を以て強て同志を勸説し、卑陋にも直接に人民の僻見と人性の劣情とに訴ふるに至れり。斯くの如く放肆横暴の舉ありしに拘らず、彼は決して文學的の本能を缺く者にあらず、亦文學者たる經路を歩むべき素養を缺けるにもあらず。その夙に著せし文章を見れば十分この説の誤まらざるを證すべし。我老衰せる巴里(Mon Vieux Paris)は其一例なり。彼の

意馬は頗る兇惡なり。狂つて躍らば必ず亂馳して方なし。されど現今にても意馬暫らく眠りて神氣平靜なる時は、思想明晰、智慮深奥にして古雅純良の味を有する論文を立地に草するを得べく、之を咀嚼して毫も辛辣舌を刺す味なし。唯その平生好む所の調理法を以て多量の辣味を添ふるは君の爲め取らざる所にして、この惡癖の爲めその晩年の文章は殆ど指を染むるに堪へず。

猶太人攻撃 エドワール・ドリュモンが猶太人に反對して之に征討の斧鉞を加ふるは一八八九年「佛國の猶太人」(La France Juive)世に出でたるを以て最初と見做し得べし。その中に説く所を以てすれば猶太人は巨大なる章魚より分出する大小強弱無数の觸鬚にして、寛仁なる佛國人の默認するを利として絶えず佛國の生血を吸収し、佛國人の品性を破壊し、道徳の根本たる要素を枯渇しつゝありと、斯く猛烈に猶太人の罪狀を公訴せる爲め公衆は強烈なる感想に打たれ、急にその所論に左袒して猶太人攻撃の事を賛助せり。この一書が斯くまで輿論に歡迎せられしは抑著者の不幸なりき。何となれば彼は之に獎勵せられて遂に猶太人の窘迫を獲乎不拔の理想とし、爾來今日の至るまで彼が有爲の腦漿はこの一溝

渠をのみ流れて他岐に出づること能はざればなり。之に次いで著者は「世界の終末(La Fin d'un Monde)」を公にし、一八九二年には機關紙として「リブル・パロール」を起したり。彼はこの新聞紙を以て最も緊要なりとし、詭激の言を慎み温順の語を用ふるは心性の修養に出づる美德の一なるを忘れ、記事論文の格調次第に野鄙に流れき、奇を好んで狂想を縦にするアンリ・ロシュフォールはドリュモンが猶太人征伐に努力するを見て自らその戦役に投じたり。然るに該戦闘は半途にしてその最初の目的を忘却し、猶太人の腹に刀を刺くよりも寧ろ共和政府の船を操縦する舵手に戈を擬するに至れり。ロシュフォールは本と平民政府を組織するに節を效ししが、其後ブーランゼー黨の起るに及び主義を曲げて之と媾和したり。而して一八九一年中ブーランゼー將軍の自盡したる後、該黨は國民主義てふ名稱を標榜して尙その生命を持続せり。その後ドレーフ事件の騷擾起り、佛國人中幾百萬は猶太人に對する僻見と政友の暴怒とに迷はされて久しく正當の識断を誤りしが、本件の曉より暮に至るまでロシュフォール、ドリュモンの兩雄は均しく猶太人を侵罵彈劾して毒惡の怪氣を吐き、以て互に相劣らざらんと競へり。而して此二

者は獨り猶太人を攻撃せしのみならず、猶太の血液を汲める一士官ドレーフが賤祿の身を以て忽ち聲名を揚げしを快しとせず、更に攻讒の戈を轉じて諸他の士を亂打せり。何となれば此諸士はイズラエル人の遠孫猶太人に對して何等の同情を有せざるに拘らずドレーフの訴訟に臨むや勇敢に正義を唱へて、宜しく公道に訴へ、縝密に虚實を調査すべしと叫びければなり。抑佛國の近世史中該件に關する紙頁は現今の佛國人が多く語ることを好まざるところにして、本と誠に瑣細のことに屬す。然れども人心の騷擾非常に甚しかりしこの時期中、政治宗教並に社會的の僻見に動かされてその識断の明を掩はれたるもの殆ど算なく、その中には品性高潔にして才幹拔群の人士さへ多かりしが、何れも皆眼前の小事件を重大視して鶏を割くに牛刀を用ひたり。これ注視すべき一事とす。且つ又佛國に於ける猶太人征討熱はその後已に冷却したるが、主戰論者の大砲を無効ならしめし原因必ずしも一にあらざるべきも、論者が其目的を達するに急にして手段の何たる事を問はず、先づその効果を有するや否や、正道なるや否やを攻究せずして濫に之を用ひんとせし心情こそ最大の原因たりしなり。

政界の階梯 新聞紙が一度重要視すべき一勢力と認められてより、新聞記者の業務は政治と親密の關係を結べり、但し政治と言ふよりも寧ろ政治家の職掌と言ふを以て當れりとす。この二者の關係は英國よりも佛國に於て遙に親密なり。蓋し高位顯官に登るを以て隨一の目的とする佛國の政客中所期の地位に達する階梯として新聞記者となりし者甚だ多く、若し一々其名を列擧せんには僕を更ふるも尙足らず。嘗に斯道に由つて身を青雲に致せし者の夥しきのみならず、今日まで佛國の立法官に擧げられ吾人の記憶に存する人物を通覽し、希望の顯職に登るに新聞業を利用せざりし人物を其中より摘出せんとする事甚だ困難なり。故に佛國に於て政論家が新聞紙を以て自己の利器とし之を以て自己の人格を廣告する機關たらしめんと欲する時は、自己特有の文體を該紙の特徴として一種の臭氣あらしむるなり。且つ又茲に參考とすべき一事あり。凡そ佛國人にして苟くも論辯の才能と政治の學識とを具ふる者は舌を運轉すると同じく筆を運轉するを得べく、筆端の廻に舌端より鋭き者亦少からず。されど未だ曾て筆力の舌力よりも弱き者はあらず。英國人は之に反し縱令犀利なる辯を有して、演

説に巧なるも、若し一篇の論説を書かんと欲するか、或は意義明晰言辭簡潔にして而も效力ある議論を新聞紙に寄せんと欲すれば、机に對して憂へ、紙を展べて苦む者決して稀なりとせず。佛國人に至りては然らず。思ふに英國人に比すれば作文の本能としも稱すべき天性を有すること多大なりしに由るなり。若し之を疑ふて其證を求むる者あらば、請ふ佛國の新聞紙が極めて瑣細なる事變を讀者に報ずる形式と、英國の新聞紙が同一事を掲載する形式とを比較せよ。英國人の筆に成る者は聊かも文體を必要とせず、用語も亦妥當ならざるを常とす。之に反し佛國の報知を見れば文體甚だ機巧にして、而も斧鑿の痕を露はすこと極めて稀なり。之を要するに其記者は言語の價值を重んじ、適當の語若くは句を擇んで精密に意思を寫すに容易なり。これ明瞭なる印象を讀者に與へんとする者の能く其目的を達する第一要件なり。思ふに佛國の諸學校には今なほ舊風を遵守して古典學を研究せしめ、文章の結構と格調を重んずるの風あり。これ大に其翰墨の才を涵養する所以なるか。然れども其主要原因を考ふるに、國民一般の體中に一種微妙の墨汁ありて、血液の如く循環せるにあらざるなきか。但し佛國人にはケ

ルチック人種を混する事を記せざるべからず。試みにケルチックの一支族なる愛蘭人を見よ。英國人に比すれば文辭を屬すること容易にして且つ流麗快暢なるにあらずや。然れども文辭の巧拙は姑らく之を別とし、天才の著作に就て二人種の優劣を論する時は、英國人必ずしもケルチック人の下に出でず。這般の事を茲に論すれば人或は以て談枝路に涉れりとせん。然れども佛國に於ては文筆の力會てより政界の活動黨派の争闘に大影響を及ぼし、今なほ同一の方面に非常の勢力を有するを思へば、之を爰に關説すること必ずしも無用にあらざるべし。

爲政治家たる新聞記者 往時大目的を懷きて鯤鵬の志を達せんと欲せし名世の政客は、一家の所見を江湖に發表して自己の勢力範圍を擴張する機關として一新聞を獨占するを樞要とせり。これ共和國の建設後一時流行せし慣例なりしも、爾來稍、其趨勢を變せり。然れどもこの流は今なほ全く廢れたるにあらず。或は更に力を養ふて再び盛に行はるゝやも測り難し。要はその局に當る人物の如何に在り。これを例せんにガンベッタは絶大の精力と蓋世の雄略とを併有せし偉傑にして一八七一年自ら設立せし佛蘭西共和國 (République Française) は常にその持

説と政策の辯護者となり、一八八二年病死の時まで繼續せり。共に共和國の陣營に在つて相反目疾視せし勁敵ジュール・クレマンソー君も亦自家の機關として多年「ジュスティス」(Justice) てふ新聞紙を發行し、その手に成りたる論説文幾何なるやを知らず。この他同様の企圖を以て新聞紙を所有せし者なほ頗る多し。而して新聞紙は獨り政客を青雲の高きに推擧する楷梯なるのみならず、又屢、佛國の爲政治家を庇護する避難所となるに似たり。何となれば暫らく雲霄の上に閃きて萬衆の仰望する所となりし政治家、忽ち暴風怒雷に逢て下界に落下するの止むなきに至らば、往々新聞界に身を潜めて鬱憤を文辭に漏らせばなり。例へばジュール・シモン(第三章に見ゆ)は退職の後、タン新聞に厚遇せられて數年間茲に執筆し、一八九六年の死期まで繼續せり。又ガブリエル・アノトー君は一八九八年外務卿を辭せし後、日刊新聞「プレス」に入りて外交事務を論じ、爾來今日に至るまで孜孜矻矻として毛穎を驅使せり。

新聞紙と外交 實際政務に關係し外交事務に従事して顯要の位地を占めし人の中には本と新聞記者たりし者少からず。クレマンソーの内閣に入つて外務の

椅子を有せしピション君(Mr. Piton)は目的を達する方便に新聞紙を利用して遂に成功せし一人なり。君の初め新聞社に在りしや、その文墨多々共和國に利益する所ありしかば、これが報酬として政府は與ふるに外交官の榮職を以てせり。一九〇〇年義和團匪の清國に起りし時諸國の外交官は賊徒に逼られて英國公使館中に圍まれしが、この頃君恰も北京駐劄の佛國公使たり、各邦の代表者と共に一時包圍中に在りき。現時佛國大使として駐劄するカミール・バーニール君(M. Camille Barère)の閱歷に至りては、新聞紙に由りて仕官の途を開き遂に顯職に昇進せし例としてピション君より一層著名なり。君少年にして巴里府に一新聞記者なりしが、平民政府の起りし時之に關係せし爲め一八七一年亂麻の如き事變紛起せし後追放せられて天涯に流寓し、一八七九年の大赦に逢ふて始めて佛國に歸ることを得たり。然るにその翌年君忽ち政府に拔擢せられ、一躍して大使館の書記官となれり。

通俗新聞 吾人屢「通俗新聞」なる語を耳にす。然れども今日この名稱は大にその最初の意義を失ひ、適用も亦從つて甚だ誤れり。元來この名を有せし新聞紙は殆

ど全く巴里市民を喜ばしむる題目を掲載する新聞を指すに用ひられ、その内容は劇場の演藝、珈琲店及び俱樂部の冗談、社會に起りし最近の疑獄等なりき。故に所謂通俗新聞は浮薄輕佻なるを目的とせり。然れども該紙に於て一層主要なる目的は快活にして機智に富み、諷刺的にして趣味の多きことこれなり。快活てふことは這般の新聞紙に於て最も緊要なる性質にして、讀者の需要に應ずる爲め莫大の部數を發行すること多年に及びしは全く之が爲めなり。

フィガロー 通俗新聞の新面目を發揮して大にその販路を擴張せし點に於てヴィルメッサン(Villemessant)一八一二年に生れ一八七九年に死すの功は大に他の諸輩に凌駕す。一八五四年彼の起せし新聞「フィガロー」(Figaro)は即ち通俗新聞の一なり。爾來社會の狀態變遷し、該新聞も時趨に適應する爲め大にその性質を變化し、一般の新聞紙に倣ひて頗る着實莊重の風を裝ふに至れり。然れども人民は今に至り尙一般に之を以て主要なる通俗新聞と思考す。ヴィルメッサンは才幹ある文士にあらざりしも、新聞記者として筆を執るべき天才を具有せり。他人の腦漿を巧妙に利用して事をなし、效を擧ぐるはその得意とする所にして、この德に依り彼

は異人として人に知られたり。彼は又常軌を逸する人物として巴里に著名なりしが、彼の實に人に勝れし所は其識認の力に在りき。詳言すれば車馬、絡繹の康衢及び遊情放浪の社會に浮游する才幹を嗅ぐに敏にして、苟くも其技倆あるを認むる時は直ちに取つて之を用ひき。斯かる紛雜穢醜の境に處するや其中に含まるゝ智愚賢不肖は鋭く彼の腦裡に感じ、恰も電氣が銅線に傳はるが如し。斯くの如く彼は他人の才能を利用すると同時に又大に他人の才能を奨励せしや疑なし。何となれば自己の利益の爲めにすると同時に頗る少壯の後學に利する所あり。後學の輩はナポレオン帝國の初の頃文筆を以て名を著はさんてふ朦朧たる希望を抱き、活身の路を求めんとして暗中に摸索せしが、幸に彼の在るありて之に身を投せり。

ヴイルメツサンの礪石 帝國の遺産として共和國に傳はりたる新聞記者中才學と經驗を兼ねしもの多しと雖、多少にもせよヴイルメツサンの砥礪に逢ふてその才鋒を鋭くせざりしものは實に稀なり。彼が新聞紙の設立者たる經驗は遠く一八四〇年に溯れり。フィガローに次いで出でしはエヴヰマン (Eveinment) にして一八

六五年の設立なり。然れども今なほ存立するは唯「フィガロー」の一のみ。「フィガロー」はポーマルセー (Peter Augustin Beaumarchais) 佛國著名の作家にして一八三二年に生れて一七九九年卒せり。の喜劇「フィガロー」の結婚中に在る賤陋の人物より取りし名にして、この奇名を借りしは却て衆目を引く原因となれり。而して該新聞に促されて遂に身を立てたる小説家、評論家、政論記者はその羽翼已に全くして自ら雄飛するを得るに及び、概ねこの新聞社より飛び去つて新方面に活動したるが、ロシユ、ノールも亦その一人なりき。然れども終生献身的に「フィガロー」の爲めに盡して死せしもの若干ありき。

アルベルトウォルフ ヴイルメツサンの鐵槌に鍛はれたる記者にアルベルト・ウォルフ (Albert Wolf) 一八三五年に生れ一八九一年に死す。あり、本と日耳曼人にして佛國に歸化せり。この外にも日耳曼人にして帝國の頃佛國の政治方面、社會方面、又は藝術の方面に盛名を有せし者若干ありき。ジャック・オッフエンバッハの如きはその一人なり。然れどもウォルフは全く佛國化せし人にして、幼少の時を巴里に費せし爲めその精神氣骨盡く巴里風となれり。已に卷首に於て佛國の空氣は外來の分子を

吸収して之を同化する方あることを説きしが、彼の如きは之を證明する實例なり。その主として聲名を揚げしは新聞記者並に技術の批評家たりしに由り、共和國の最初二十年間巷口に喧傳せらるゝ一人なりき。

アンリー・フーキエー アンリー・フーキエー (Henri Fouquier 一八三八年に生れ一八〇一年に死す)は文學の才横佚して諸種の方面にその思想を播種する能力を有せり。故に之を稱して單に「フイガロー」に隸屬せりと言ふこと能はず。然れども彼は身を終るまで十分同新聞の爲めに盡せり。始めオーギュスト・ヴィチー (Auguste Vitin 一八二三年に生れ一八九一年に死せり)同紙の爲めに演劇の批評を擔任せしが、其後を襲ひしはフーキエーなりき。然れどもその名聲を高からしめし者は主として其手に成りし雜報にして、善く社會の人情を寫し、精巧に是非を判別し、而も輕妙の談話を點綴せり。彼は文學界に永存すべき著作を出す十二分の天稟ありしかども、終生樓々の誠を傾けて新聞界に捧げたり。然れども學士院は遂に其長所を認め果げて之を四十人の中に列せり。その壯年の頃ガリバルディーの黨與伊太利に活動して同國の統一に資せんとせしが、當時彼未だ沈着なる生活をなす

に至らず、東隣の騷擾に激せられてその運動に投せり。

檢閲の壓力 帝國の勃興せし後政府は苛法を設けて言論出版の自由を制限し、政治及び國務の範圍に於て縦に意見を發表することを禁せり。通俗新聞の起りしは幾分かこの束縛の結果なり。この壓力に由り新聞界に衣食する徒はあらん限り浮薄の筆致を極めて讀者に娛樂を興ふるに勉めたり。これ恰も同政府が莫大の金錢を煙花戲に費し、前代未聞の寛典を以て人民の目を喜ばしめ、其結果煙火製造者皆財産を造るべき時節の至れることを信せしと同一理なり。然れどもたゞ輕浮僥倖の風起りしのみならず有害なる精神又之に伴ふて起り、獎勵せんとする目的は達せずして却つて反對の結果を生せり。尤もこの頃オーギュスト・ヴィルモー (Auguste Villenot) シル・モンヌー (Charles Monseu) マルセー・カンソー (Arsène Housay) 等の如く温雅爽快の記者あり。何れも新聞記者よりも寧ろ文人にして、腐爛せる惡風に感染せざりき。然れども之を概論するに政府の方針はその目的を誤りて多數の惡徳記者を養成し、刻薄殘忍なる語の鑄造術を完全ならしめたり。蓋し斯かる惡徳記者は社會の現状に獎勵せられ、實に個人に鋒尖を向けしのみ

ならず、又道徳をも破壊するに至りければなり
 オーレリアン・シヨール 辛辣なる譏刺を以て人を傷つけ徳性を破壊する技術
 はオーレリアン・シヨール (Aurelien Scholl) 一八三三年に生れ一九〇二年に死すの最
 も得意としたる所にして、同時の記者一人として之に匹敵すること能はず、アン
 リー・ロシテアールの辣腕を以てしても猶旗鼓相當ることを得ざりき、彼はヴェルメッ
 サンの補助を受けて名譽を得財産を獲たる少年の一人にして、ポルドー府はこ
 の惨酷なる譏刺家を巴里に貢献する名譽を有せり、否、實は彼その父母の束縛嚴
 重に過ぐるを苦惱に堪へずとして、少年の時潜かにその桎梏を脱して自ら巴里
 に現れたるなり、彼常に自らその少年の頃家人の産業を事とせず只管惡戯に耽
 りしことを語り、獨り喜んで得々たりき、その少時は地方の高等學校に在りしが、
 父母はその子の學業者、進歩しつゝあるべしと思ひしに、彼は學校の正課を等閑
 にして潜かに劇評に心を注ぎ時々之をポルドーの一新聞に寄稿せしが、敏くも
 新聞社はその少年に似ず文筆の才に富むことを認め、曾つて一女優あり、彼が
 父母の家を訪ひ、母を見てその風難に面せんことを求めしかば、母は喫驚して殆

氣絶せんとせり、是に於て母は女優がその子を見んと欲する理由を詰問しけれ
 ば、優答へて曰く、妾の拙戯偶、賢息の讚辭を忝ふす、今日聊か尊容を拜して寸衷を
 達せんと欲するのみ、何ぞ他あらんやと、斯くの如くにして頃來の秘密は忽ち暴
 露せり、これより以後少年のシヨールは家に拘束せられて不愉快の光陰を送れり、
 何となれば其頃新聞に關係して筆を染むるが如きは社交上に好位地を占めん
 と渴望する都人士の賤む所にして、非常に危険なるのみならず亦頗る愧づべき
 事と思惟せられければなり、巴里市より隔りたる諸地方に在つてはこの舊風最
 も甚しかりき、父も亦その子の文學癖を非難して安全平穩なる家門に俄然暗雲
 を引けりとし、頑然之を拒んで心を翻さしめんとせり、然るにオーレリアンに一
 人の同胞あり、彼の才能天縱に出づることを信じ、多年用を節して鏡奩の底に蓄藏
 せし數百フランの金を之に貸せしかば、彼乃ち此金を懐にして潜かに家を走り、
 意氣軒昂征途に就て巴里に向へり、然れども幾裡重くして數百金の在るあり、鞋
 を穿ち笈を負ふて險途を跋渉することを要せず、直ちにポルドーより驛車を雇ひ、
 四輪輕轎として北の方上都に入れり、剛毅にして進取の氣象ある者は天之に報

ふるに榮寵を以てす。進むあつて退くことを知らざる彼は忽ちにして驚くべく發展せり。人材を欸待するに懇篤なる「フィガロー」は頓てその手腕を看破して之を收容せり。ゾイルメッサンは管に江湖に漂流する浮浪者の才幹を嗅ぐに敏なるのみならず、其才幹が自家の目的を達するに適する時は厚く之に報ひて満足を與へき。シールはその性辛辣にしてその機智嘲笑は刺戟性を有し、加ふるに大膽不敵にして凌辱干犯傍に人なきが如し。故に敵を求むること多くして屢、決闘に關係せり。然れども決闘は唯その惡戯の一部に過ぎざりき。巴里に來りたる以來未だ多年ならざるに彼は新聞記者中最も著名の一人となり、剩へ又最も人の畏怖する一人となれり。自ら思へらく、其成に世界と稱すべきものは其區域實に狹隘にして、西はマドレーヌ教會に限られ、極東はポルトサン・マルタン(凱旋門)に盡き、狭少なる空地あつて北方はモンマルトルに延長し、南方はバレー・ロワヤルに延長するのみと。彼は本と日耳曼人なるか或は猶太人なりしこと疑を容れず。然れども巴里に住してよりこの都を以て自己の世界とし、常に巴里の街衢に粘着したること恰も岩に固着する牡蠣の如し。その文を屬するや苦烈なる毒液に筆を染

むるを常とし、眞摯穩當の言辭は毫末も顧慮する所にあらざりき。然れどもその才智恰も魔鬼の暴るゝが如くにして機鋒の鋭きこと殆ど當るべからず。而も文辭の智識ありて用語頗る妥當なる爲めその文章は簡潔にして而も切實犀利、讀むもの之を感嘆せざるを得ざりき。凡そ當時の通俗新聞は殆ど一として一時彼の寄贈を受けざるものなく、決闘も亦その潔く詰する所にして、前後二十回にも及びしが、彼の去つて以來誰人も能く後を承けて其惡辣に及びし者なし。オーレリアン・シールの文辭は新聞界に現れしのみにして、而も瑣細なる一時的の事變と疑獄とを記するに止まり、その性質より言へば文學中生命最も短きもの、なほ蜉蝣の朝に生じて暮に死するが如し。故に之を叙説するに比較的多くの紙面を費せしは稍、その當を失するの嫌なくんばあらず。然れども文辭の燦爛たると同時に害惡人を殺す一種特別の新聞記者中彼が最も顯著なる模範なりしことを記憶せざるべからず。

アンリー・アルチュアン 近年巴里の新聞界に名聲を顯したる人物中、簡潔の文體と腐蝕性の機智とを提げてシールの蹤に追隨するものアンリー・アルチュアン

(Henri Harduin 一八五〇年に生れ、一九〇八年に死す)に及ぶ者なきが如し。少数の語を以て多量の事を述べ、兼ねて又多々言外の意味を含ましむるは其長技にして、マタン新聞に現るゝ其筆は屢、五十行内外の短文となりて濃厚の極に達し、その精巧なること概ね鎗金鑲玉の妙ありき。然れども其志趣劣悪にして浮薄醜穢の病ありし故、其譏刺冷語賤陋にして讀むに堪へざること少からざりき。

アンリー・マレー君 筆を用ふること恰も鋒銳鋭利なる長槍を揮ふが如き才能ある新聞記者はアンリー・マレー君(M. Henri Marec)なり。帝國の下に在て自家の文體を創めし新聞記者は概ねゾルテールを研究して夥しく其泉流を掘みしが、君も亦その源泉を此文豪に得たり。君は強烈なる急進論者なれども深く文學に通じ、無神論若くは不可思議論(吾人は有形の現象を知るのみにして其以上は人智を以て窺ひ知るべからずとする論)を唱ふるも激者を侵犯するが如き鹵莽の舉に出でず、常に哲學的眼光を以て人類の天性と必要とを達觀し、以て其論說の苛味を調和せり。君は斯く過激に馳することを慎みし故、近年の急進論者に同情を寄せず、急劇に嚴烈なる法律を連發して宗教的の制度を一掃せんとする政策は

最もその取らざる所なり。夫れ宗教上の制度は幾百年間漸次に凝成せし者にして、深く人心の奥に入り、動もすれば國家の存亡と相終始せんとす。是を以て深く政治に心を寄せて萬事實際を貴びし近世の怪傑ボナパルトは國家の爲め之を保護するの必要なるを確認せり。往時急進黨に屬せし諸人は當時に在てこそ過激と稱せられ、其中極端に走せし者は最も危険にして國家を傾覆する者と思维せられしに、後進の急進論者は更にその先輩を軼して過去の記念物を破壊し去らんとし、古參の急進家を指して固陋の見を懷けりとなす。マレー君はその見必ずしも固陋にあらずと雖、その智慮ある論說は新進の黨員をして隔靴搔痒の感を起さしめ、老朽の黨員と同一視せられたり。君久しく代議士たりしかども、その實力は政治に在らずして新聞界に在り。人と爲り矮小にして小鼠の如く、舉止靜穆にして一見人を犯すが如き風なきに拘らず、その言論は峻烈にして諷刺百出す。然れども君の論法は嬌嫩快美にして談話人を喜ばしむ。故を以てその汚點を暴露せらるゝ人すら時として思へらく、彼は余の爲めに盡し余に與ふるに利益を以てせりと。

エミールベルジュラー エミールベルジュラー君 (M. Emile Bergera) も亦帝國と共和國との境界を踏え、境上に暴るゝ砲煙彈雨を脱し屍山血河を過ぎたる巴里の新聞記者にして、その生れしは一八四五年なり。君はテオフィール・ゴーチエーの女を娶り、新聞界及び演藝界の空氣中に一生の大半を過せり。而して近世佛國に於て所謂新聞記事を業とするものゝ中君は最もその職に適任なる者なり。如何となれば不規則輕浮にして光輝なる文學の材能を挾むのみならず、已に過去に屬する人民及び事物に關して十分の記憶あればなり。夫れ過去の記憶は新聞記者の商品と稱すべく、縦令苛烈なる譏刺の才あるも、若し筆到らず力足らざる時は、常に其價值を増加す。少年の記者は何事を書かば善く讀者に興趣を感せしむべきやを知らざる者少しとせず、之に反し久しく許多の田園に鎌を入れたる者は多量の穀物を收穫するも精力已に竭盡し、その禾を打して之を苞に入るゝ能はざることあり。君は乃ち此二種の利益を兼有せり。その雅號をカリパン (Cilpan) と稱し常に好んで之を使用す。君は記者なると同時に又戯曲家にして、生涯夢想する所は自家の作曲幸に劇場に好評を得なば其收益を以て安逸に餘年を送るに

在りしが、此好機は際會し易からず、止むを得ず新作の著述に腦漿を絞ることを廢して新聞記者の職を繼續し、既に現れたる批評を聞き或は未だ現ざる批評を慮りて頻に不快の念を抱けり。『フィガロ』を讀む者の中誰か『カリパン』の常に暴怒しつゝあることを知らざる者あらんや。

エブラル君 深思熟慮を費して未だ會つて誤謬に陥らず、文學の光耀を以て愚夫愚婦を眩惑するより寧ろ靈敏なる識斷を以て輿論を感化するを任務とする記者中老練の士と稱すべきはエブラル君 (M. Hebrard) にして、『タン』(Temps)新聞の管理者たること茲に已に多年なり。タンは遠く智慮の光線を反射する新聞にして、世人未だ會つて其輕佻浮薄の癡癡に罹りしことを知らず。

アルツールランク 近ごろ著名の新聞記者中二豎に命を奪はれし者二人あり。一はアルツールランク (Arthur Ran) 一八三一年に生れ一九〇八年に死すにして、一はエンマニエル・アレーヌ (Emmanuel Arène) 一八五六年に生れ一九〇八年に死すなり。この二人は共にガンベッタの莫逆の友にして、且つ大にその補助を受けて出身の路を啓けり。然れどもランクはガンベッタの助言たりしに反し、アレーヌはそ

の保護を受けて臨機應變黨の愛子なりき。ランクは大に隠謀を運らすことを好み、之が爲めに一八四八年の革命に於ける混亂紛糾たる事變の後幾くもなくしてマザーの囹圄に投せられ、數月間政界を離れたり、その常に語りし所に據るに、この間彼はバルザックの傳奇小説及びその他の文學書を読み、愉快に光陰を消して大に自ら利する所あり、若し入牢することなかりせば生涯這般の研究を等閑にしたるやも知れざりしなり、その後一八七一年巴里に叛徒の亂起せし時彼又之に關係せり、然れども今回は巧に辯疏する方法を講じ、困難を排して遂に刑を免るゝことを得たり、彼は政論の記者として強烈に且つ毒惡の筆を縦にせしが、後元老院議員となりて死せり、之を聞く十字軍の士が曠野に横臥して久しく眠り、死期の將に到らんとせし時天國の病床に在ることを夢みて苦痛を慰めたり、と、その歡樂や思ふべしと雖、ランクは斯かる天國の樂よりも寧ろ最高立法府の議席を以て遂に得意の位地とせり。

エンマニエル・アレーヌ エンマニエル・アレーヌは年甫めて二十五にして已に下院の議員となり、その後上院の議員たりし時死亡せり、然れども生涯その最

も力を致せし所は政治界にあらずして巴里の新聞界なり、アンリ・ブーキエーの逝くや彼その後を承け、「フィガロ」新聞に在て劇評を擔任せり、然れども彼は凡ゆる方面に筆を取りし記者にして、原稿を案出するの夥しき事恰も紡績機械が間断なく糸を製出するが如かりき、原稿提出の時間通りて記事社説を案出せざるべからざる時暫らく社友と袖を分ち、一躍して馬車に乗り、口に巻煙草を喫し、一瞬間手を休めて將に書かんとする題目を考ふる爲め頭を後方に傾け、暫らくにして入り來れば印刷室眼前に忽忙たり、機械の響札々たり、囂々たり、四圍の空氣鬱塞爛蒸して惡臭紛々たり、植字工傍に待て原稿を嗅がんとする狀飢えたる狼の肉を得んとするが如きあり、亂筆紙面を走り終るや剪刀は切て之を二三の職工に分賦する爲め已に机上に動かんとするあり、今日も斯くの如くにして明日も亦斯くの如く、日々年々腦働き手忙はしくして須臾も間断なく、最後に腦貧血の膜理に入るあり、膜理より脊背に入るあり、斯くて遂に逆旅の館を辭す、これ實にその生涯と最終なりき。

吾人は已に第三回共和政治の建設以來現今に至るまで勿々に佛國を一瞥し去り、其最も顯名にして特徴を有する人物のみを指摘略叙せり。この他新聞紙を媒介として一時勢力を振ひし人物、若くは佛國の社會的運動及び智力的運動を研究する學者に興味を感せしむる人物その數に乏しからず。若し必要あらばその名を列叙すると敢て難からず。又文學の章に載する著述家中にも新聞記者の列に加ふべき者少しとせず。如何といふに佛國に於ては文學家の生活と新聞記者の生活とは殆ど常に相重なりて、概ねこの兩界に各、一脚を置き、且つ又凡そ鉛筆を業とする者は一般に文士と稱せらるゝ風あればなり。但し方今日刊新聞に寄稿する人にこの名稱を適用する習慣は漸々減少しつゝあり。この他又政論記者の範圍に入るべきや或は評論家の範圍に加ふべきや決定し難き人士あり。アーメジエール君(M. A. Mesieres)及びフランソワ・シャルム君(M. Francois Charnes)の如きこの類にして、二人共に學士會員なり。稍、哲學を遠かる範圍に屬するジュアン・ジョーレー君及びカミール・ペルタン君も亦然り。この二人は新聞記者として著名なれども寧ろ立法家として一層著名なり。

廉價の新聞紙 佛國に於て新聞紙の文學的價值賤劣となりしはその價を低廉ならしめしに基因す。第十九世紀が末期に近からんとする頃まで世人の指を屈する巴里新聞はその價概ね十五サンチーム(一サンチームは一フランの百分一)なりしに方今なほ此價を持続する者を求むれば「フィガロー」[タン]「クロワ」[Gaulois]「ジル・ブラー」[Gil Blas]の四種に過ぎざるべし。この諸新聞は尊嚴自持して唱ふらく、我社は囊裡豊かなる者若くは腦力と教育豊かなる者に訴ふるなり。縦令新聞を讀む希望切なるも不幸にして懷中暖かならず智育足らざる者は之を度外に置くと。現今にては惡弊未だ此四社を脅かさざればと恐らくは彼等も終に一般の流潮に屈するか、傲然とし戦死するか、二者其一を擇ぶに至るべし。ジュルナル・デー・デー「パ」も舊は十五サンチームの價を守りしが、數年以前十サンチームとなし、最高標準と一般標準(即ち五サンチーム)との中間まで降り、當今販路廣くして購讀者の最多數を併呑する者はその價皆五サンチームなり。プチ・ジュルナルは廉價新聞の權輿にして一八六三年に起り、之に續きたるは一八七五年ガンベッタの設立せし「プチ・レビュー」ブリック・フランセーズにして、その翌七六年には「プチ・パリジアン」

現れきゾレエ(Soliel)も亦最も早く現れし者の一にして、當時人皆パリ伯及びオルレアン黨の機關なるを知り、エドワール・エルヴェの管理の下に多少聲價を有せり。エルヴェは一八三五年に生れ、最良の流派に屬する老練の新聞記者なりしが、學士會員の經歷を踐んで一八九九年に死せり。方今五サンチームの新聞紙は羽を生じて巴里の大道を飛び廻り、愚民の争ふて之を求むること蒼蠅の腐魚に集るが如し。

過去數年間新聞紙に廣告する趨勢大に増加せり。佛國の新聞紙が漸々その價を低廉ならしむるはこの趨向と親密の關係あるが如し。

挿畫新聞 新聞紙に繪畫を挿入するは近來の流行にして、多少にもせよ之に倣はざる低廉の新聞は殆ど全く存在せざるに似たり。新聞紙と寫眞術との結婚は之を道徳上より論じて非議するものあれども、日を逐ふて頻繁なること驚くに堪へたり。時好に投じて眼前の利を射んとする探訪者は何れの處に於ても文學的の記者を排擠し、殆ど全く之を新聞界より驅逐し、若し自ら寫眞術に熟せざる時は時好に投ずるに巧なる斯道の專問家と相提携す。然れども佛國には必ずし

も浮遊なる挿畫新聞のみにあらず、淺薄拙劣の寫眞新聞と競争せず、専ら技術の精妙を示すを目的とする老實の挿畫新聞若干あり。是等の新聞すら近年寫眞術の跋扈せる爲め技術上に大打撃を受けし跡容易に見らるべし。夫れ廉價を以て人物景色の眞相を示さんとするには寫眞術は善くその目的を達すべしと雖、死したる器械は到底生きたる名匠に代はること能はず。如何となれば名匠は畫に神あらしむべき心を有し、器械と同様に實物の眞を顯すを得るのみならず、器械にて示す能はざる趣味を添へ得べければなり。今日の趨勢を以て進まば、或は恐る佛國に於て實物を臨摹する技術が木版彫刻と同様の否運に逢ふか、將た又寫眞術の缺點を知悉する畫工のみ研究の目的として之を練習するに止まらんことを、一八四三年に起りしイラストラシオン(Illustration)は今もなほ佛國の挿畫新聞中最高の地位に在り。一八五七年に生れし「モンド・イラストレ」(Monde Illustré)は同範域の出版物中第二位を占む。ラヴィー・イラストレ「La Vie Illustrée」ラヴィー・オー・グラン・テール「La Vie au Grand Air」の如きは掲載する事物の範圍前二者に譲るものにして、その乙は遊戯及び戶外運動をのみ掲載す。又婦人新聞にして主として

衣服、家庭の裝飾等を載するものあり、*フェミニナ* (Femina) はその最にして二週間毎に發刊し、その挿畫緻密精美を極む。

滑稽新聞と諷刺新聞 佛國人は天性機智に富めりと雖、滑稽の才能なしとは英國人の往々口にする所なり。この説の由つて來りし所以を説明するは蓋し容易にあらず。而して英國人の特長とする滑稽は動もすれば牛の如く遲鈍陰氣なる傾向を有し、外國人は斯かる奇癖を十分了解せざるを以て能く其價值を知らずてふ珍論もこの説より起りしに似たり。該説は全く事實を顛倒せり。その實佛國人の滑稽は從來大に英國人の嗜みし所なるや疑なし。佛國の院曲作者、小樂劇作者、その他劇曲に關する諸著家の書籍が既往五十年以上の間連りに英國に輸入せられて劇場に上りたる事實は以て之を證すべし。巴里にて發行する滑稽新聞及び諷刺新聞は悉く皆繪畫を挿入し、その中には滑稽談諧決して缺如せりと謂ふべからず。然れども其滑稽の性質より考ふるにこの種の新聞雜誌を家庭の用に供するは穩當にあらず。これ其大障礙の一點なり。而して佛國の家庭に母となる者は鋭く自己の責任を重んずるを以て斯くの如き新聞紙若くは雜誌は可愛

の阿蝶阿玉に危険なる者と思考す。佛國に於て發行する新聞紙にして滑稽と機智の最も純潔なるは「ボンシ」(Punch)を以て第一とす。その機智滑稽は讀者に娛樂を與ふると同時に高尚なる道徳を尊重するを目的とし、たゞ痴氣ありて邪氣を含まず。全體の趣意は「膝栗毛」流の滑稽と親密の關係あり。此類の滑稽は深く佛國人の品性に浸入す。且つ此美風に多少眞率の分子を混じ、心理學者をして分析せしむれば外面に禮貌を飾る偽善と相對照せん。この種の偽善は該紙以外に往々目撃せらるゝ所にして、羊頭を懸けて狗肉を賣るに異らず。然れども思想を顯すに眞摯穩當の言辭を以てするは社會を感化すべき高き價值を有す。何となれば筆者の誠意誠心に出でたると否とを論せず、高尚なる生活の理想を實行せしむる方法の一となるべく、或は少くともその高尚なる理想を尊重せしむる一法となるべければなり。

滑稽及び諷刺に關する新聞雜誌の歴史を述べんと欲すれば、必ず諷刺畫術の歴史をも併せ述べざるべからず。然れども吾人は之を茲に説述すること能はず。當時佛國に出版せらるゝ滑稽畫新聞中最も古きものは「シャリヅァリ」(Charivari)にし

て一八三二年の設立に係り、發行の時より九年の後「ボンシュ」の別名としてこの名稱を借り來れり（ボンシュは即ちボンチにして、シャリヅアリは躁がしき戯樂の義なり）。吾人を以て之を見れば只笑ふべくして取るに足らざるもの、斯くの如き新聞紙を起すは英國人の首肯する能はざる所なり。巴里より出す「シャリヅアリ」は聯想に富んで趣味多し、然れども往日に比すれば之を讀むもの遙に少し。「ジュルナル・アマッサン」(Journal Amusant) は用意の周到を缺くこと一層甚しと雖、却つて世俗に歡迎せらる「リール」(Rein) は更に新しきものにして、奇抜なる手段により非常の成功を得たり。その掲載する諷刺は衰廢せる文體にして、其滑稽畫の術も亦甚だ振はず。

第六章 建築術

佛國人の天才は美術の諸方面に現れたれども、過去幾百年間の經路を検するに、長久に存続し得べく教訓となし得べくして而も赫々たる光輝ある偉業を現したるは建築の一方面に如くはなかりき。然れども同國の建築に關して、佛國人の天才て、言語を用ふるは畢竟便利の爲めに過ぎず。夫れ佛國の本土北は北海に起りて南は地中海に抵り、東はヴォージュ山脈を限として西は大西洋に盡き、その區域内には幾世幾紀の間石造の建築花瓣爛熳として開き、その建築の種類極めて多般なるに敢てその自然の地形及び天産の草木が變化窮りなきに譲らず。現今佛國の建築術と見做さるゝ一切の構造物を見るに、吾人は同國人の天才が相異なる諸の流脈に走るを認めざるべからず。諸州を遍歴して遺跡を尋ねるに、地方の異なるに従ひ建築の風格氣韻各、その趣を異にして、各自に至完至美の發展を遂げたるを見る。而して之を發展せしめし主原因は各地各州の特殊なる感化力にして、恐らくはこの主因の偶有性もまた大に發展を促せしなるべし。蓋し各州各

地の建築家及び人民は一種の理想を標準として之に目的を向けしが、而もこの理想は最初雲煙の如く心頭に徘徊せしのみにて、建築者自らの確にこの理想の何者たるやを鮮明するを得ざりき。然るに斯道に従事するもの等は諸先輩の遺蹟を追ひ、工夫經營してこの目的を具體的に現さんと務めたる結果、益々鮮明にその理想の性質を悟るに至れり。是に於て吾人は佛國の建築術が何故無限の趣味を有するやを説明するを得べく、又石及び木より成れる美術の寶藏と稱すべきアルサス州(日耳曼に割讓せし部分)を除くも、方今の佛國が何故萬國中に在ても建築の好模範に富み、斯道の研究家に最も有益なる教訓を與ふるやを説明するを得べし。夫れ建築術の研究家が人工の妙に魅せられて一語を發する能はずして啞然驚歎するは、實にこれ人類全體の歴史を語り盡すに均し。この類の好事家が佛國に殆ど曳くや、眞に斯くの如き靈感を受けて鬼鑿神工の妙に一辭を發する能はざるなり。

ゴシック式　ゴシック式(中世紀歐洲諸國の一般に用ひし式にして、拱門の上端彎曲せず尖銳なる者を謂ふ)はノルマンディー地方を除くの外佛國の北半部全般に

見る所にして、主として宗教上の建築物に用ひられたり、尖銳形拱門の始めてこの國に現れしは第十二世紀中にして、同時代より以前に成りたる建築物はこの新式に壓倒せられて概ね消滅し、若くは大に變形せられてその固有なる特徴の全部又は大半を失へり。昔時の建築は皆ロマネスク式なりしが、此頃の人より見ればゴシック式は實に近世風と思はれき。ロマネスク式は紀元三五〇年コンスタンチン帝の頃古代の羅馬建築術に續で起りし者にして半圓形の拱門と穹窿とを有す。然れども興味多きロマネスク式の痕跡は今日なほ所々に見ることを得べく、圓柱の拱斗柱の最上部及び塔樓に於ては之を認むること殊に多く、今に尙存するは修繕を経て破壊を免れしものなり。巴里なるサン・ゼルマン・デー・プレー教會の諸部分は即ち昔時の遺物にして、ダゴベル(Dagobert)佛國の王にして紀元六三八年に死すの時に建ちしものと信せらる。然れども之を概論するにゴシック風は滔々として諸所を披靡し、一旦その根柢を固くせる地に於ては構造一層單純にして裝飾更に質素なる舊時の教會殆ど全く一掃せられき。門又は窓の尖銳式即ち所謂オージヴル式をゴシック式と稱するは甚だ誤解を起

す本なれども、又一種の意味を有する名稱とす。尖銳式は素とロマネスク式より漸次開發せし者にして、或人はロマネスクをも亦ゴシックの中に加へざるべからずと思考す。是に於てロマネスク或は圓形拱門式ゴシックと稱し、中古の新式を尖銳式ゴシックと稱するに至れり。されど一般に所謂ゴシック式は尖銳式のみを指す。この新式の發源地が北部佛國なりや將た日耳曼なりやは頗る爭論の多き點なり。然れどもその何れなるを論せず同じく第十二世紀中ライン河の兩岸にその基礎を固めたるは確實にして世俗的精神を遁世的の僧院に現さず、寧ろ教會の建築物に現したるものと謂ふべく、諸侯及び教會の強烈なる壓迫を脱して漸々自由主義の理想を實現せしに外ならず。ゴシック式の夙に發揮せし精華は、巴里のノートルダム教會に現れて輪奐の美を極む。此建築は過渡期の者にあらず、原始のゴシック式建築にして、顯赫なる考案と完全無缺の雅趣を併有す。該式が完全の頂點に發達せしを知らんと欲せば、アミアン、ジャルトル、ルーアン、ラーンの諸寺院、ルーアンに於けるサン・ウワン教會、此教會は寺觀よりも更に豪壯華麗なり。その外精緻の技巧を凝らしたる許多の高尙なる建築を見るべし。勿論この諸種の

建築は概ね多少その趣を異にし、氣格風韻の全く同一ならん事を望み難し。且つ又その雅致も様々多般にして、人の心は絶えず運動變易し、好尙と理想常に優雅の方向若くは下劣の方向に遷移す。てふ哲理の眞なることを證明す。ゴシック式のこの諸教會を建つるには屢、數時代を要し、最初細尖頂を有する塔を建つる計畫なりし者にして、今日尙尖頂を備へざる儘存在する者多し。恐らくはこれ人間の目的如何に恒久不易なるも到底幾百年間の長きに續く能はざりしに由るなるべし。且つ又其頃に戰亂起伏して寧日なかりし結果、人民は心思を錯亂せられ、經費支出の途は杜絶し、練熟巧妙なる手腕ある者も技倆を試むるに途なく、爲めに前人先輩の劃定せし設計を守りて建築を續行するに由なかりしや必せり。殊に百年戰（一三三八年より一四五三年に至る百年餘年間英佛二國の間に行はれし大戰爭にして、その末期に及び勝利概ね英國に歸せり。その間最も有名なりしはクレンシー、ポリチエー、アジャンクールの諸激戰とす）は最も許多の慘害を佛國民に残せしものにして、ゴシック式に據れる諸處の大教會が本初の設計を妨げられ、業未だ半ならざるに建築の進行を阻害せられしが如きは佛國全般の損害に比し

て一斑に過ぎず。
 故に前掲の諸建築中には既に竣成せし者あり、或は未だ其工を終へざる者あり、且つ又建築家の趣味及び妙想の模様終始一貫して全く變化なき者あり、或は中古の頃建築に従事せる際俄に争戦紛起して人心擾亂し、時に又平和回復して技匠各、沈思熟考に耽り、爲めに構造の意匠時々變易して諸種の美麗なる觀念雜然一建築物中に混合するものもあり、斯くの如く純雜其趣を同うせずと雖、此一切の寺院教會に通じて最も感歎すべきものあり、愉快歡樂の趣ある、荒唐怪誕にして傳奇的の致ある、美麗の感想と狂妄の理想ある、人生の奮闘、生死苦樂の感想あるが如き是なり、その噴水樋の嘴、棒材壁等より突出して柱等を支ふる者(は悪魔の如き醜陋の狀を帯びて人性の野鄙なる半面を形容し、或は純粹貞潔の氣象と天使の如く温和快美なる狀貌とを帯ぶ、これ即ち人間の心中に黑白明暗の原素相抵觸抗爭することを表するなり、佛國のゴシック式建築物は活々たる生氣を有する點に於て遠く英國に在る同種の建築に勝れたり、何となれば前者は後者よりも人間の意思を表章する方法遙に多様なればなり、この式に據れる教會の建

築物を見るに、佛國の建築家は固く其模範たるバシリカム(古代羅馬の教會堂の風を遵守して唱歌席又は高壇の限界を半圓形に作り、之に倣はざる建築物は比較的稀なり。

ノルマン式 ノルマン式(圓形の拱門を有する式は元來ロマネスク式の一種に過ぎずして概ねノルマンデー及び英國に限り用ひらる。始めてこの式を英國に紹介せしはノルマン人種なり、この人種は當時文化の度英國人より高かりしが、ウィリアム王が英國に侵入してヘスチングズに進みし時之に隨從せる海賊隊に混じて共にアングロサクソン人を攻撃せり、之が爲め英國には重大の結果を生じ、建築上にも大進歩をなせり、ノルマンデーの地は今日この式の模範的建築家豊富にして、其中には實に宏莊華美を盡せる者あり、カイン(Cain)に於ける神聖三位一體教會はその一例に過ぎず、然れどもゴシック式の勢力盛にして北部佛國及び日耳曼に根柢を固くするに至り、ノルマン式は其本據地なるノルマンデーに於てすらゴシック式の侵犯を受け、之と戦ひて漸々敗を招けり、故にルーアン(ノルマンデーの區域内に在り)が建築上の倣りとする所はノルマン式の建築にあら

す、却てゴシック式に在り、斯かる状態なるを以て北部歐洲に行はるゝ尖鋭式を創めし者或はノルマン人にあらずやとも思はる。何となれば所々に冒險的の航海を試むる間に許多の新思想を學び、殊にシ、リー島に在る時亞刺比亞人(即ちサラセン人の同々教を廣めて同島に在りし者)の建築思想に感染せしやも知れざればなり。然れども實は今尙未定の問題とす。ノルマン式に主要なる特徴は考案の單純質朴なる點、意匠裝飾の適度にして中庸を失はず、嚴肅にして浮誇に馳せざる點、或る細目に於て琢磨の巧を極むる點なり。琢磨の技を費すは拱門及び其基礎の窈形、圓柱の拱斗、塔樓の精緻高雅なる裝飾に於て殊に著しく見らる。且つ又教會に於ける半圓形の上壇は其後遂にアングロノルマン式に放棄せられしかども、これ純粹なるノルマン式の本色にて、之を見る者敬神的の安心と嚴肅なる平和を得る思あり。斯かる感想を起さしむるは教會の建築に極めて重要にして、最も安全に手段を目的に適合せしめたりと謂ふべし。この論は佛國の南部に行はるゝロマネスク式の建築にも適用す。南部の式は羅馬のバシリカを基礎とし、更に之に技術の工を加へし者なり。

南部佛國の建築 佛國の南半部は北半部に比すれば建築術を愛する人を吸引する力一層大にして、慥に探検の價值を有す。然れどもその至寶と稱すべき遺跡は世人の未だ熟知せざる所なり。何となれば方今は浮遊なる奢侈と快樂とを求むるに急なる時代なるに、南部の名蹟は多く僻遠不便の地に在るを以て、旅行者は、接近し難き地なりとして之を等閑に附すべければなり。人をして驚歎せしめ狂喜せしむべき許多の寶が斯くの如く世人の一顧をも得ざる所以は頗る明瞭なるに似たり。夫れ今日自動車を驅て東奔西走に至便の利を享くる諸輩は、美術の巧致を盡し美麗の極處に達する稀代の珍寶を探尋研究せざる理由として、金錢に缺乏すと言ふ能はざる富者なり。故に南部佛國てふ廣大なる自然の博物館中に交錯する朦朧たる幽徑と紆曲せる荒路は數年以前に比して旅行家社會の遙に多く往來知道すべき理なり。然るに吾人が諸の微候より断定する所を以てするに、益、新奇に益、快速なる旅行器械の流行は古色蒼々たる建築物の如き名跡を探らんとする心を鼓舞すとも思はれず。加ふるに又悍馬の暴るゝが如く狂奔逸走する慣習は往々淺薄輕佻を極むる好奇心を煽動するに止まり、その他何等

の利益をも吾人に與へず、人民の心性状態斯くの如く躁急輕佻なる時は、旅行者は古建築の遺物を探るを以て恰もエゼキエルの「乾ける骨の谷」(舊約全書エゼキエル)の中に在る故事を採檢するが如き無益の業とせんのみ。嗚呼過去の建築は古人が熱望と理想とに酔ひながら幾星霜に亘り徐々に建設せし記念物なり。石を雕んで作りたる這般の書籍を繕きてその内容を研究せんとする本意は實に古人の希望と理想とを會得するに在るなり。此輕躁の徒何ぞ能く此眞理を解せんや。

佛國の南部に在る建築物には無限の快味を含む。これその新機軸を出せしと、その種類多様なるとに由れり。故に娛樂を求めん爲め漫遊する客若し豫め人より聞き知るにあらずんば、次に訪はんとする小都邑若くは小村落が如何なる新奇愉快なる建築を以て我を迎へ我を驚かさんとするやを知ること能はず。これ即ち一々の機軸新にして千變萬化なるを以てなり。且つ又某の廣大なる區域以内に在る諸建築が唯一種の風格のみを有する場合にすら、其風格は種々なる方法を以て様々に運用せられ、建築家の技巧と妙想は建築物の異なるに従ひ個々その

趣を異にす。

オーヴェルギユの諸教會 今試にオーヴェルギユの地を取つて之を例解せん。此地には一種のロマネスク式出現發達し、殆ど全く獨立の別派をなす。吾人は之をオーヴェルギユ式と稱するも妨なかるべし。特種の性質を備ふることノルマン式にも劣らざればなり。此式を代表する模範其數多からず、且つ何れも皆クレルモン・フェーランに於けるノートル・ダム・デュ・ポワ(Notre Dame du Poit)の寺院に範を取りし者の如し。この寺院は第十一世紀以來存立する者にして、始めて十字軍の大々的運動を鼓舞作興せし屋外評議會の開かれしはその位置に極めて近接せり。その最も主眼なる特點は上境中に列する長廊圓柱にて支へたる拱門の許多並列せる者の排列法美麗なると、その部分の外面に在る裝飾華美なるとの二事なり。クレルモン・フェーランに於ける教會は主として第十三世紀頃の建築にして純粹なる北方ゴシック式に據れり。斯く性質の異なる諸物の相近接する例は佛國の諸州に屢、目撃する所にして、之が爲め益、建築上の趣味を添ふるのみならず、その地の景色をして益、畫明的ならしむ。

ペリゴルの圓頂教會 ペリゴルの地にはビザンチン・ロマネスク式の教會少からず(ビザンチン式は一四五三年に至るまで東羅馬帝國に行はれし建築にして、その特徴は圓柱上より拱門を起す點、支柱上に半球形の屋頂を支ふる點、圓柱の上部に精緻の彫刻を施す點、外面を剪修細工にて飾る點なり)是等は皆原形をベリギューに在るサン・フロンの教會(圓頂五個を有す)に取りしこと多く疑を容れず。サン・フロンの教會は建設の後最初の設計に従ひて再建せられしが、當初存せし古物學的の趣味はこの際大に失はれき。その大體の意匠はヴェニス市なるサン・マルクス寺の意匠に同じつく、且二者殆ど同時代に成れり。但し若干の重要な點に於てサン・マルクスの意匠と異なる所あり、圓頂の下に在る穹窿に尖銳形の拱門を用ふる如きは差異最も著しき點にして、該教會が第十一世紀の中葉より以前已に落成せしより考ふれば頗る奇なる特徴なり。

南部のロマネスク式 この種のビザンチン式建築物中には中古時代の初期より存續せるもの甚だ少し、而して今日殘存するものに就て之を見るに、土地固有の産物と思はるゝ者と二三の外國産物と相混合するに似たり。何となれば此快

樂なるペリゴル地方に於ては恰も近隣の地なるリムーザンに於ける如く、將にラングドックを貫通して地中海に延長しギニエン及びガスコニーを経てピリニース山及びビスケー湾に達する廣濶なる平野に於けるが如く、既述の如き南部佛國のロマネスク式は吾人の最も屢目撃する建築にして、又美景を探尋する旅行家に至大なる愉快を與ふる者なり。南部のロマネスク式は根本的に佛國に發生せし一種の式とす。半圓形をなす拱門の上部及びその周圍に發達せしロマネスク式多種ありと雖、人心に至快の感を起さしむると同時に最も嚴格なる感想を起さしむるものは即ち南部の一式なり。宗教(基督教の意義に於ける)に適合する式として南部のロマネスク式に匹敵するを得るもの唯一のゴシック式あるのみ。この南方の式は早き頃に成りしものすら其技術の巧妙遠くノルマン流のロマネスク式に超越す。その故如何となれば殆ど千遍一律に人をして強き興味を起さしめ、男女の肖像を彫刻するに頗る緻密なる意匠を費せると、天上界及び地獄界の活物を示すに當り中古時代の虚想に従ひ人間界の形貌を假り、用ひたるとに由れり。ノルマン式はこの類の熱烈なる技術的の狂想を缺き、建築全體の設

計嚴肅と思はるゝばかり簡素質樸にして、之を緩和する爲め諸の線條と模様を巧に結合して趣味を添へたり。この術に由りて乾燥無味の弊は之を避くるを得たれども、その方法は隱逸遁世的にして人情に遠かれり。教會の彫刻は無學文盲の時代に於て蒙昧なる人民の爲め書籍と同様の效を有すべき者なるに、ノルマン式の加工は當時の人民の必要に適せず、寧ろ隱遁する僧尼の生活に適せり。南北の兩式が斯くの如く雲泥の差ある理由は如何、疑もなく其頃北部の彫刻家は人間の形體を石に彫むに怯にして全力を此に注がざりしに、南部の諸家は既に此技に於て著しく上達したるに由る。

上述の諸建築に在つて吾人は其圓柱の上端に層をなせる所に前記の如き奇怪なる人物を見る。是等の像は上壇の外面に加へたる線狀の裝飾と相混合し、又は最後審判日等の光景を巧妙に案出組織して之を浮彫にす。南部佛國に於けるロマネスク風の教會には幽深なる門路の上部に位する鏡板屢、斯くの如き彫刻にて掩はる。而して此種の人物は往々比例の宜しきを失ひて奇怪異様の觀を呈す。近代の批評眼を以て之を見れば、北方蠻族の風羅馬の文化と混淆融合して權衡

を失へる點屢々として指摘すべし。然れども極めて表情に富み、極めて意味を含蓄し、且つ極めて人生の自然を表示す。天上と人間の觀念は奇怪に混合してこの中に現れたり。清淨なる神靈界と野鄙なる物質界の觀念とは巧妙に接着してこの中に現れたり。斯くの如く表裏相反する二物を對照する方法の天真爛漫なるは即ち興趣の存する所にして以て新に美術を生れしむるに足るべく、兼て又未だ嚴正なる規律に束縛陶冶せられざる自由の精神を以て擅に情感を表出せんとする慾望熱烈なりしを證するに足るべし。

斯くの如く美麗にして且つ永遠に眞趣を起さしむべきロマネスク式の教會は佛國の南部諸州に亘りて到る所に散點す。其中には已に零落の狀態に在る者なきにあらず。然れども迅雷風烈に似たる幾百年の暗黒時代を通じ水火相容れざる教條の衝突激戰血を以て南部佛國の山野を洗ひし亂世を凌ぎ、以て奇怪にも今日まで完全に保存せらるゝもの亦多し。此類の遺跡は屢、遠隔の寒村に見る事を得べく、其宏大美麗なる壯觀は斯かる僻地に在る蜂房の如き憫むべき陋屋と相對照して奇異の思あらしむ。而して此精微なる彫刻を有する建築は實に蜂房

を家とする蝨々たる野人を教化し、其靈魂上の必要を満足せしむる爲め存在するものゝ如し、這般の邊陲に於て這般の美觀を發見する人は意外の地に意外の趣味を感じ、その樂や必ず尋常一樣の場合に此類の遺跡を見たるよりも大なるべく、恰も稀有の愛すべき花が荒漠の地に咲けるを發見せしが如き思あるべし。窮郷に偏在せる這箇の教會は又大海を航行する旅行者の等閑にする美麗なる島嶼の如く、其淋漓たる趣味は心魂彷彿として蓬萊に遊ぶの感あらしむ。

堡壘狀の教會 南部佛國のロマネスク式には堡壘の如き形狀を有する多くの教會を包含し、古物學者の大に興味を感ずる所にして、之を營築せし時代の生活狀態及び風俗習慣を學び得べき好資料なり。この種の造營物起りし時代には兇惡なる暴民往々大群をなして來侵掠奪し、彼等に對しては教會の聖殿も人民の避難所たるに足らざりき。故に人民は此蠻敵の暴威を避けんが爲めに豫め之が防禦法を講じて絶えず不虞に備へざるを得ざりき。堡壘型の教會は即ち斯かる時代に於ける防禦の必要に應せん爲め宗教上の築造物を適用せし最も奇なる一例證とす。此般の教會中には今なほ昔時の儘吊門(城門)に懸垂せる扉にして敵

至らば之を下して侵入を防ぐ者を藏むる室を存し、巨大なる石造の塊となりて一個の門上に堆をなす。教會の窓は甚だ狭く、恰も銃眼の如く高く地面を離る。其主要なる防壁は屋根の上に舉げられ、遺物中最良の標本に至りては凸凹の牆壁と突出する雉堞壁下に蟬集する敵に燃火木石等を抛下する用に供すを具ふ。又巨大なる方形の塔閣ありて中堅たる牙城の用をなし、敵若し他の處より侵入すれば此處に籠りて最後の抵抗を試みしなり。此種の建築物中最も古きものは第九世紀及び第十世紀の頃に築造せられ、奪掠轉戦する蠻民の不意に來攻する事あらば、土地の住民を避難せしむる所とする計畫なりしや疑なし。而して地中海に面する地方はサラセン族の海賊に襲撃せらるゝ恐れ殊に多かりしを以て、如上の模型中最も古き教會は主として之を地中海の沿岸に求むるを得べし。其他は皆之に後れて建造せられしものにして、第十三世紀の頃羅馬天主教徒とアルビゼンシズ教徒とが久しく血戦してラングドックの地を荒廢せしめしが、此大戦亂の時防禦の爲め起せし者なり。アルビゼンシズは第十二世紀の後半より第十三世紀の初葉まで佛國の南部に存せし諸、の宗派の總稱にして、各、多少其

教條を異にせしも、共に皆法王の大權を否認し、羅馬教會の教儀及び儀式に反對せしが、天主教會は久しく之と戦ひし後遂に殘虐暴戾の手段を以て剿絶せり。此名稱はアルビー一名アルバの市の内外に此種の教徒最も多かりしより起れり。此戦亂の繼續せし頃一般の危険に醒覺せられて起りしはこの建築の式にして、全く新機杼を出せるものと稱するも妨なし。アルビー市の寺院は此式の建築中宏壯華麗なる標本の一なり。その建ちしは此騷擾せる時代の末期なりしと雖、猛烈狂暴にして法王の教理に疑惑を狭む精神はこの頃にも尙空中に浮動したるを以て、天主教徒が遲延ながら之を起したるは實に必要に逼られたるなり。この一建築は佛國の南部に散在するロマネスク式大教會の一なれども、更に早き頃に起りし單純質樸なるバシリカ型の教會に比すれば設計及び運用の方法全く相異れり。蓋しバシリカ型は此頃益々進歩發達して教會外部の壁面に至るまでその墓と花とを張開し、人をして宗教に信頼する念を起さしむると同時に平和の擁護者なることを思はしめたり。

佛國の藝術復興 第十五世紀の頃一般の藝術復興せし時建築術に於ても復興

運動起り、その波動先づ伊太利に起りて西部歐洲の各處に瀾蔓せり。然れども佛國に於ける此種の運動は他地方に於けるものと其性質を異にするのみならず、實に又獨特の新意匠を出せしこと恰も英國に於ける運動に彷彿たり。但し英國と著しく相異なる點あり。英國に於ては個人の住宅に充つる建築物に於てのみ新機軸現れ、セントポールス寺の如き異例なきにあらざれども、是等は唯伊太利の復興派を模擬せしものに過ぎず。之に反して佛國に於ては新機軸の現るゝ所主として寺院教會の建築に在り。藝術復興は新思潮の横溢滾沸したるもの外ならずして、中古時代の因循姑息なる思想の組織を全然破摧せしが、佛國に於ける名聲高き若干の教會は此新浪浪の最も洶湧せる頃に建築せられしなり。巴里府に在るサン・ユスターシー教會(Saint-Eustache)は最良なる標本の一にして、ゴシック式に倣へる巍峩たる優美の穹窿と古代の羅馬風に摸したる拱門とを調和し、新擬古的の趣味は全體の構造に於てよりも附屬緒部の裝飾に於て最も多く現る。然れども此式は佛國に勃興したる後久しからずして其特徴たる生命と精神とを失ひ、高雅なる新擬古風は醜惡賤陋なる擬古風即ちロココ式(Rococo style)第

十七八世紀中に起りたる建築及び裝飾の風にして細密の點に至るまで煩はしく華美なる文飾を加へしものに壓倒せられき。コロコ式は第十七世紀より第十八世紀に亘り頻りに復古的の運動に勉むる間に醜惡なる痕跡を各處に残し、古時より存する數多の教會は無殘にも其惡風に感染して往日の面目を失へり。この愚劣なる運動は延いて第十九世紀までも繼續せしが、その時一回強烈なる運動新に起り、斯かる美術壞亂主義を排斥して古代の記念物を保護するに勉めき。其中勳功最も傑出せる者は建築家ヴィオレール・ルデュク(Violet Leduc)にして、斯人の聰明英智なる指揮に由り中古時代に起りし數多の教會及び封建時代の諸城砦は保存せられて荒廢の運を免れ、且つ又コロコ式より回復せられて原初の意匠に復れり。

史的記念物の保存 前世紀中には又政府が歴史的の記念物を保存する目的を以て常置委員會を設立し、建築物の爲め最も健全なる革新運動を始め、之よりして凡そ「史的記念物」の一と見做されたる建築物は安全に保護せられ、無智愚蒙なるか或は實益にのみ眼を眩ます地方官憲に「改修せらるゝ危険を免れたり。然

れども遍く國中を尋ねれば、古物學上及び歴史上趣味頗る津津たる教會及び其他の造營物にして「史的記念物」中に加へられざるもの其數尙多く、從て又拙劣の手段を以て補綴修繕せられ若くは下賤なる雜用に供せらるゝ恐なしとせず。佛國には中古時代及び藝術復興時代の美術的建築今なほ存するもの極めて夥し。然れども歲月の推移は自から之が荒廢を促し、人情の冷淡は之が保存を怠り、賤陋の意思は之が價値を損し、無二の至寶は毎年幾分づゝを剝削せらる。その一例を挙げんに、グレンシーの村の上方なる丘山の頂に立つて凡そ六百年間存續せる古き風車ありしが、グレンシーの戦の時英國王エドワード第三世がこの風磨場の壁に於ける小孔より戦を見しことあるを嫌ひ、之が所有者なる農民は一時誤りたる愛國熱に狂して之を破壊せり。これ纔に數年以前のことと屬す。勿論當時佛英二國間の關係其以後の如く温かならざりしを以て、その心情稍、恕すべきものあるに似たれども、這般の理由を以てこの狂舉に出でしは亦惜むべからずや。この風車は敢て美術上の記念物なるにはあらずりき。然れども亦史的の「一記念」にして、政府は之を保存すること甚だ容易なりしなり。

現今の建築術 方今佛國には技倆ある建築師決して少しとせず。彼等は善くその業務とする技術を通曉し、如何なる式の建築を求めらるゝも能く其任を全うする手腕を具備す。されど自家特有の式に至りては絶無なり。然れども事々物々概ね皆斯くの如くにして、獨り建築家のみに存する病にあらず。思ふに建築上の天才は業に已に竭盡したるか。若し然らずんば社會の狀能復た此種の美術に一家の機杼を出さしむべき刺戟を與へざるなり。要するに當今の建築家は殆ど職工同然のものとなせり。今や教會の建築は殆ど全く其命脈を斷てり。これ佛國には教會の數多きに過ぎて教會參集者の需要を超ゆるが爲めにして、亦已むを得ざる所なり。而して其中には漸々零落壞頽せんとするもの少からず。何となれば偶、多年の戦争と革命の變亂を免れしものも今は冷淡なる人情に放棄せられて一年一年に自滅の途に向へばなり。

郊外に在る別業にして非常に廣大なるもの若くは頗る華麗なるものは佛國に於て常に之を「シャトー」(Chateau)と稱す。この類の建築中藝術復興主義の式に倣ひて建てし者殊に封對時代の城砦を巧に補綴せし者は、目を娛しめ心を恍惚たら

しむるのみならずその土地の光景をして繪畫的の趣味を帯び傳奇的の風致を含ましむ。然れども近時建築したるシャトーはその趣味一般に醜惡にして且つ屢、野鄙の風を有す。優美淡泊の趣は固よりこの類の造營に見ざる所にして、吾人は却つて優美の假面を被り淡泊の僞裝を着くるか。將た又相調和せざる諸、の原素を雜然混淆して外觀の華美を衒ふを認む。而して斯く外觀を飾るは人目を喜ばしむる意思に出でたるにあらず。寧ろ粗笨尨大の虛威を以て愚人を壓服せんとする意思に出でしなり。又方今佛國人の別莊中模範とすべき者如何と問はんに、概ね皆見る人をして精巧なる彫刻と彩色とを加へたる玩具の家屋なるかと思はしむ。今佛國の別莊なるものは目を眩するばかり虚飾を徒費して其醜惡の狀人に不快の感を起さしめ、巴里を周匝する美麗なる風景は之に汚さるゝこと恰も惡意を以て優雅なる繪畫に墨汁を塗刷したるが如き觀あり。近世倫敦の負郭に散在する別莊を以て之に較ぶれば、技巧の妙致と趣味の高雅實に同日の論にあらざるなり。

第七章 畫工

技術社會 今日佛國の繪畫術を語る者之を裁縫術以上の者と思考すべからず。何となれば何等かの學派若くは系統ありて勢力を振ふにあらず、苟くも新機軸を有する畫工は力能ふべくんば新に自家特有の流儀を開きて大名を揚げんとする傾向あるを以てなり。要するに各家其自得する長所を發揮し流俗に違へる奇癖を表示するに十分の自由を有し、毫も一般に承認せらるゝ標準に據る事なく、典據を尊重する事なし、是を以て何れの展覽會に於ても吾人は繪畫術癡狂せしにあらずやてふ感想を禁すること能はず、然れども幸にして自から又實着嚴正の繪畫ありて、真正の理想滿幅に飛動し、稍、人意を強うするに足れり。此理想こそ内部の心界と外部の自然界とを秘密に一致融合せしむる要素にして、單に人物景色の形狀と色彩とを模寫するのみならず、其以上に趣味あり、神あらしめ、人をして真正に且つ快樂なる感覺を起さしむ、斯くの如く解釋せば繪畫術は徒に線畫の描寫と着色とに練熟するが如き淺薄なるものにあらざるを知らん、而

して煖床器若くはその他平凡の器具を巧妙に畫けるを見て、其眞に逼るを感嘆する人と、平凡なる事物動作を生くるが如く説述せる文章を文學と稱すべしとする人とは、其種類こそ相異れりと雖、その心地は同一の水準上に在り。

近代の趨勢 既往の三十年間若くは更に長き間は寫實主義との全盛時代にして、この時期の初の頃佛國の文學は大にこの二勢力に侵略せられしが、その餘波は同國の繪畫術に及びて猛烈にその趨向を變せり、然れども繪畫界に在つてはこの新思潮の勢力甚だ廣からず、依然として理想主義を固守する畫工少からざりき。此濁流に感せし者は少年の畫工中に多かりしが、恐らくは時世と推し移る必要に壓迫せられしに由るか、若し然らずんば艱難辛苦して蹉峨たる嶮路を涉らんよりも、寧ろ近くして平易なる路に由り名譽を博せんと努力し、良心に訴へずして成功を急ぎしに由れり、嶮路を越ゆるは其耐忍力を證する所以なること、彼等豈に之を知らんや、然れども此輩の中には似て非なる詐術を以て眞成の技術とせし誤解を悟りし者なきにあらず、且つ又耐忍と勵精と誠實との三者を堅實の立脚地とし、技工の妙を以て高尚なる地位を占めたる諸家は、猥りに一時の

流行に狂せず、昔時畫聖の傑作が公開の博物館及び個人の陳列室に幾百年間保存せられて尙其面目を存するを見、其經驗と教訓を欣慕尊重して急がず躁がす徐ろに所信の徑路を進めり、而して世の具眼者もその價值を看破して之を棄てざりしのみならず、筆を携へ繚を卷て教を其門に請ふもの亦乏しからざりき。蓋し名家の地位に到らんと勉めし少年にして正確なる識斷を有する者は思へらく、技藝家の成功は世人の注目を引くの一事に存せずと。かの名利に汲々たる畫工は畫題の採擇其宜しきを待す、或は猥褻なるあり、或は野鄙なるあり、下劣なるありて、偏に衆目を繪畫と自己とに集むるを目的とし、幾世幾年の經驗に由り漸次開發し來りたる原理と定説を等閑にして唯凡俗の喝采を博せんと勉む、而して俗眼を喜ばしむる惡畫を求むる爲め、嗚々狂談しながら展覽室に蟻集し、畫工の獨斷にて附したる代價の當否を誰人にも諮らず、唯妄見を以て取捨撰擇せんとす。群民は、却つてこの種の繪畫を喜んでその意を得たりとせん。譬へば新に紙を壁に貼らんとするものが豫めその模様と色とを精査し、以て自己の嗜好と要求に適するや否やを検するが如し、繪畫を求むるに至りても亦同一般にして、

購買者は唯己れの嗜好と要求とを標準とし、美術を見ること恰も什器の如し。技術の妙なくして徒に革新を謀る者は技術の毒害なり。第三共和國の存立日已に久しく、其間吾人は佛國に於て多く斯かる害蟲を見たり、これ其間社會の空氣爛敗し、此醜惡なる蟬蛸が速に孵化發達するに最も便なりしに由る。此類の蟬蛸は今もなほ空中に飛颺し、愚民の眼前に羽翼を鼓するを見る。國民協會(Société Nationale)及び佛國技藝家協會(Artistes Français)の最近に催せる展覽會はこの標本の殊に夥しき者なりき。この部類に屬する醜類は世人に強ひて自己に注目せしむるを專一の目的とし、この目的を達する爲めには如何なる手段をも顧みざるなり。

直感主義 直感主義(Impressionisme)は共和國の建設後佛國の畫工社會に起りし最も特異なる運動なり。一八八〇年より九〇年に至るまで美術家の間にも評論家の間にも之が爲めに劇烈なる議論起り、空論を以て美術を云爲する徒輩に喋々費辯を費さしむる題目となれり。畢竟この主義は一種の革命運動にして思想の種類異なる諸他の革命運動と同様にその結果極端に馳せて最惡の弊を生ぜり。

然れども直感主義とし云へば、全然之を非難駁撃し、淺薄卑陋にして攻究する價値なしとするも亦偏僻の見にして、恐らくは不學愚昧の譏を免れず。この主義の務むる所は視覚に映する光景を畫くに一新法を用ふるに在り、即ち自然界より入り來る印象を寫すに當り從來襲用せし慣習に據らずして一層直接の方法一層寫實的方法を用ふるに在り。主義としてはこれ決して咎むべきにあらず。夫れ技術は長く固定して止むこと能はず、其方法及び目的は常に變化して絶ゆる時なし。何となれば技術は人の心と相關聯し、人の心は絶えず變易浮動してその思ふ所感する所を表示する新方法と新手段を求めんとすればなり。直感主義は形式に拘泥して學派の規則を墨守するを快とせず、之に對して反旗を擧げしものなり。景色畫に妙を得たる大家の諸作は何れもこの主義を疏外せざりき。コロ
ー(Corol)一七九六年に生れ一八八五年に死す及びターナー(Turner)英國の畫工にして、一七七五年に生れ一八五一年に死すの二家は最も之を妙悟せり。この諸前輩は光線及び空氣と物象との關係を熟視してその自然を寫し、煙霞の濃淡、山岳森林の明暗遠近をして眞に逼らしむるに勉めしかば、羽翼遙に小なる後進の雜

輩は之に獎勵せられ、先輩を凌ぎて高く翺翔し、人力の及ばざる難事を遂げんと試みき。日光を生寫して眞に人目を眩せしめんと勉めしが如きその一例にして、眩するが如き日光は唯色を以て之を暗示するを得べきも決して眞實に之を寫すこと能はず。技術縱令巧妙の極に達するも自から一定の限界あり、之を超越し造化の妙を欺くは人力の企及すべからざる所なり。然るに直感主義の畫家は此界限を認むること能はず、極めて粗暴に胡亂の色彩を濫用し、その結果事物合宜の精神は全く打破せられき。これ技術家の目的が最も邪惡の徑路に錯行せし時代にして、今は幸にこの時期已に過去に屬せしが如し。然れども最近開催せられたる展覽會に於てすら往々孟浪に彩色を施せる繪畫を陳列し、若し烟煤に蒸せる眼鏡を用ひて之を見るにあらずんば視覚に疲勞を覺ゆるの恐ありき。

直感主義の學理 然れども直感主義の運動は學理上一定の原理ありて之を基礎とす。故にこの學理を理解せずして猥りに批評を加ふるものは猶不適當の武裝を以て戦ふが如し。夫れ太陽光象の七色中に含まるゝ純粹無雜の原色は唯三のみ。紅、藍、黃これなり。その餘の四色は即ち間色にして、畢竟この三種の原色の相

混合して成れるに過ぎず。而して幾百千年の昔より畫伯の用ひし方則は合色板の表面に顔料を混合するに在りしが、恰もこれ造化が合色板を用ひずして天然の顔料を混合すると同一一般なり。マネー(次に見ゆ)は直感主義に酔ふこと決してその門生等の如く甚しからざれども、なほ且つ確信して思へらく、舊來の法に準據して彩色を作るは根本的に不當にして自然の理に悖れりと。是に於て彼始めて純粹の正色を直ちに畫絹の上に施し、以て諸の色彩をして可成的自然の色彩に近からしめんと勉めき。又技術室に於ては北方より光線を入るゝを古來の慣例とせしが、マネーはこの定則に従はず、可及的多量の日光を直接に畫絹の表面に引かんと試みたり。彼は如何ばかり幽邃陰暗の處に於ても直接の光若くは反射したる光あることを認め、之をも亦模倣して畫に示さんとせり。又マネーよりも一層學理的ならんことを勉めしものあり。この輩は純粹なる正色を相混和する爲め大にその光彩を失ふことを悟りしかば、乃ち二色又は三色の顔料を混合する代りに、相隔てゝ之を並列する工夫を案出したり。例へば若干の距離を隔てて望み見る時光澤ある綠色を視覺に映せしむる目的を以て各、一定量の藍色と

黄色との細線を隔て並ぶるが如き是なり。加之この類の革新家は更に論歩を進めて曰く、凡そ目を以て物象を見るや決して鮮明にその輪廓を認めず。その線畫は多少朦朧たるを常とすと。この原理を闡明し且つ眞成の技倆を以て實地に之を適用し得たる大家はクロード・モネー君(Mr. Claude Monet)一八四〇年に生るなり。その他この新主義に熱心なる諸家少からずと雖、たゞ革命熱の熾烈なる外に實際の妙處を發揮すること甚だ少く、淋漓たる鮮血と灼爍たる火焰を畫きて自ら足れりとせり。煙霧冥濛たる倫敦の空氣はモネー君の強く嗜好せしところ、思ふに濃氣は輪廓の不明を重んずる學說を助くるに由るなるべし。而して君の倫敦に來るや造船場、國會議事堂等を寫して奇絶の繪畫を作りしが、多數の人は之を見てターナーの畫法が狂亂せしにあらすやと思考す。その筆に成りたる「ルーアン寺院」も亦驚異すべき作にして、幻想の結果として實に驚異すべし。凡そ直感主義の畫家は朦朧たる眼を以て物象を見るを常とし、恰も普通の人が疾病に悩まざるゝ時又は睡眠せる間に幻想を感ずると同様なり。これ吾人の奇怪とする所とす。アルフレード・シスレー(Alfred Sisley)一八三九年に生れて一八九九年に死すも

亦同病を患ふる畫工にして、今人の所謂丹青の分割(英語 Division of the tone)はその大に練熟せる所なりき。丹青の分割とは本原の正色を相隔て、並置するを謂ふなり。

クールペー及びマネー　ギスターグクールペー(Gustave Courbet 一八一九年に生れ一八七七年に死す)はエドワール・マネー(Edouard Manet)と同様に直感主義を標準とせし技工なりき。マネーは本とクールペーの門生なり。然れども其師に比すれば直感主義の徑路を走ること遙に遠かりき。クールペーは堪能の良畫伯にして、牡鹿闘争の圖を畫きしを以て知られしが、平民政府に關聯せし爲め累を其身に及ぼし、終に配所の鬼となれり。マネーは極端なる寫實家に過ぎずして、新奇の方法に由り顯著なる繪畫を製出するに汲々たりき。彼は強烈なる畫工にして、勉めて時好に投ずる物象を寫すに力を盡せしはその撰擇せし題目を見て之を證し得べし。その名譽未だ揚がらざりし頃彼は已に巴里全都の人をして嘖々批評を加へしめしが、これ穩當眞撃を無視すと思惟せらるべき繪畫を出して一世を驚かせしに由れり。その葡萄酒を飲む人及び麥酒を飲む人の畫(The Bon Bookと稱

する者の如きはこの類の作中人の最も善く知る所にして、その寫實主義が卑陋なりし好例なり。而して彼の畫好く時好に投じて大に名利を博せし爲め、之に倣ふて俗闊の寫實畫を作りしもの多く輩出せしが、思ふに此輩未だ必ずしも誠實に此流派を感歎せしにあらざるべし。一八七〇年の大亂にマネーは練筆を棄て畫筆を抛て武器を取りしが、この他給事を業とする者にして包圍中巴里と運命を共にせしもの尙多し。天縱の畫才を懷きしアンリ・レニール(Henri Regnaud)は其著名なる者にして、ピザンツアルに於て日耳曼軍の戦線を横過せんとする時空しく敵手に斃れたり。時に年僅に二十八歳。マネーは國民守備隊の砲兵に加はり、其司令官はメーソニエー(Missonier 一八一一年に生れ一八九一年に死す)なりき。メソニエーは極めて精細なる注意を以て微密の點を寫生せし畫家なり。故に又之を寫實家とする事を得。然れども後來起りたる寫實主義は頗る之と趣を異にす。何となれば新流派は下劣野卑に流れて而も虚構の力貧しければなり。

パスチアナルバジユ　今爰に約說せし直感主義の運動は往々卑猥に陥るの病ありしも、善く其弊を離れて高雅の地歩を占むる寫實的畫家中名聲の高かりし

者はバスタアンルバジエ (Bastien Lepage) 一八四八年に生れ一八八四年に死すなりしが、惜いかな不幸短命にして不歸の客となれり。「野草」(Les Foin)、「村落の愛情」(Amour au Village)等は田舎の風趣を寫す景色畫にして、技術に丹誠を凝らせし模範として興味を有す。近來の畫家多くは實景を寫すに熱中することその度を過し、ルバジエの如く刻苦勉勵する風蕩然として廢れたり。彼の筆に成れる田舎の畫はミレー (Millé) の筆の如く詩趣を帯びず、單に人目に映する儘田野村落の生活を精巧に直寫し、理想を調和して興致を添ふることなし。

宗教の寫實主義 寫實主義の傾向は宗教に關する繪畫に於ても現れたるが、概して言へば、その結果は憐むに堪へたり。近時佛國の畫工は新なる意匠を以て死せる基督磔刑の景況、その他類似の題目を撰んで之を描寫せんと力めしが、この輩思へらく、この種類の繪畫に巨腕を試みたる雄大の諸先輩は可及的實際を現さんとせずして頑固に理想を描きたりと、是に於て彼等は前人の誤謬を證明するのみ目的として新に機軸を出したること明かなり。然れどもその作出せる畫を見るに秋毫も吾人の近世目撃する實事に符合する所なし。故を以てその實

際に遠かれる點に至りては前人の作と多く撰む所なく、又之を以て近事の人に好奇心を起さしむるに足らず。敬虔の念に篤き人は斯かる浮薄なる繪畫よりも寧ろ古例に倣て神聖高尚の人物を寫せる畫を見て満足するなるべく、又敬虔の念を没却せる徒は全く此般の畫に冷淡なるを以て、其實際に遠きと近きとに論なく眼を之に注がざるべし。古代伊太利の畫伯及び藝術復興時代の畫伯の畫けるが如くんば、聖ペテロは神聖の威風を具へ、一見してその使徒たることを感ぜしむる儀容あり、之に反し近世畫家の作を見るにブリタニー又はノルマンディーの漁民に勞瘁たる狀貌を有し、一時間二フランの賃錢に甘んじて喜んで網を投する賤夫の如し。聖書に記する所より察するに、ペテロは實に這般の容貌なりしやも知れず。然れども實狀描寫の問題に興味を寄せて之を重要視し、全く神聖の趣味を等閑に付するは吾人唯近時の畫工に於てのみ之を見る。且つ又之を概論するに近時の畫工は丹精術中の至難なる此種の畫に至妙の手腕を證せんとする精神に乏しく、寧ろ革新の精神を以て新奇を衒はんとす。これその作に神なく威なき所以なり。

凡そ宗教上の繪畫は神聖にして畏敬すべき筆致を具へざるべからずとは一般の承認する所なり、然るに寫實主義を宗教畫に適用する畫工はこの理想を破却し、爲めに宗教的の感情を排除する傾向を生ず、神聖なる人物の繪畫は宗教的の感情及び傳説と一致してこそ始めて其神聖なる價值あるなり、若しこの感情を去り傳説を蔑視せば、吾人潜かに斯かる繪畫の存在する所以を解するに苦む、されど一定の限度までは寫實的の畫法と理想的の目的とを一致せしむること敢て不可能なるにあらず、其好模範は吾人之をジャム・チッソー君(M. James Tissot)一八三六年に生れ一九〇二年に死すの諸作に見るを得べし、チッソー曾てパレストアインに在て堅忍なる研究を積み、その神聖の史話に關する圖を書くや大に人心を感動せしむべき生意を含む、且つ又彼の技術がこの方面に於て大に發展せし所以のものは、世上の所謂寫實主義を愛する精神ありしが爲めにあらず、寧ろ古を愛する心ありしに由れり。

ウイリアム・ブーグロウ 佛國に於て近世鴻名を有する畫伯中その練熟なる手腕を宗教畫に試みし者多し、然れども概ね全く失敗に歸し、今日まで耐忍して志

望を貫徹せんとするもの幾くもなし、堅固の精神を持続せし一人にして而も失敗せりと稱すべからざる者はウイリアム・ブーグロウ(William Bouguereau)一八二五年に生れ一九〇五年に死すなり、彼は少しも近時の寫實主義に感染せず、専ら往時の流派を守りて一直線に進めり、然れどもその筆意は觀者をして屢、美の感覺を起さしめしに拘らず、寫實主義の繪畫を見る時と同様なる興味を起さしむる能はざりき、ブーグロウは宗教上の畫題を嗜好せしのみならず、神話に關する畫題も均しくその嗜みし所にして、壯年の頃には最も然りしが如し、塚窟中に聖シリアを葬る圖はその諸作中最も強烈にして最も明瞭に特技を現すもの、一なりしが、今より五十餘年前政府はルクセンブルグの博物館に藏する爲め之を購求せり。

歴史畫及び裝飾畫 方今歴史畫は衰頹して甚だ流行せず、その位地恰も文學界に於ける史詩の如し、これこの種の畫を需要するもの少きが爲めにして、従つてその供給多からず、品質も概して粗悪なり、博物館には時々之を要すれども、その餘の所には之を用ふること少く、縱令裝飾用として之を用ふることあるも、公股

の大建築物に於て廣大なる壁面を飾るに過ぎず。然れども衰微しながらもなほその命脈を保つは幸にこの一事あるに由れり。若し然らずんば繪畫術中最も貴重なるこの部門は廢滅して復た起つべからざるに至るべし。

ジ・ペーローラン君 特に裝飾用に供する目的にあらずして、今日尙歴史上の題目に専心なる諸畫伯は廣大なる木匡を用ふるを誇りとせず、斯かる抱負を恣にせずして別にその才思を證明す。現在佛國に生存する其種の技術家中翹楚と稱すべき者は老畫伯ジ・ペーローラン君 (M. J. P. Laurus 一八三八年に生る) なり。中古時代の戲劇的事變又は史話を捕へ來り、その起りし時代と場所の人情、心性、色彩を寫して之を近世の人に示す技倆は、同時の諸家一人として君に企て及ぶ者なし。而して之を觀るもの皆その畫を以て眞實の光景を摸寫する者と思惟す。勿論斯かる感想を起すは大に畫家の手腕を信するに基因せりと雖、觀客をして這般の感あらしめんには非常なる虚構力を要すること固より論なし。膚を慄せしむべき慘劇の恐怖と悽愴なる狂信的の感情を強烈に理會し、併せて又規矩節度に準據して正當の手段を慎重に用ふるはローラン君の獨り専らにする吟

域にして、君の墨を摩することを得し者甚だ尠し。この老畫伯の妙處は何れに在りや。曰く、既に陳述に屬する歴史を遮り蔽ふ曖昧の一隅を揚げ、美麗にして且つ戯曲の趣味ある實事を吾人に瞥見せしむる是なり。而してその實事は吾人の教育に必要なして又吾人の好奇心を満足せしむるに必要な諸事を暗示す。君が一八七二年の展覽會に陳列せし恐怖すべき畫は、法王スチヴン第七世がその先輩なるフルモサスの屍體を發掘して法王服を着せしめ、以て嚴格にその罪狀を譴責する圖なりしが、この一事に由りローラン君が歴史畫家として高尚なる技能を有すること始めて異論なきに至れり。スチヴン第七世が先輩を譴責する顔面の狀貌には眞に畏敬すべき嚴威を具へ、情熱猛烈なる第十世紀の法王を寫して善くその眞を得、その光景は力あり、恐怖すべき趣あり、巍々として崇高なり。近世史の紙上に於てローラン君は多く興味を感せず、從てその虚構力を喚起すべき事變を見ず。然れどもナポレオンの爲めに不正の待遇を受けて不遇なるアンギアン公の死を寫せし畫は人の熟知する所なり (Duc d'Angliem 公はブルボン公の子にして温順の人なりしが、一夜臥褥中に在る時突然ナポレオン第一世の

手下に捕へ去られ、一八〇四年三月廿二日ヴァンセンヌの森に銃殺せられき。裝飾用の歴史畫にはローラン君の大作あり、聖ベヌヰエールの生涯と題し、巴里の合祭廟に存す。

ピユヴィー・ド・シャヴァンヌ 近頃故人の班に入りしピユヴィー・ド・シャヴァンヌ (Pius de Chavannes 一八二四年に生れて一八九八年に死す)は裝飾的の歴史畫に超群の技能を有せし大畫家にして、合祭廟の壁に於ける歴史畫及びソルボンヌ神學校及び巴里の府廳に於ける歴史畫を見れば、其遒勁なる描畫と調和宜しきを得たる着色とを研究するを得べし。彼の畫くや廣潤なる表面に自由の筆を運用して其格律綽々氣韻を含み、眞に人をして驚嘆せしむ。彼は本とアッリー・セッフェル (Ally Schaffer) 有名なる佛國の歴史畫工にして一七九五年に生れ一八五八年に死すの門下に在りしが、又クーチュル (Courte) の門にも贊を取り、正格の規律に従ふて薰陶を受けたり。然れども決して形式規律の間に規々たる拘泥家にあらざりき。寫實運動の波浪は彼未だ曾て之を感せず、徹頭徹尾理想的の畫家として一家を成せり。然れども美術は心の辨識作用に由り物象自然の純雜を分ちてその精華を發

する者に過ぎずとは彼の平生尊重せし眞理にして、古雅の韻をその畫に添ふる間にも未だ曾て之を忘れざりき。壁上の畫は彼の夙に嗜好して自から禁する能はざる所にして、佛國に在る多數の公設建築物を裝飾する繪畫多きを見れば、如何ばかりその所願を遂げしやを知るに足る。合祭廟に於ける「コンコルデアとベラム」(Concorde et Balam)は一八七〇年の戦争以前に畫きしものにして、その他同一の筆に成れる大作中にはアミアン博物館に藏する「アヴェ・ピカルディア・ヌートリックヌ」(Ave Picardia Nutrix)あり、リヨン府に於ける「神聖の樹」(Le Bois Sacre)あり、巴里の府廳に於ける「夏」(L'Été)等あり。而して彼が佛國の裝飾術に及ぼせし感化は頗る重大なり。

ポール・ボードリー ポール・ボードリー (Paul Boilly 一八二八年に生れ一八八六年に死す)は巴里の大劇場に雄渾の壁畫を寫せし人之に由り湖海に放浪する騷客に至るまで善くその名を知れり。帝國の末葉より共和國の初期に亘り佛國の美術界及び智力界に各自多少の裨益を貢獻せし人物中、彼は一個の畫工として嶄然屹立せり。その人となり強烈なる性格を有して材幹また凡群を凌轢しけれ

ば、その父がヴァンデーに於ける木履製作工なりしに拘らず、笹雪の下に奮勉刻苦せし功遂に空しからず、身を微賤に起して一世の名譽を負ふに至れり。父の始めて彼の爲め一雙の木履を作りて之を穿たしめし頃は未だ寸毫も才能の見るべきものあらざりしが、而も將來開發して馥郁たる香氣を放つべき命數を有せり。一八五〇年ポードリー及びブーグロアの二人は羅馬留學の懸賞を得しかば、巴里を發して伊太利に游學し、官費を得て相共にヴィラ・メヂチ(羅馬に於ける佛國美術學校)に研學せり。然れどもこの少壯の二畫工は將來その才能各別に發達し、各個の特性大に相懸隔せり。ポードリーの羅馬府に在るや専らラファエル、チシアン、コルレヂヨの如き大家、即ち婦人の美點を顯すに最も著名なりし畫工の諸作を研鑽したり。故を以てこの諸大家の感化はポードリーの畫に於て歴々之を認むるを得べし。その羅馬より歸りて未だ久しからざるに展覽場に陳列せし彼の繪畫は忽ち衆目の注視する所となり、就中女優マドレーン・ブローアンの肖像は頗る繊麗の作にしてその世評最も高かりき。而して肖像畫はポードリーの材能最も著しく現れし所なりしかども、彼は之を以て足れりとせず、更に高く飛翔して

雲漢を衝かんと欲し、雄渾の大作と裝飾の繪畫に腕を奮はんと熱望せり。是に於てこの大抱負を抱きながら彼は今一度羅馬に遊びしが、その目的は主としてマイケル・アンゼロの筆格を攻究するに在りき。ポードリーが聰明穎悟なりしは是に於てか證せらる。何となれば彼はその志望を達する方便として一層廣く一層高き教育の必要を感じければなり。自ら足れりとして益進むことを知らざる輩は到底大業を遂ぐるに能はず。ポードリーが雄大の計畫を成就する爲めに預め十分の準備をなせしこと夫れ斯くの如し。雄大の計畫とは巴里の大劇場に裝飾畫を施すこと是なり。該劇場は技術の巧を極めたるもの、その全體より見れば快樂と謂はんよりも寧ろ巨大に且つ機巧を盡したる建築にして著名なる建築師シャル・ガルニエー(Charles Garnier)一八三五年に生れ一八九八年に死す。が將に之を完成せんとせし時、偶、普佛の戰爭爆發して佛國の技術界を暗澹たらしめ、恰も噴火山の破裂して臭煙灰塵が花弁爛熳たる溪澗に充滿せしに似たり。故にこの劇場は一八七五年に至るまで開かれざりき。ポードリーはこの名譽の劇場に偉大の筆を揮ひて勤勉竭力すること前後八年を費し、その畫は奇想を凝らして

蘇魂の力を有すると同時に美麗なる理想を含み、而も筆力強くして鉛丹の間に生動す。宜なりボードリーの聲聞全都を動かせしこと。

ベンジャマン・コンスタン Benjamin Constant 一八四五年に生れ一九〇二年に死す。は虚構畫の名手にして、物象を類集排列するに妙を得。設色の意匠また清醇秀雅なりき。その始めて繪畫の道に入るや歴史畫家として大名を顯揚すべき望早く已に現れたり。その作馬哈麥の君士坦丁堡に入る圖は一八七八年の展覽會に陳列せられ、歴史畫界に一新生面を開きたり。この畫はツールズの博物館に掲ぐる目的を以て買収せられしが、之に續いで出でたる、ウルバン第二世ツールズに入る圖は地方歴史の紛亂せる光景を再活せりと稱すべき傑作なり。而して南邊に偏在せるこのツールズ市は往昔美術の保護者としてその名を四方に馳せたるが、コスタンのこの畫一度世に出るや同市は昔年の名譽を維持せんと欲して之を買収し、今日吾人は同市の會議所に於て之を觀るを得べし。然れども東洋諸民がその室内を裝飾する華美なる帷帳及び奢侈なる色澤を摸倣するは、中年の頃より晩年に及び彼が好んでその畫才を振ひし所、

而して肖像畫は智力を費すこと少き割合に巨額の報酬を得ること確實なるを以て、諸他の才幹ある畫工と同様に心をこの方面に用ふること轉た深かりき。未來の觀客に教訓を與ふると同時に娛樂をも併せ與ふる技術即ち歴史畫の描寫に至りても彼は卓絶の妙技を有せり。その筆に成りしヴィクトリア女王の肖像及び英國現今の王妃がなほ太子の妃たりし頃彼をして寫さしめし肖像は共にその傑作中に數ふべきものとす。コンスタンは又裝飾畫の競争場に上りてその技に成功せしが、就中顯著なる者はソルボンヌ學校、巴里府廳、巴里の新オペラ・コミック館の壁畫中に之を見得べし。

裸體畫 裸體畫は丹青術の一分派にして、從來佛國の畫工が最も熱烈なる精神を以て研究せし所なり。然れども彼等の指を之に染むるや往々見る者をして嘔吐の感を起さしめたり。今男子に就て之を論ずるに、四肢五體善く發達して全體の均衡を得、何れの筋肉も太く逞くして凸出隆起し、而も又一局部をのみ絶えず使用せし結果と思はるゝ過肥の弊なくんば、折かる身體は造化の妙工を現す華麗の一物と稱すべし。又女子に就て之を論ずるに、肉色紅を潮して彎曲婉柔に、而

も頭腹手足善く對稱して理想の模型に近きものは實に天工に成れる極美の一物と謂つべし。然れども美を感ずる強弱は之を見る人の理想の高下に關係す。人體の美感は殊に然りとす。所謂美麗の理想はその何處より來れるにもせよ、心中に蘊藏する秘密の一にして、而も全く修練に由りて生ずる者にあらざるは確實なり。此理想を満足せしむるは困難の業にして、之を破壊散乱せしむるは容易なり。而も平板に流れて奇處なきも亦この理想の喜ばざる所なり。現今吾人の目撃する裸體畫及び裸體彫像は一般に平凡にして、未だ世人の嗜好を満足せしむるに足らず。是に於て繪畫術及び彫像術に於ては世俗の好尚に投ずる目的を以て合宜の範疇を踰越し、傍若無人に怪腕を振ふて裸體畫又は裸體像に添ふるに猥褻の致趣を以てし、純粹なる審美術より高雅の趣味を除き去て人を動物の水準に近づけしめんと努力せり。彫刻家、ローゲン(第八章に見ゆ)はその責最も大なる者とす。然れども本章に於て論すべきものは繪畫術なれば、今は茲に彫刻術に論及せざるべし。凡そ展覽會の催しある毎に裸體を顯す美術を見ること多く、已に長歲月を経過したるに拘らず、その間眞成に美を現すもの甚だ稀なりき。之を要

するに寫實主義に醉狂して慎むことを知らず、筆意野鄙にして禮文を失する傾向は疑々として増加し來れり。然れども方今佛國に在る畫家は裸美人を畫きて野鄙の感を起さしめず、而も強烈に理想の美を觀者の視覺に印象する方法を知道せり。

ジージエーネー 裸體の美人を畫きて人を恍惚たらしむる魔術に長ずる者はアルサス州の出身者ジージエーネー(J. J. Henner 一八二九年に生れ一九〇五年に死す)なりき。アダムとエバとがアベルの屍體を發見する狀を寫す畫は良好の成績なりしを以て、之が爲め彼は二十九歳の時羅馬游學の懸賞を得たり。彼が技術界に手腕を試みたる範圍は廣大ならざりき。然れどもこの狹隘なる限界内に在つてその作出せし丹青は屢、精美の極致に達せり。その凡ゆる技能を傾盡して専ら容貌と形狀の完全を期せしこと、譬へば近時の詩家が短詩を作るに當り語を鏤め句を鍛ふが如く、その意思幾分か茫漠にして揣摩推考の餘地を存し、その中に極めて幽微精巧なる詩趣を含む。然れどもその趣意の明瞭を缺くことを嫌ふものは唯一事一物の意義を明示して之を筆に指すが如くなるを望む輩

に生れ、現時の畫工中老手の一に數へらる。一九〇八年に開催せられたる佛國美術家展覽會にはその筆に成りし一畫陳列せられて非常なる喝采を得たり。君は必ずしも裸體畫のみを専攻せしにあらす。されど全力を盡くしてその手腕を試みしは常にこの種の畫にして、その世に知らるゝも亦主として婦人の容貌と肉色とに心を潜むるに由れり。婦人の裸體を畫くに君は殆ど常に高雅と理想とを主眼として可及的純粹の畫を得るに務めたり。然れども世上には這般の畫を以て高雅端莊に過ぐと思惟し、却つて君が夙に畫けるものを嗜好する輩あり。これ昔年の作は頗る卑猥の趣味を含みたる故にして、下劣の徒は寧ろ之を以て佳とするなり。一八六八年に展覽せられたる「紅色の褥床に在る婦人」の如きは即ち此種に屬する裸體畫の一例にして、華美は則ち華美なれども、吾人その肉慾の趣致多きを憾とす。君はゴデヴ、夫人(Lady Godiva)に興味を寄せ、頗る大膽の筆を以てその裸體を畫きしが、この畫は今藏してアミアン博物館に在り。ゴデヴは英國マーシャの君リオフリックの妻にして非常に寛仁の譽ありき。リオフリック初めその所領コヴェントリーの市民に苛税を課せしに、美麗にして且つ婦徳高きゴデヴは懇

にその非を諫めしかば、夫曰く、汝能く裸體の儘馬に跨りて市中を騎行しなば則ち重税を免せんと。夫人乃ちその言の如くせしかば市民之を見るに忍びず、盡く窓戸を鎖せりといふ。君又巴里の府廳に壁畫を試みしが、合祭廟に懸れる「聖デニス説法の圖」に比すれば更に人目を喜ばしむ。

ジ・エルゼローム 火山の熔岩に埋没せしポンペーの古都(在伊太利)を發掘せし結果古代の繪畫術に光明を放ちしが、丹青の技に其影響を受けし者恐らくはジャン・レオン・ゼローム(Jean Léon Gérôme 一八二四年に生れ一九〇四年に死す)に若くはなかるべし。故を以て世人之を呼んで新ポンペー派の畫家と稱せり。其作「闘雞の圖」(Combat de Coqs)は一少年と一少女なる二人の希臘人が闘雞を見る狀を寫し、久しくルクセンブルグ博物館に陳列せし爲め其生涯の作中世人の最も熟知する所にして、之を見ればゼロームが古法の靈感を受けしこと容易に知り得べし。此畫は一八四七年始めて展覽に供せられしに、忽ち其道勁嶄新にして深く古人の旨を得たることを知られき。この作を出してより後多年の間ゼロームは古代の歴史及び神話より許多の畫題を取つて之を粉描せしが、アミアン博物

のみ、エンネーの筆格と書法は全く自得に出づる所にして自から一家を成す故にその筆に成れる繪畫は何れも皆諸家幾百千の作と別格にして如何に多數の間に在つても之を識別すること極めて容易なり。裸體婦人を顯してその後景に陰暗幽邃の簇葉を書き、その上に一點の天空深藍色を呈する狀を寫すは彼の大に好みし畫題にして、幾度か反覆之を書きてその分布非置常に殆ど同一轍に出でたり。蓋し明暗濃淡の配合同一時に起るは南部歐洲に於て往々吾人の見る所にして、未だ之を目撃せざる者或は謂はん、エンネーの此繪畫は自然の眞を顯す者にあらずと、而してエンネーの畫實に其眞を寫す者なることを悟らざるなり。然れども歐洲の南方に於てすら日没の後明暗の二者一時に相映寫するは毎夕必ず見得べき事にあらず、エンネーは深き陰影中に在る裸體畫に象牙の如き白色の光澤を付與し、以て觀客に恍惚たる幻想を起さしむ。彼は異教者の想像に出でたる神女を生かしめ、同時に之をして十分貞節の風を具へしむる筆力を有せり。又彼の才能は均しく基督教及び聖書の理想を描寫する場合にも適合せり。故に南方森林の光輝ある陰影中に美麗なる少女を寫せる畫は之をマグダレン若

くは貞操なるスサンナーに變ずると難きにあらず。マグダレンは初め淫蕩の婦人なりしが、後基督に感化せられし者。又スサンナーは紀元前六百年頃ジュアキムの妻にして貞潔を以て聞えし者。

アレキサンドル・カバネル アレキサンドル・カバネル (Alexandre Cabanel 一八二三年に生れ一八八九年に死す) はエンネーと同様に帝國の下に鍛鍊を受けし畫工なり。而してその毫を揮ひし長歳月中裸體畫を以てその名を鳴らせし大家の一たりしも亦同様なり。その「ヴィナス誕生の圖」はルクセンブルグ博物館に藏する爲め政府の買收せしものにして、ヴィナスは美と戀愛とを司る女神、筆力剛健、筆痕秀麗の大作と稱すべく、苟くも美術に志ある者は善く之を知れり。然れども宗教及び歴史に關する畫題を壁上に試むるに至りては其成績甚だ舉がらざりき。合祭廟に於ける「聖ルイの生涯」はその一例にして、之を同種類に屬する絶妙の諸作に比して大に遜色あるを見るべし。巴里府廳に於ける十二月に配當せる寓意畫は如上の場合よりも一屏多く盛成を受けて筆を揮ひしものとす。

ジュール・ルフェール君 ジュール・ルフェール君 (M. Jules Lafeyre) は一八三六年

に生れ、現時の畫工中老手の一に數へらる。一九〇八年に開催せられたる佛國美術家展覽會にはその筆に成りし一畫陳列せられて非常なる喝采を得たり。君は必ずしも裸體畫のみを専攻せしにあらす。されど全力を盡くしてその手腕を試みしは常にこの種の畫にして、その世に知らるゝも亦主として婦人の容貌と肉色とに心を潜むるに由れり。婦人の裸體を畫くに君は殆ど常に高雅と理想とを、主眼として可及的純粹の畫を得るに務めたり。然れども世上には這般の畫を以て高雅端莊に過ぐと思惟し、却つて君が夙に畫けるものを嗜好する輩あり。これ昔年の作は頗る卑猥の趣味を含みたる故にして、下劣の徒は寧ろ之を以て佳とするなり。一八六八年に展覽せられたる紅色の褥床に在る婦人の如きは即ち此種に屬する裸體畫の一例にして、華美は則ち華美なれども、吾人その肉慾の趣致多きを憾とす。君はゴヂヅ、夫人 (Lady Golliva) に興味を寄せ、頗る大膽の筆を以てその裸體を畫きしが、この畫は今藏してアミアン博物館に在り。ゴヂヅは英國マールシャの君リオフィックの妻にして非常に寛仁の譽ありき。リオフィック初めその所領コヴェントリーの市民に苛税を課せしに、美麗にして且つ婦徳高きゴヂヅは懇

にその非を諫めしかば、夫曰く、汝能く裸體の儘馬に跨りて市中を騎行しなば則ち重税を免せんと、夫人乃ちその言の如くせしかば、市民之を見るに忍びず、盡く窓戸を鎖せりといふ。君又巴里の府廳に壁畫を試みしが、合祭廟に懸れる「聖デニス説法の圖」に比すれば更に人目を喜ばしむ。

ジ―エルゼローム 火山の熔岩に埋没せしポンペーの古都(在伊太利)を發掘せし結果古代の繪畫術に光明を放ちしが、丹青の技に其影響を受けし者恐らくはジャン・レオン・ゼローム (Jean Léon Gérôme) 一八二四年に生れ一九〇四年に死すに若くはなかるべし。故を以て世人之を呼んで新ポンペー派の畫家と稱せり。其作「闘雞の圖」(Combat de Coqs) は一少年と一少女なる二人の希臘人が闘雞を見る狀を寫し、久しくルクセンブルグ博物館に陳列せし爲め其生涯の作中世人の最も熟知する所にして、之を見ればゼロームが古法の靈感を受けしこと容易に知り得べし。此畫は一八四七年始めて展覽に供せられしに、忽ち其遒勁嶄新にして深く古人の旨を得たることを知られき。この作を出してより後多年の間ゼロームは古代の歴史及び神話より許多の畫題を取つて之を粉描せしが、アミアン博物

館に藏する「オーグスタスの百年」及び「ポルドー博物館に懸れる酒の神と愛の神」の銘画は其最なるものとす。此より後彼は題目を一層新しき歴史に取り健腕を用ひ始め、遂に近世の生活状態をさへ畫くに至れり。ネー元帥の逝去及び「假裝舞踏會の歸途」の如きは此時代の作なり。其後者は一婦人が争論の原因となり、二人の假裝舞踏者が温暖なる室を出で、舞踏の服粧を着たる儘罪々繚亂たる雪中に在て婦人の面前に決闘する状を描寫す。一層強く戯曲的に三個の人物を寫せる畫を求めんとする蓋し容易にあらざるべし。ゼロームは「ポール・デラロシー」(Paul Delarocque 一七九七年に生れ一八五六年に死す)の門に出で、その師が伊太利を漫遊せし時之に随伴せり。彼の最も多く繪畫を出せしは共和國建設以後なりしかども、最良の作は帝國の頃に畫きしものなり。其漸く老境に向ふや筆格愈々硬固にして乾燥に傾き、構想力も亦薄弱となれり。

エリードローネー エリードローネー (Elic Delannoy 一八二八年に生れ一八九一年に死す)は共和國の紀元以後尙久しく生存せしも、ゼロームよりも長く帝國の下に畫工として立てり。現今巴里の舊王宮に藏する羅馬の害毒は最も感歎すべ

き繪畫にして、剛健の筆意滿幅に充滿し、觀る者をして畏怖戰慄せしむ。彼の畫く所は概ね神話に關するか、諷諭的なるか或は宗教に關す。而して元來嚴正なる舊格律に従ふて薰陶せられし故、終生忠實に之を遵奉し、諸の新運動靡然として技藝界を擾亂せしも、彼を動かす能はざること恰も波浪の巉巖を踰へて走るが如かりき。曾て合祭廟に粧飾畫を寫さんと勵精しつつありしが、業未だ全からざるに筆を抛て澆亡せり。人若し此廟に至らば彼の畫きし「聖ゼヌヴィエール」が住民に抵抗を勧むる圖の筆力を研究するを得べし。而して近世の肖像畫家中彼は至高の名手に列すと雖、他種の繪畫に於ても卓絶の技能を挾めり。

ギユスター・ヴモロー 神話の畫工としては、ギユスター・ヴモロー (Gustave Moreau 一八二六年に生れ一八九八年に死す)の門牆を廢する力を有するもの少かりき。彼常に獨居棲遲を好んで俗群に交ることを嫌ひ、黨同伐異の精神を以て團結するは最もその蛇蝎視する所、斯くて紹生繚素に親んで熱心に經營を費せり。而して富贖なる構想力を以て久しく古人の詩趣を味ひ、その結果を繪畫に孕ましむ。故にその畫は都雅秀麗にして而も知らず穢らす畏敬せしむる氣象を含む。其作、イ

デバス及びスフィンクス、ハイドラを殺すハイキュリーズ、プロメシウス、ガラチアの如き畫題は今人の陳腐として興味を寄せざる所なり、ハイデバスは希臘人にして獅身女面の神スフィンクスの謎を解き、其セベスを劫掠せんとするを止めたり、ハイキュリーズは怪力を有せし半神の勇士にして、九頭を有する怪物ハイドラを殺せり、プロメシウスはハイキュリーズに援はれし神にして、人に火を用ふることを教へ、その他建築、算數、天文、牧畜、航海、醫方、卜筮等を傳へたり、ガラチアは海に住みし女神なり、然れども彼の筆に成りし諸作は今なほ存續す、而して現今にてはこの古風の繪畫再び起るべしと思はるゝ、徵候を見ざれども、今後世人の復た之を嗜好する時節來らざるを必せず、モローの繪畫中其筆意豪膽無双と稱すべき者の一はヨーロッパ神が牡牛の背に跨る圖にして、ルクセンブルグ博物館を通覽せし各國の漫遊者が熟知する所なり。

レオン・ボンナー君 近世繪畫を業とする者往々一部にのみ局促せず、諸の方面に筆を下して衆體を兼ねんとする者多し、レオン・ボンナー君 (M. Léon Bonnat) も亦此種類に屬する大家なり、斯くの如く畫界の全局面を席卷せんとする畫工類

々として輩出せしより各、其得意専門の技に應じて之を分類すること轉た困難となれり、何となれば往昔の畫家は歴史畫の描寫を専攻する者あり、裸體畫に力を肆にする者あり、動物畫の妙所に至る者あり、肖像畫に心を碎く者あり、其他各自の好む所に従ひ一種若くは二種の技能を以て門戸を張るを常とせしに、今の學者は其趣味多端にして諸流を躡括し諸技を兼備せんとすればなり、然れども凡そ競争劇甚なる世に處して成功を全うせんと欲せば可成的多方面に涉ることを戒め、人智の一小部面にのみ全力を集中して一技一能の精妙を期せざるべからず、斯くするの必要未だ今日の如く切なるはなし、ボンナー君は佛國の肖像畫家にして、此類の大家として其聲名の喧しきこと已に多年に及べり、然れども君はたゞ肖像畫の名工としてのみ立たず、其才能は綽々として餘裕ある者の如く、歴史畫、裝飾畫、宗教畫、其他諸種の方面に靈腕を試みて多く非凡の逸品を出し、而も藝術界に鳴ること歳已に久しきも、畫伯として未だ人後に落ちしことなし、君は一八三四年を以てペーヨン(佛國の南部ピリニース山脈の北部に在る富裕の商業市にして、ビスケー灣を距ること三哩)に生れ、少年の時をこの故山に過せ

り、これ恐らくはその最初西班牙の畫工マドラゾに師事せし所以なるべし。その後君はレオン・コニエー (Léon Cognie) の門に入りたりと雖、その筆法は依然として舊師の遺響を存し、今日に至るまで常に西班牙派の特徴なる酸澁の味を保存し、兼ねて又華美の着色を施さんとする傾向ありき。君又少壯の頃久しく羅馬に遊學せしを以て、伊太利生活の鮮麗と其周囲の景象の明媚とは自から其畫韻に感じ、早年の作に一種の雅致を帶ぶるもの多し。宗教及び東洋の風俗に關する畫題も亦君の好んで圖畫せし所なり。一八七四年に成りし、十字架上の基督は裁判所の需に應じて畫きし所なりしが、其の後除去して用ひられざりき。何となれば最初は法廷に立つ者として其前に手を舉げしむるを例とし、恰も英國の裁判所に於て聖書に接吻せしむると同様に宣誓の價值を有せしが、佛國の法廷には遂に此儀式を廢し、宣誓は全く宗教的ならざるに至りければなり。此より後、ヨーロッパの圖展覽會に現れて頗る世を驚かせしが、その後ルクセンブルグの博物館に掲げらるゝ榮譽を得たり。此一幅は繪畫として實に傑作なりしかども、看る者をして斯かる像を畫きし所以を解する能はざらしめき。何となればボンナー君は細心

注意してヨーロッパの真相を現し、赤裸憔悴せる狀を示せりと雖、人は之を見て聖書に記載するヨーロッパを思惟せず、寧ろ襤褸拾收夫の老耄せるものと思惟すればなり。又君は裝飾畫に於ても毫を濫ほし、合祭廟に於ける、聖デニスの圖及び府廳に於ける、美術の守護神の圖は即ちその作なり。されど一點一拂濃密に過ぐる君の筆は斯かる場合に適せざるが如し。肖像畫の粉描に至りては則ち然らず。其沈重なる落筆は善く此技に適合し、過去二十年間處々の展覽會に出でし肖像畫にして君の落款あるものゝ中には筆勢飛動して眉目生くるが如きものありき。大僧正ラヴィゼリー (Cardinal Laviezie) 一八二五年に生れ一八九二年に死すの肖像は其最も秀逸なる者の一なり。其頭は亞弗利加の總管長たりし此偉人の剛毅にして實際的なる性格を寫し得て韻致の健雅最も觀るに足るべく、其深紅色の袈裟は君の特異の長技を現す好材料にして傳彩鮮澤人目を眩せんとす。ルクセンブルグの博物館は遂に之を買收して展覽に供せり。ボンナー君は春秋已に高しと雖、意思横逸にして今なほ其筆を擱かず。一九〇八年の佛國美術家展覽會に二幅の肖像畫を出せり。

カロリユー・デュラン君 カロリユー・デュラン君 (M. Carolus Duran) は一八三八年の生れにして殆どボンナー君と時を同うす。その政府の下に官職を有して年々受くる俸祿は最も巨額の収入なれども、之を除却するときは肖像畫の描寫に由つて豊多なる収入を得ること恰も猶ボンナー君の如し。一九〇五年の初デュラン君は羅馬に於ける佛國美術學校長に任せられ、ヴィラメヂチの高位に坐して恰も美術の王の如し。メヂチは *Medici* と綴るを正當とす。然るに佛國人は世界一般の綴字法を自國流たらしめんと欲して之を *Medias* と綴る。若しこの以上に望む所ありとせば美術家の淵藪たるモンマルトルに一片の地を得、少しく足を枉ぐれば何時にても巴里の繁華に優游するを得るの境遇なるべし。一八六六年君は「ラッサツシネ」(Assinè) と題する絶大の畫を展覽會に出してその名を著せり。此作は羅馬の古風を模寫せる健筆の大畫にして、久しくその郷里なるリール市の博物館に掲げらる。然れども君の鴻名が處々の展覽會に喧傳せられし所以は其肖像畫の好評なりしに由れり。而して之が爲め君は肖像畫家として立たざるを得ざるに至れり。蓋し最も愛嬌に富める快活なる婦人は皆思へらく、正しく我美貌の眞を

寫すことを得る畫工はカロリユー・デュランに及く者なしと。斯く婦人界に愛重せられしを以て肖像畫を描くは決して不快の職にあらざりしに似たり。君は肖像を寫して其人物の天眞を現す筆力を有するのみならず、着色人を魅する畫を作るに稀有の機巧を有す。然れども或る人の意見に據れば、君は衣服の色に光彩を點粧すること過甚にして、擅恣に過ぐと。これ其西班牙に於てヴェラスケー (Don Diego de Velasquez) 一五九九年に生れ一六六〇年に死すの流を研究せしに由れり。

エーメ・モロー君 エーメ・モロー君 (M. Aimé Morot) は一八五〇年に生れ、共和政府の下に養育せられたる畫工中先進の名手なり。君も亦所屬分明ならざる畫伯の一にして、或は宗教畫を描き、歴史畫を試み、或は軍隊戰爭の畫を寫したり。而して肖像畫も亦其長所とする技なり。ライシヨフエンと題する一幅は君の今日まで世に出せる無雙の傑作なりとは世上一般の同意する所にして、ヴェルサイユの博物館に之を見るを得べし。これ普佛戰爭の時佛國の軍隊ウオルト即ちライシヨフエンに敗れたる時マクマオンの命令を受けたる騎馬兵が退却せんとする軍勢を庇護する爲め敵軍に突撃せし有名の史蹟を寫し、飛躍せんとする精神と激戦

の光景は緋素の間に溢れんとす。この突撃は佛國の騎兵が現したる赫々たる偉勳の一にして、攻勢的の運動としては到底成功の望なかりしなり。然れども望なくして之を敢行せしは後世の益、勇壯とする所以にして、敵兵の追撃せんとする趨勢を阻過する爲め身を鴻毛の輕きに比して貴く國家の爲めに奮戦せしなり。自餘の名畫師にして一八七〇年戰の此壯舉を畫きし者一として筆力のモロ一君に及ぶ者なし。

エフフラマン君 フランソワ・フラマン君 (M. François Flameng) は一八五六年に生れ、多技に涉つて才幹と筆力を兼備しながら近年は殆ど専ら力を肖像畫の粉描に集中する畫家なり。思ふに肖像畫は名を成すに於て益するところ稀なりと雖、大名已に成れる畫工は之を以て豊澤の收入を得ること容易なれば、丹青を業とするもの動もすれば心を之に委ぬるに至る。フラマン君は明媚鮮麗なる風景を摸寫する技能最も大なり。然れども過去の眞を穿つてその精神を畫にする才力に至りては更に稀に見る所なり。故に看者をして實地にその境に處するの思あらしむる歴史畫を描寫するは君の手裡に收むる事特技にして、ジロンド黨の

呼號及び牢獄の破壊者は其適例なり。惜い哉着色未だ絶妙の域に達せず。若しその才をして此一事に堪能ならしめばその大名一層芳しからん。裝飾畫に至りては君の著しく成功せし所にして、ソルボンヌ學校及びオペラ・コミック座に於ける壁畫はその最も著しきものとす。

ジョルジュ・ロシユグ・ローヌ君 ジョルジュ・ロシユグ・ローヌ君 (N. Georges Rochegrosse) は一八五九年の生れにして、方今名家の譽を四方に馳する畫工。中年齡最も低きもの一人なり。君は眞成の創作力を天有して新奇警拔の繪畫を作出するを好み、一八八二年の展覽會に出したる、ヴィテリアス帝が羅馬の市街に曳かるゝ圖は巴里人の着目するところとなり。美術の好事家は喋々評説を試みて數週間口を絶たざりき。放肆淫佚にして禽獸の如き羅馬皇帝が殆ど赤條々の姿を以て描寫せらるゝ狀は憎むべく厭ふべしと雖、死地に瀕して自ら救ふこと能はず、戰々慄々として畏怖せる状態は能く實際を寫し得て悽愴の氣人を襲はんとす。且つ又羅馬が衰勢を呈して紛擾動亂相繼いで起りたる頃の歴史を見れば、社會暗黒の雲に蔽はれて殘忍暴戾の行爲灼然として火を視るが如かりしが、この畫を見れば市

街に填充する兵卒及び遊惰の民が斯かる憤情を肆にして蠻行を極むる光景その眞を寫して殺氣膚を慄せしむ。方今この一幅の畫は藏されてサン博物館に在り。ロシユグロースは未曾有の好評に獎勵せられて爾來力を古史の研究に潛めき。然れどもその作を見るに悲劇及び恐怖を寫す名畫を出すに苦心せる迹明瞭に現るゝもの多きを惜む。但し一八八九年に出でたる耶蘇基督の長逝を描寫せる畫「ラ・キエレー」(La Ceneri)にはこの病を見ず。この畫には一小群の共謀者相密接しつゝ突如として襲撃し來る狀を描き、各、皆一腕を伸ばしながらその手裡に握る小刀は今に鮮血滴らんかと思はる。その善く悲劇の實狀を摸寫して氣力あること現今の諸作中多く比類を見ず。たゞ寫實を重んずるの結果分布配合の觀念を沒了するの嫌あり。然れども實を寫すと同時に尊嚴高尚の致趣だにあらば、歴史畫の目的は實に爰に存するなり。この畫及びその早年の諸作を見しものは君の前途に向て大に望を屬せり。然るにロシユグロース君はその後幾多の繪畫を出しながら今に至るまで衆望に答ふること能はざりき。君の構想力は年を逐ふて硬固し、益、古代歴史中人を感動せしむる詳密の語調にのみ力を専らにし、殊に亞

細亞に關する史話は其最も力を致す所なり。若し斯かる類の性癖を抑遏せずんば、その創作の能力萎縮して伸びざるに至るべし。現今君は遠隔にして茫漠たる過去の史話をその墳墓中より發掘摸寫するに臨み、その生命を等閑に付して専ら其衣服に注目す。君が幾百千年前の枯骨に纏ふ裝飾は當時實際着用せしものなるやも測られず。然れども徒らに服飾にのみ注意するは死屍に生魂を付與する所以にあらず。方今智力界の諸方面に現るゝ種々の徵候を熟視する者或は問て謂はん、現時の社會には將來最も望ある材幹を妨げて圓熟する能はざらしむる障礙物あるにあらずやと。

シャルル・カザン 才能富贖にして變通窮りなき畫家はシャルル・カザン(Charles Cazin)一八四一年に生る。一九〇一年に死す。にして、その多能多藝なる爲め吾人は之を何種の畫家に屬すべきやを定むるに苦む。その少壯の頃久しく諸外國に客寓し、其間英國にも來り住めり。帝國の鼎祚將に共和國に移らんとするに先だち、彼は聖書の話題を畫く作家としてその名を知らるゝに至りしが、その畫法單純にして成績道健なりき。彼は曾てパレストアインの眞景を摸寫せんが爲めには佛國の

西方及び北方の海岸に於ける沙阜を踏えて遠く旅行する必要なきを悟れり、その作「イシメール及びハガル」方今ルクセンブルグ博物館に在りは此意思に出でたる作中恰好の一例と見做し得べし。歲月の進むに従ひ彼は漸々畫題を聖書より引くに倦んで古代の希臘を描寫するに心を傾け、ソクラチーズの家その他類似の繪畫を出し、次で彼は其心を風景畫の粉描に専らにして、最も其天性に適合せる技能を放棄せしが、彼はその景色畫に粧點するに深き詩趣を以てせり。その作「カザン」の時は佛國人之を見て思へらく、これ日夕温度降下して夜の暗黒に移らんとするに當り、將に没せんとする太陽が濃々たる煙霧に映射して美麗の光彩を放つ時なりと。

ダギヤンブーヴレー君 ダギヤンブーヴレー君 (M. Daguan-Bouveret 一八五二年に生る)は頗るパスチアールバジユの筆意を模倣して田舎その他に關する題目を寫實的に描畫し、之に由り一八八〇年以後暫らく世人の着目する所となり、その後畫法大に進んで將來發展の望み甚だ多かりしが、近年に至り渾身の力を肖像畫に注ぐに至れり。觀察の精緻にして著しく實狀を現すものは「鷹祭の麵麩」(La

Pain Blanc)にして、一八八六年ルクセンブルグ博物館に陳列する爲め買取せられき。君は又曾て畫題を聖書に取りし時代あり、その間に出でたる「エシメールの巡拜 (The Pilgrims of Immus)」は君の作中世人の最も感賞せし名畫の一なり。

アールール君 アルフレールール君 (M. Alfred Roll) は一八四七年に生る、戶外生活の實況を臨摹して強健の筆意を示し、勞動者が流汗辛苦する狀態を圖寫して著しくその眞致を顯す。君の名を知らるゝに至りたるは主として此に由れり。夫れ人各嗜好を異にし、或は工場ของ如き或は埠頭の如き凡々劇務煩勞に忙殺せらるゝ民衆の雜遝する景況を見て山村の閑適を見るよりも樂しとする者あり。この類の人は人間の勤勞と猛烈なる奮勵を認めて雄大なりとす、之に反し這般の繪畫を見て何の感動をも起さず、却て畫工が斯かる平凡なる畫題に無益の力を費せるを怪歎する者もあり。此二種の人物中前者は概ね衆民の群處する繪畫を喜び、強くその辛酸繁忙なる實狀を寫すものを見て自ら樂む。ロール君は斯かる種類の人の爲め勞働界の光景を寫せり、而して其成功は則ち現時生存する佛國畫工の能く及ぶ所にあらず。君の作にして此類に屬する繪畫中最良なる者は、七

月十四日の祝宴(La Fête du 14 Juillet)現今巴里府廳の博物館に在り「百歳の人」(Centenaire)今ツェルサイユ博物館に在り)等なり然れどもロール君は斯くの如き畫題にのみ局促せず往々その範域を脱して他家の領分を蠶食せり「マンダラメトリ」(Manda Larnétrie, Première)はその一にして、ノルマンディーの一婦人が乳桶を携へて牝牛より立去らんとする狀を畫き、村野の趣味を寫し得て最も力あり然れども理想的に成りたる作にはあらず政府はルクセンブルグ博物館に藏むる爲め遂に之を買收せり此畫を以て之を觀るに、ロール君は新鮮なる光景と健康なる生活とを丹青に寫して人目を喜ばしむる技能を有す然れども觀衆の心に何等かの感應を起さしむる趣はその村野の繪畫に見ざる所にして、此點より見れば君は「祈念の號鐘」及び「禾穗拾收者」を畫きし名手と大に懸絶す蓋し君は寫實主義の畫工にして、幾分かマネーの流を汲み且つ大に之と同様の性癖を有するなり。

アルフォンヌ・ド・ヌーヴィル アルフォンヌ・ド・ヌーヴィル (Alphonse de Neville) 一八三六年に生れ一八八五年に死すは帝國のなほ存せし頃軍事上の畫題に最も妙を

得たる畫師の一人なりしが、共和國建設以來十年間この技に於て君の最も名手たりしこと世の定論となれり日耳曼との大戦争は大にその心を感動せし者の如し然れども該戰に興味を有せしは獨り彼のみにあらず一八七〇年より七一年に亘る佛國の大慘禍に續く數年間、苟くも實戰を目撃して十分その慘烈の光景を知得し之を筆に上して活潑々地の戰畫を寫す才力ある畫工は何れも皆手腕を證すべき無二の好機として名筆の掃灑に志さざるはなかりきこれ戰場の實景なほ彷彿として民衆の心裡に存すればなり「ド・ヌーヴィル」は公衆の要求に應ずる爲め直ちに立つて最終の賜暇券 (Les Dernières Cartouches) 其筆に成れる諸作中最も道勁にして且つ人の最も善く知れる者なり「サン・プリッツ」の墓所 (Le Cimetiére de Saint-Privat) 「ブルジョア」 (Le Bourgeois) の諸畫を掲げ出で、一八七〇年に至るまでヌーヴィルは主として挿畫を畫くに心を留めたり然れども一旦親しく戰禍の恐怖すべき實景を目撃するや、胸中に蘊藏する才能は一時に迸出し、陸續世に出る諸の繪畫は皆に其技能の非凡なるを以て知られしのみならず、又その作出の迅速なるを以て世を駭かせり。

エードテュー君 エドワールドテュー君 (M. Edouard Detaille) は一八四八年を以て生る。アルフォンヌドヌーヴィル及びメーソンニエトの死後佛國に於て軍事畫を専攻する名工中君が第一流の地位を獨占するは争ふべからざる事實なり。メーソンニエーは一八九一年に死せしも、實際に繪畫界より退きたるは遙に死期に先だてり。ドテュー君はメーソンニエーの門に學びし弟子の一人なり。而して二人の筆蹟は大に相異れりと雖、ドテュー君が頗る師の威化を受けたるは容易に認むるを得べし。君は戦争の實況を寫す畫工にあらず、寧ろ戦争中に起れる挿話を畫く丹青家なり。その故如何といふに君は實戰の光景を現す大作を畫く十分の技倆を有し、一八〇六年軍隊の迎接てふ畫の如きはその一例にして、活氣充滿し筆意綽々たる歴史畫なれども、多數の兵衆が戰鬪に従事する狀を寫したるは吾人の稀に知る所なればなり。この一畫は今藏して巴里の府廳に掲在せり。ドヌーヴィルは常に自ら確信すらく戰熱方に酣にして砲丸破れ霜及閃く情況を練素に寫して實地に臨む思あらしむるは余の力之を能くすべしと、之に反しドテュー君は斯くの如き筆力を揮ふは到底自己の力の及ぶ所にあらずと信せし者の如し。然

れども「モルブロン」に於て騎馬兵攻撃の圖は極めて活氣に富める作にして、君が實に斯かる筆力を有することを證す。されど「シャンピニー」を防守する「フロン分隊」に於ては君の特有の筆力更に顯著に認めらる。此畫には幾多の兵衆雜然勞役して繁忙を極め、或は壁を穿つて銃眼を作る者あり、或は目に觸れ手に取る物を用ひて防禦工事を施す者あり、以て日耳曼軍の襲撃を期待して急速に之が備をなす狀を寫せり。この類の繪畫を精密に査究する時は廣漠開豁の平野に於て敵我兩軍精銳を盡して奮闘力戰するを寫す繪畫より却て善く戦争の實狀を見るの感あらしむ。且つ又近世の戦争は大に昔日と趣を異にし、壯烈鬼神を泣かしむる等の活劇は殆ど絶無となれるを以て、縱令實戰の狀を描寫するも看者に趣味を感せしむること能はず。これ吾人の當に記憶すべき所にして、ドテュー君が酣戰の畫に多く毫を染めざりし所以亦爰に存せん。夫れ廣濶なる平面に展開せる歩兵及び砲兵は恰も機械と同様に數學的に行動するを以て、人の構想力を喚起するに至りては騎馬兵が猛烈の威勢を以て突撃紛争するの壯快なるに及ばざること遠し。這般の現象は方今戰場に起る瑣細の挿話にして、今日斯かる繪畫を見

る者座ろに悲愴の感懐を起す。然れども之を今日に畫くは時世の許す所にあらず、歩兵砲兵の戦況亦甚だ趣味に乏し。是を以てドレーユ君は實戦の景況よりも寧ろ挿話に心を注げり。其師メーソニエーは軍事畫を寫すに戦況に重きを置かざるを主義とせしが、君は夙に師の遺志を継ぎ、將來戦術に變化の起るべきを速観して可及的挿話の描寫を研究せしなり。獨だ惜むべきは君が寓意的の人物を挿入する技能に拙なる一點にして、若し然らざりせば其繪畫は有力にして寫實的の作なりしならん。例へば一九〇八年の展覽會に出でし「出發の歌」(Le Chant de Départ)は君の最近の作にして、進軍を始めし少年の兵卒が戦死の否運に逢ふやも測り難きに、翼ある馬に跨がれるゾクトリー(戦勝の女神)を其前に畫けり。斯かる寓意的の人物は却つて繪畫の趣味を没却するものにして、譬へば亂雜の響を以て清婉の天樂を亂すが如し。

軍事畫家を以て立つ者の中には陸戦にのみ熱中する者あり、或は専ら海戦に注意する者あり。アービネー君(Mr. A. Binet)一八五四年に生れ一八九七年に死すも亦軍事に關する繪畫を以て鳴る一名工にして、其筆に成れる巴里圍城の諸畫は

方今府廳に藏す。この他オランジ君(Mr. Orange)の如きフークレー君(Mr. Fouquery)の如き、亦著名の軍事畫家にして、フークレー君の作「トラファルガー戦争の圖」は死力を竭して奮闘する光景を寫し出し、最も強烈の感起さしむ。

田舎生活の畫 山水畫の描寫は姑らく之を措き、田舎生活を書くを以て著名なる方今の畫工はレオン・レルミット君(Mr. Léon Lhermitte)一八四四年に生る、及びアン・リール・ロール君(Mr. Henri Rollé)一八四八年に生るなり。レルミット君はシャンペーンの地に生れしが、同地は佛國中好景色の部分にあらざれども、君は爰に一種の靈感を受け、其少年の作には自然の趣味滴らんとする者ありき。君曾て穀物を刈るものが貸銀を受くる圖を出し、之に由り其名始めて世に高かりしが、一八八二年政府は之を購求してルクセンブルグ博物館の所藏とせり。之に續て同様の思趣に出でし諸他の繪畫成れり。葡萄の收穫、死と樵夫の如き是にして、その後者は今アマミアン博物館に藏せらる。筆力遒勁にして眞致に逼る繪畫を作出するにはレルメット君實に不凡の技能を有す。然れども着色を施すに於て未だその技の圓熟せざる憾あり。一九〇八年國民協會の展覽會に出せる作は收穫者が團集せる

畫にしてその名作の一に數へざるべからず。
 ルロール君も亦戶外の生活に十分の興味を寄せて之を畫に上すを好む名手にして、田舎の光景を寫す數多の畫は山村の趣致を現して寫實の妙を得たり。ジャンペーの圖(Diana la Champagne)はその傑作中の一にして、今ルクセンブルグの博物館に之を藏す。アルベル・ベヌナル君(M. Albert Bensusan)の繪畫を見るも亦ルロール君と同類の畫家と見做すべき筆意多し。但しベヌナル君は寫實畫を好むと同時に構想的の畫も亦均しくその好む所なり。然れども一個の搾乳婦を畫くも將た又一個の美少女を畫くも、君は常に一種愛嬌ある風致を人物に粧點す。これ着色に妙を得たる名手なるに由れり。巴里府に於ける第一區の區役所は君の作に成れる最も美妙なる三種の畫を以て裝飾とす。生命の朝(Le Matin de la Vie)「正午」(Le Midi)「夕」(Le Soir)是なり。

山水と田舎の人物 近世佛國の美術が重要な諸點に於て進歩せしや將た退歩せしやは大に議論の存する問題にして、人々大に其見を異にせん。然れども山水の景色及び田舎の人物を描寫する術に至りては佛國人大に得る所あり。この力

向に向て丹青の技の進歩せしは復た疑を挿む餘地なし。ミレー及びコロの二家は天然の景物を捕捉して之を尺素の間に彷彿たらしむるに最も著名の畫工なりき。然れども吾人は已に地下に葬らるゝ故人に指を屈せず。又諸他の天才ある山水畫家を看過するも、なほ且つ技能富麗なる畫工に乏しとせず。此諸子中には或は全く共和國の下に養成せられし者あり。或は帝國と共和國とに兩屬する者あり。何れも繪事に忠實にして明確に獨得の手腕を證し、純粹の愛情を自然の風景に捧げて蒼煙翠靄を寫すに意匠を専らにせり。故に縱令諸他の方向に於て瓊瑣を免れざるも此一事は能くその失を補ふに足り、世界の耳目を集中して佛國畫家の名聲を維持せり。アルビニー(Harpignie)フルーリー・シニエー(Fleury Chenu)ランシエー(Lausier)ランビネー(Lambinet)セセ(Segé)ブソン(Busson)アントー(Ha-nolent)等の諸名家は七月君政の頃より帝國政治の頃に至り山水畫に芳名を揚げし老手にして、共和國の建設日なほ淺き頃にもなほ揮灑に忙はしく、その中アルビニー等の數家は大に水彩畫に心を注ぎ、雲煙出沒千態變幻する天機を捕捉する纖美高雅の妙法に卓出せり。ローザ・ボンヌール女史(Rosa Bonheur)一八二二年に

生れて一八九九年に死すも亦吾人の茲に看過すべからざる名家なり。何となれば女史の名聲動かすべからざる所以は牛馬を描畫するに妙を得しに由れりと雖、山水畫家の趣味は均しくその兼有する所なればなり。

ジュール・ブレトン (Jules Breton) は山水畫と關聯して田舎の人物を寫せし畫伯にして一八二八年を以て生れ、一八四八年第二回共和國が紛々擾々の間に起りし時風雲に乗じて奇利を贏ち得んが爲め巴里に上り、第三共和國の下に在つて盛名の極に達せり。熱心に現時の美術に目を留むるものにして展覽會にこの畫工の作を見ざりしものは多からじ。方今寫實主義の畫工は之を咎めて曰く、彼は理想を基としと田舎の生活を畫けりと。この説は或る程度まで當れりと謂ふて可ならん。然れども彼の畫が全く實際に背馳するまでに理想的なりしは吾人の未だ知らざる所なり。農夫の生活中鄙陋穢なる方面は彼の嫌つて拒絶せし所、故に若しゾラの著「土地」(La Terre)の挿畫を畫かしめば決して成功せざりしや必せり。その畫題を撰擇するに當りては眞實に美と稱すべくして理想的の美を心に暗示すべきものを求めたり。斯くして後彼はその心に會する所を雜素の上に描

出し以て人目を爽快ならしむる繪畫を作出せり。彼は眼裏に映じ來る一切の事物を寫さんとするものにあらず。畫幅に保存して後世に傳ふべき價值あるものと其價值なきものとを辨別する鑒識を有し、保存の價なきものと見ては之が爲めに寸緘尺素を浪費せざりき。設色の調和を工夫して農淡宜しきを得せしむるも亦其畫に特有なる一點にして、畫者は已に妙悟の域に至せり。其作に成れる逸品中には、收穫者の歸る圖及び穀物の祝福あり。政府之を買得してルクセンブルグ博物館の什寶とせり。

エミール・ブレトン (Emile Breton) 一八二三年に生れ一九〇二年に死すはジュール・ブレトンの兄なり。其技能を試みし範圍は弟よりも狭かりしも、而も無限の快味を繪畫に添附する秘訣を悟道する畫工として自から一家を成せり。天然の景趣中この畫家の特に心を留め、之を畫くに十分なる詩的の氣韻を以てせし者は冬期及び晩秋に於ける景色にして、沈々たる月夜に家屋及び禿樹が堆雪に掩はるゝ圖及び寂寥たる田野と枯落せる籬笆が雨氣又は雪意を帶ぶる夕陽の微光に照さるゝ圖の如きは其最も好んで意匠を凝らせし所なり。

ドモンブレントン夫人 (Madame Danton-Breton) はジュールブレントン君の女にして、田舎の人物及び山水の風景を模寫する技に特長を有する女流畫家なり。然れども女史の最も成功せし作は漁夫が海邊に談話する狀を寫す諸畫なり。

佛國の畫家は其數甚だ許多なり、而して本書は諸般の方面に涉りて多量の事を記載せざるべからず。是を以て知名の諸家に相當の批評を加へんとする希望あるも、功績あり機軸ある數多の名工を一々爰に記述して漏らさざるは吾人の能くせざる所なり。山水の景色及び田舎の人物を専攻する畫家は已に示せる所に於て、一九〇八年に開催したる二種の展覽會を見れば、同一の範圍に於て人目を惹くべき良畫を出品せし畫工は多し。請ふ次にその名を掲げん。

アー・ギー・リゴロー (A. G. Rigolot) 秋晩の景色を畫けり)

ギー・コスター (G. Costeau) プロヴァンスを寫し、水と山と松に旭日の映する光景を畫けり)

アー・ダニエー (A. Dagnan)

アー・ビュッソー (A. Bufe)

エル・カビエ (L. Cabie) 森と水に霧の濛々たる畫を出せり)

ギー・ペー・ヂエナルル (G. P. Diezelle) 山水畫に人物と羊とを添粧せる圖を展覽せり)

アー・ギラル (A. Girard)

アー・ドレールストル (A. Draisire) 低潮の時懸崖の下に於ける海岸の畫を出せり)

マリー・デュアン (Marie Duham) 日没及び月光を畫きて人物を散點す)

ギー・エー・クロッキー (J. E. Croche)

グー・ペープ嬢 (Mlle. V. Pépe) 夜曉の圖にして景色及び人物を寫せり)

家庭肖像等の畫 ユー・ゼーン・カーリエール君 (M. Eugène Carrière) 一八四九年に生れ一九〇六年に死すは才氣あり創作力ある畫伯なりしが、近頃其活潑にして作出力に富める生涯を終へき。其技倆の最も優れしは「眷族」(La Famille)、「産婦院」(La Maternité)の如く家庭に關する畫題にして、この二畫は今ルクセンブルグ博物館に見るを得べし。蓋し家庭生活を寫す畫工として君は觀衆に眞正なる感情を起さしめざることなかりき。肖像畫も亦その得意の技にして、アルフォンヌ・ドローデー其

他諸人の像を畫きて人を感嘆せしめたり。
 エミール・フリアン君 (M. Emile Friant 一八六三年に生る)も亦家屋の内部及び家庭生活の畫家として上席を占むる價值を有す。牧師の教訓 (La Leçon du Curé) はその諸作の規範にして、今懸りてルクセンブルグに在り。ラッソーリ君 (M. Raffalli 一八五〇年に生る)及びアール・ノワール君 (M. A. Renoir) は兩ながら直感派に屬する畫家にして、非常にフランダー地方の畫工を喜ばしむるが如き鄙俗の逸話畫歴史畫にあらざる嗜好す。ルノワール君の「乾麵麩の搗碎器」(Le Moulin de la Galette) は即ちこの種に屬する作の一なり。アンリー・セルヴェツキエ君 (M. Henri Gervex 一八五二年に生る)は諸體に涉つて強健の筆力を有する名家なれど、今は肖像畫を專業とせるが如し。君曾て一婦人が黒色の一小假面のみにて顔面の上部を掩へる狀を畫きしが、此作は展覽會に陳列せられし時忽ち大に物議を起して其後數年間法廷を煩はす大事件を惹起し、誰人かの肖像なりてふ嫌疑を受けたり。而して巴里の市民は之を現社會に在る人の像と思考し、模型となりし女子の何人なりやに關し悲説久しく喋々たりき。

少壯の畫工にして肖像畫に巧なるを以て鳴る者の一人にエム・バシー君 (M. M. Baschet) あり。君がアンリー・ロシユファール君を寫せし肖像畫は一九〇八年に開催せし展覽會の肖像畫中最も著名なるものの一なりき。

閨秀畫家 方今佛國に於ては繪事を以て業とせる婦人その數甚だ多し。其中最も善く世人に名を知らるゝ者はルネズ・ア・ペ・嬢 (Mlle. Louise Albéma 一八五五年に生る)及びマドレーン・ルメル夫人 (Mme. Madeleine Lemaire 一八四五年に生る)の二人にして前者は肖像畫の技能に於て頗る成功し、後者は花卉に妙を得たる畫家中第一流の名を恣にすること已に多年に及べり。

寓意的及び裝飾的の繪畫を描くは巾幗社會に於て多く類を見ざる所なり。然れどもセー・アッシュ・デュフォー嬢 (Mlle. C. H. Dufau) はこの技に長じて萬綠最中一點の紅を添へ、その技倆は近來著しく光耀を發せり。女史が政府の命令を受けて天文學、數學、發光作用、磁石力を解説する爲め描寫せし諸畫は一九〇八年に催されし佛國美術展覽會に出され、構想力非凡にして設色の意匠秀雅纖麗なるを證せり。

第八章 彫刻師

過去と現在 近世の彫刻術に於て佛國の工匠は歐洲中第一等の地歩を占めたり。但し茲には彫刻術といふよりも寧ろ彫像術てふ語を用ふるを可とするが如し。又近世てふ語を茲に用ひしは藝術復興時代の初め(第十五世紀の中頃)より現今に至る間を指すなり。吾人若し復古時代より更に溯りて中古時代に論及する時は、石及び木の彫刻家にして今人に佛國の古名匠と稱せらるゝ美術家に歐洲第一流の地位を與へざらんとするも得べからず。試に佛國を出で、歐洲諸他の邦國を歴觀せよ。無生の木石に神靈、聖者、人物、惡魔の如き有生物を雕刻せる像にて裝飾せらるゝ教會の建築物何處にかある。斯かる壯觀は何れも古昔の名匠が斧鑿を揮つて作出せし結果なり。然るにその後藝術の復古時代に入るや伊太利に於ける復古運動は大に佛國に影響を及ぼし、メヂチ家(フロレンスの名族にして第十五世紀中同市の主權者となり、累葉文學及び技術を獎勵せり)の一門中結婚に由り佛國人となりし者大にこの運動に助力せり。而してメヂチの本國伊太

利に於ける美術家の競争轉た猛烈に起きて、佛國の彫刻家は其影響を受け、時勢と推移して復古に勉むるか、將た舊風を固執して自然消滅するか、二者その一を擇ばざるを得ざりしが、結局世と推し移るに如かずとして新興の擬古的流儀を研究せり。是に於てか塑像に形を與ふるに拙なるも驚くべき表情の力を有するゴシック流の彫像術は蕩然として一掃せられたり。斯くて第十六世紀に至り佛國の技匠は容易に新流派に同化して灼然たる光彩を放ちしが、デュイルリト宮の建築家フィリップ・ド・ローム(Philibert Delorme)一五一八年に生れ一五七七年に死す)及び之と時を同うせし彫刻師ジャン・ゴージュン(Jean Goujon)の二者はその最も著しき例なり。グージョンの作はフアンテーン・デー・ジノサンに於て學ぶを得べく、又舊時の宮殿ルーヴルに於てその巨細を研究するを得べし。

佛國の美術に與ふる補助 然れども吾人の今爰に論すべき者はたゞ現今佛國に於ける彫刻術に關す。世界一般の批評家の見を以てすれば同國の彫刻術は昔時已に高尚の地歩を占めしが、吾人は今日に至るまで秋毫も舊時の面目を失はずと言ふに躊躇せず。斯かる羨むべき好位地を占むるは大にこれ同國が斯道の

技匠に多大の奨励と巨額の補助とを與ふるに由れり。此種の名工若し主として私人の補助に依頼し勞役者の受くるが如き僅少の報酬を得たりしならんには、其美妙の術は全く跡を絶ちたるべく、縦令然らずとするも萎靡衰廢復た一國の精華として他邦に誇る能はざりしならん。然るに佛國は此に見る所あり、或は君政となり或は帝政となり、或は共和政になりしも、常に一貫して美術の尊重すべきを知り、之を以て人民を教育する一手段とし、之を以て人心を高雅ならしめ、獸畜の生活に陥らざらしむる至妙の防衛者とせり。近年人或は之を嘲笑し、佛國が彫刻術を保護するを以て彫像建設狂と思惟せり。これ淺薄取るに足らざる嘲笑のみ、何となれば公衆往還の區に建つる彫像は一として彫刻者に職を與ふる舉にあらざるはなく、一として此貴重なる技藝を奨励するにあらざるはなし。勿論彫像を建立すべき人物を撰擇するに當り、美術の奨励よりも高尚なる動機と思慮を以て取捨を決する場合なしとせず、されど害惡の補助とならざる美術品の作出多きに過ぐるは何等の弊害もあらざれば、何れの邦國も之を憂ふるを要せざるなり。且つ又公園若しくは十字街の中央等に彫像を建設して其數多きに過ぐ

るば必ずしも煩累にあらざると言ひ難きも、其數少きに過ぎて索寞の觀あるに比すれば却て勝れり。若し夫れ其數益増加して煩累に堪へざるが、又は人民の思想一變して之を保存するに忍びざるに至らば、自から之を除去して公衆の要求に應ずるの時あるべく、その時に至るまでは却て有益なる目的を達するなり。

彫像と近世の衣服 近世の衣服を着用する姿は昔時の衣服の雅致あるに如かず。然れども近世の服裝が醜陋なればとて政治家若しくはその他諸の俊傑の爲め大理石及び青銅の像を建設すべからざるの理なし。何となれば凡そ美術の發達は公衆の好尚に奨励せらるゝを以てなり。古昔著名なる人物が彫刻家をしてその像を彫ましめんとするや、當代の人及び後世の人をして嘆稱せしむる爲めその衣服を脱して天眞の姿を露出せんと欲せしこと少からず。これ恐らくは衣服及び時様が常に變易するを以て之に信を置かざりしに由れり。而して劇界に於ても文學に於ても一種の運動起り、從來コリント流(即ち昔時の希臘風)と稱せられたる主義に向つて非常の進歩をなせりといへども、今日生存する人々は將來自己の肖像がアポロ(希臘神話史に在る神)の衣服を着て臺石上に立たんことを

希望すべしとも思はれず。現今の彫刻家は主として政府、市區、委員會等より委託を受けて其技を賣るものなれば、自家の意匠を擅にしてフロッコート及びブゾンを放棄せんと望むも能はざるなり。故に近時の人物に近時の衣服を着せしめて美観あらしむるや否やは大に技術の巧拙の繁る所なり。然れども美術眼を以て論ずれば近世の人物が近世の衣服を着して礎石の上に立てる姿は頗る拙陋の觀を呈し、その四周に天眞の儘四肢五體の筋肉を現す寫實的の諸像群立するに比すれば滑稽の狀人をして苦笑せしむ。近世の人物の爲め像を建てんとする者宜しく三思を加へざるべからず。

佛國に於ける彫像術は第三共和國の最初二十年間頗る盛にして名作類に世に現れ、技能最も踴躍なる良匠各、あらん限りの創作力を揮ふて相競ひしが、その一部分は已に不歸の人となり、一部分はなほ餘喘を保てり。然るにその後世人が彫像術に興味を寄すること漸減したるを見る。その衰兆を呈したる原因は同一の意匠を反覆すること太だ屢なりしが爲めか、或は舊時の意匠に新生命を與ふる能力乏しきが爲めなりと思考せられたりき。勿論デアナ(Diana)貞操及び獵の女

神)バウカント(Bacchant)酒神の祭司)ニムフ(Nymph)山林沼澤の女神)フイン(Faun)林野牧畜の女神)の類を彫んで非凡の機軸を證せんとするは彫刻家の至難とする所に於て、この種の像は藝術復古の初期以來今日に至るまで許多の名工みな多少古代の機型に倣ふて類々作出せし所なり。然るにその困難なるに拘らず道般の彫像が展覧會の開くる毎に多々陳列せられたるは今人のなほ記憶する所にして其數敢て往時に譲らず。之に反し直接に近世の生活及び必要に關係ある品題に至りては趣味甚だ淺く、専門家が虚構力を運使せんとする餘地極めて狹隘なり。且つ茲に記憶すべきは彫刻師が平凡なる像を彫むや畫工の如く其拙所を隠蔽する方便を有せざる事なり。夫れ畫工は着色を利用して得るを以て、その意匠縱令缺點あるか又は無益なるにもせよ、其繪畫をして價值ある者の如く見えしむるを得れども、彫刻家に至りては斯かる便利なる方法なく、偏に其像の形貌に興味あらしむるの外なし。色の觀念は形の觀念と全く別物にして、色を以て目を喜ばしむるは形を以て目を娛ましむるが如く困難ならず。故に着色の利便なかりせば殆ど糊口の道に窮すべき畫工も幸にこの一事あるが爲めに之を利して名利

を得たる者多し彫刻を業とするものは之に反し若し眞成に新機軸を出さんとならば形の觀念と生命の觀念は必ず天才と稱すべきまでに警拔ならざるべからず彼若しこの神通(英語に Divine ability)を有せずんば徒に格律正しき模型を模擬するに止まらん故を以て吾人宜しく近時の彫刻家が非常なる困難と戦はざるべからざるを記憶すべし而して吾人若し此困難の何物なるやを十分に會得する時は則ち方今若干の彫刻家が丹誠を籠めたる諸作家の實に感賞すべき價値あるを悟らん。

ダルー・ダルー(Dalou)一八三八年に生れ一九〇二年に死すは畫伯クルペーと同様に平民政府に同情を寄するの誤に陥りて累を買ひたる一人なり彼の此に至りしは唯自家の技藝に熱心なりし結果なり何となれば技術の癖性强き時は往々政治の紛争を以て心氣を攪亂する障礙となせばなり斯くてダルーは一時逐客となりて國外に流寓したり然れども其後ブラス・ドラ・ナシオンに在る「共和政の勝利」と稱する像を彫りたるはこの名匠なりガンベッタの記念像を作りたるも亦同人なりこの像はルーヴル宮より映寫し來る影を一部に受けその四

周の光景はこの著名なる名士が演壇上に雄辯を奮ふ風丰と稍調和せざるが如し且つその像は諸の人物を添加して頗る戯曲に類するの觀あり然れどもガンベッタの狀貌のみを顯す單純の像は國民の満足せざりし所なるべし而して加工に伴ふ困難の多大なるより考ふるにダルーは實に衆人より期待せられたる所を解して餘蘊なく渾身の力を發揮したりと謂ふべし然れどもガンベッタその人が如何ばかり俊傑なりとするも斯かる精緻尨大なる記念像を之に奉獻するは却て敬意を捧ぐる所以にあらず其故何ぞや衆人の嗜好すると否とは姑らく措て論せず他時異日尨大にして市街の妨害となるあらば人終に之を撤去せんと欲する時節必ず來るべければなり凡そ政界に赫々の高名を揚ぐる名士は其友人其黨人こそ之を激賞して絶大の人物とすること恰も顯微鏡下に照らし見るが如くなれども五十年百年乃至數百年後の人はこの顯微鏡を破壊するを憚らざるなり。

フアルギエール フアルギエール(Falguiere)一八三二年に生れ一九〇〇年に死すも亦手腕に力あり變通の才溢るゝが如き彫刻家なりき然れどもその精緻の諸

作を見るに、時々古代の單純樸素なる格調を缺きて成績を傷ふの病を有し、粧飾するに過多の人物を以てして恰も戯場の舞臺に數多の人物を列するが如き傾向ありき、然れどもこれ獨り彼のみならず、佛國の美術は一般にこの缺點を有し、時月の進むに従ひ益々注目すべき價値を減少す。バルザックの像の如き、デアナの像の如き、將た又「舞踏者」と稱する作の如きは、フルギエールの斧鑿に成れる成績最も良好なる諸作に入る。

バリーリアー (Barria) 一八四一年に生れ一九〇五年に死すも亦自家獨得の道勁なる刀痕を近世の彫像術に残したる一人にして、前掲の二匠を合せて近頃故人となれる三大彫刻家と稱すべく、共和國は實にこの三者を以て誇りとするなり。バリーリアーが一圈の人物を雕むや實に、斯界の大宗師を以て自ら任じ、高貴なる感想を自作に表現する力も亦甚だ豊かなりき、その雙刻したる「最初の葬儀」(Première Funérailles)と稱する作は人類出生以來始めて行はれたる埋葬式を現すものにして、若し然らざりせば之をアベルの葬儀ともしも稱すべし。その考案と感情の崇高なる之を近世佛國の彫刻術に於ける最も美妙なる模範の一と

すべし。巴里の防禦と名くる彫像も亦同一の手に成りし名作にして、滔々たる辯舌を以て強烈に當年を語るが如き感を生せしむ。

オーギュスト・ロートダン君 (M. Auguste Rodin) 一八四〇年に生るに如くはな上るものオーギュスト・ロートダン君 (M. Auguste Rodin) 一八四〇年に生るに如くはなし、之を激賞する人物中最も熱心なる輩は思へらく、君は彫刻術に新復古の紀元を開きて自ら新主義を代表し、フィダス以來現世界に現れたる無双の塑造工なりと、フィダスは雅典の彫刻家にして古昔最も著名なる美術家の一人なり。紀元前四百三十二年に死す、然れどもその他の人は思へらく、彼は彫刻界の革命家にして如何なる代價をも惜まず偏に名聞を求むるに汲々とし、人間に於ける最も下劣なる天性を紹介して罪惡を勸むる者なりと、然れども公平の眼を以て君の作を批評せんとならば、吾人宜しく此二論の何れにも偏すべからず、君は實に一種の勢力にして、今日凡そ彫刻術の目的に關し何等かの運動ある毎に最もその感化力を逞うする一人なり、吾人の確言し得る所は唯是のみ、而して斯くの如き勢力ある位地に達するは強烈なる原動力あるにあらずんば能はざるなり、蓋し

君は品性の力と長壽の力を兼有するを以て、技術に關する諸種の資質は混合して一團に打成せられ、以て今日の君を陶成せり。近世流行せし寫實主義の精神はローダン君の具有する所にして、擬古主義の精神も亦その兼備する所、君に在て何れをか存し何れをか棄てんや、故に純潔なる者を取て然らざる者を淘汰し、貞操なる者を選んで然らざる者を蔑視すべして、よ近世技藝界の理想は君の醜態として顧慮する所にあらず。這般の理想を云爲するを見て君之を虚飾偽善の社會に行はるゝ僻見と思惟するや疑なし。然れども體面を憚りて多少心を此に留め、幾分か輿論に敬意を表するの止むなきに至れり。されど其技術室より出でし諸作、例へば「接吻」春、「永遠の偶像」一時の愛情等を見るに、若し君の技術に於ける自由の手腕を放任して何等の制裁をも加へざらんには如何ばかり放肆邪侈に流れたるべきや、之を推すに難からず。この中「接吻」Le Baiser 今ルクセンブルグ博物館に在り)はローダン君が本と地獄の門を彫む爲め考案を立てしものにして、バオロ及びフランセスカ・デリミニを表示する企圖なりき。之を見れば吾人は彫刻者の意旨那邊に在るやを窺ひ得べし。此作には道勁なる刀痕と果敢の氣象歷々

として顯るゝを以て廣く世人の知る所となれり。ローダン君は彫刻に於ける手腕頗る勝るゝを以て、動もすれば恣にその技を弄し、未だ全く完備せざる作を示して素人より譏を招くことありき。恐らくは世人が熱心に君を稱賛する爲め、君は自己も亦缺點なき能はざる人にして宜しく批評眼を以て自己の作を顧みるべきことを忘るゝに至りしならん。美術上の作品にして近年毀譽褒貶の議論最も喧しかりしはローダン君の刀に成れるバルザック (Honoré de Balzac) は佛國の小説家にして一七九九年に生れ一八五〇年に死す)の像に如くはなし。一部の人は之を賞して生くるが如き傑作、彫像術の精華なりと主張すれども、其他の人は言ふ、これ人間の喜劇 (Comédie Humaine) バルザックの小説)の著者を最も拙劣に寫す者、所謂虎を畫て狗に類するなりと、惜むらくはバルザックを其前に立たせて自ら可否の争論を決せしむるに由なし。今日まで誰人も此肖像を以てバルザックを喜ばしむべき名作と稱せし者なく、其頭象が像の全體に顯るゝに争ふべからず。

氣力と活動とを表示するの巧妙なるはローゲン君の獨り專にする所なり。君は理想の美を捕捉するよりも寧ろ之を逸する場合多し。然れども縦令之を捕捉することあるも、その表明する所は人間の情慾なり。人心の奥に潜伏する獸畜に近き情性なり。故に戀愛の力のみならず戰闘の力を表示するにも亦非常に強健の手腕を有す。而してこの力は性情自然の發動を最高の律法としたる古人の所謂力にして、勇往猛進顧ること知らざる熱烈の力なり。その一例は「武力の決」と稱する作にして、活氣充溢せる一團の人物を彫刻す。之を見れば羽翼を有して容貌魔鬼の如き人物が心内に燃ゆる自然の戰闘熱に訴ふる狀を現し、その緊握する兩拳に満身の力を籠むる狀宛然として、實物の如し。因に云ふローゲン君は心情を彫像の兩手に寫し出す非凡の技を有す。其作「神の手」はこの手腕を證する一好例なり。君の今日まで彫鑿を試みし品題は甚だ多方面に涉れり。その夙に作出したる好成绩の「一にカレ」の市民」と名くる者あり。同地人の一團が各、其頸に繩を纏ふて英國王を邀ふる爲め出行かんとするを寫せり。これ史乘に載する一奇談にして、その眞否今日まで問題となれる事蹟なり。美麗にして且つ巧妙を極むる作

は合祭廟の庭に在る「熟思者」(Le Penseur)にして、深思熟慮する趣は明かに此驚異すべき像に顯る。

アントナン・メルシエー君 方今佛國に生存する彫刻家中近年その成功最も明白にして斯界の山斗と稱せらるゝは人皆指をローゲン君に屈すと雖、アントナン・メルシエー君(Mr. Antonin Mercié)一八四五年に生るるを認めて才能最も秀逸なる彫像家とするもの亦多し。君の技術は公に萬人衆觀の前に爆發して世を驚かす噴火山の如きにあらず。常に粘土に親んで彫鑿に多忙なるも其意匠の結果は私人の用に供せられ、之を公開の場に展覽することなし。その今日まで作出せし成績に由て考ふるに、君は何種 of 美術に在ても彫刻術の如く完全なる彫削と細密なる注意を要する者なしと信するなり。君の彫刻中人の最も善く知れる者は「敗者の榮光」(Gloria Victis)にして、古の「敗者の悲哀」(Val Vicis)昔時羅馬人の角闘戲に於て敗者は耻辱を受け、勝者は無上の榮光を受けしが、敗者の耻辱を表する彫刻に此名を附せり)に反對せり。蓋し羅馬人は猛暴一方に偏し、正面より見て敗者に一切の汚名を歸し、敗者の悲哀を正當として其榮光を不合理とせり。然れども近世

は古人の如く殘虐ならずして大に情感に訴へ、若し角闘戲の再發することあらんには敗者の生命を救ふ爲め觀衆盡く拊指を擧ぐべし。斯く情感に訴ふる今日に至つては敗者の榮光も亦必ずしも背理の作にはあらず。然れども敗者を稱讃してその名譽を頌揚するは抑、その道を誤まれり。一八七〇年の戦に近づかんとする數年間、この種の感情極めて甚しかりしが、歲月の経過するに従ひその熱半ば減退し、世人の識斷漸々平靜となれり。ヴァンドームの圓柱の頂に在るナポレオンの像はメルシエーの作にして、サンゼルメーンアンレー(巴里を距る十哩、セーシ河の畔に在る一都會)に在るチエルの像も亦同一の手に成れり。凡そ諸他の彫刻家中公衆往還の名區を飾らんが爲めに、及び共和國の下に偉功を建てたる俊傑を顯揚せんか爲めに多大の勞力を貢獻せしものメルシエー君の如きはなし。君は又家庭に關する品題に斧鑿を試むる技能を有し、彫刻家の手腕を證する常例となれる題目も亦その手裡に收む。一九〇八年の展覽會に於ける君の一作は頗る快活なるオーヴェルン州の農民が一團をなしてブーレーてふ踊を演ずる狀を現せり。

フレミエー君 エーフレミエー君(M. F. Frené)は一八二四年に生れ、帝國の頃に盛名を馳せたる老練の彫刻家なり。然れども共和國建設以來にもその銳利なる腕を揮ふて許多の名品を作出せり。その壽算已に甚だ高きに拘らず、一九〇八年に開催せし佛國技藝家の展覽會に新作を出品せり。その鑿鑿たること想ふべし。君の今日まで世に出せし著名の作は其數甚だ多く、成績最も秀逸なるもの、中にはジャンダルクの像及びデゲヌラン(Bertrand du Guesclin)佛國に著名の軍人にして又警察官なり。一三二一年に生れ一三八〇年に死すの像あり。

佛國には此外近世の大家と同一の班列に入るべき彫刻家あり。又一般の人民より名手として仰がる者あり。請ふ次に之を列記せん。

ポール・デュボワ(Paul Dubois)一八二九年に生れ一九〇五年に死す……其著名なる作は聖ヨハネの像及びジャンダルクの像にして、前者はルクセンブルクに在ること已に久し。

アンジヤルベル君(M. Injalbert)一八四五年に生る)

サン・マルソー(Si. Marceau)一八四五年に生る)……「聖餐享食者(Communiand)」と名く

る作を出せし彫刻家にして、又ルナン及びメーソンニエーの半身像を彫めり。バルトルデー (Bartholdi) 一八三四年に生れ一九〇四年に死す……紐育港口に世界を照曜する自由 (La Liberté eclairant le monde) と名くる巨大の像を彫みし人にして、又「ベルファルトの獅子」(Lion de Belfort)、「ヴェルサンジュトリックス」(Vercingetorix) 等の名作あり。

バルトロメ (Balthus) 一八五五年に生る……ペール・ラ・セーズに在る「死者の紀念」は其作にして大に世の賞讃を受けたり。

一九〇八年に於ける美術展覧館に展覧に供せられし彫刻品一千二百を超え、概ね皆佛國の専門家に製作せられしものなり。此數字を見て吾人は佛國が美術のこの部門に於て如何ばかり活動するやを明知すべく、同國が如何ばかり彫刻家を勸奨保護するやも亦察知し得べし。而して彫刻を業とするものその作品の販路を求むること困難にて、畫工の作品羽翼を生じて飛ぶが如きに若かざるは宜しく記憶せざるべからず。多大の勞力を要する上に困難少からざるこの美術界に立つて公衆の愛顧を博せんと競争する名工多き中、吾人は爰に唯數名を擧げ

て前説の缺を補ふに止めざるべからず。ユーゼー・バッキエー君 (M. Eugène Baffier) 一八五一年に生るはシャルロット・コルデー (Charlotte Corlay) は良家の女にして美を以て聞え、ベルサンヌにてふ情郎ありしが、この人マラーに誣告せられて暗殺に逢へり。是に於てシャルロットは巴里に急行し、マラーに逢ふてその胸を刺せしが、之が爲め一七九三年七月十七日、齡二十五にして断頭臺の露と消えき。マラー (John Paul Marat) は一七八九年第一革命の爆發するや亂民の首領となり、遂に多數の名士を殺害せしが、上記の如くシャルロットの爲めに殺されき。セルヴェタス (Mieinel Servetus) 佛國著名の神學家にして又醫師なり。アリアン宗に歸依して平生カルヴィンと争ひ、或は匿名の書を著はして之を攻撃せしが、その後近れてネーブルスに赴く途中ゼネツに於てカルヴィンの徒黨に捕へられ、終に炮烙の刑に處せられき。一五〇九年に生れ一五五三年に死すの三像を出して、その諸作中最も逸品と稱せらる。三者の中セルヴェタスの像は近頃ブラス・ド・モン・トローズに於て除幕式を行へり。次にルイ・モーベル君 (M. Louis Maubert) あり、その刀に成れる名作はガンベッタの記念碑にして、精緻の巧を盡し、今後ニースに建設する豫定となれり。ガルデー君 (M.

Gautier) は動物を彫刻するを専業とし、斯道に於て巨擘と稱せらる。この外少年の彫刻家少からずと雖、鐵中の鉾々と稱すべきはジュアン・ブーシェー君 (M. Jean Boucher) を推さざるべからず。其彫鑿に成れる「ゲルンセー」に於ける「ヴィクトル・ユーゴー」と稱する作は一九〇八年中新に現れたる數多の作品中その名最も世に聞えたるものの一なり。又アッシュブーシェール君 (M. H. Bouchard) と稱する一家あり、その作「耕作」に従事する人は同年の展覽會中技倆最も強烈に現れたる逸品の一なりき。この外又婦人にして彫刻を業とし其技凡流以上に挺んでたるものあり。就中顯著なるをドビアンヌ嬢 (Mlle. Debièvre) とす。

第九章 戯曲作者

第三共和國が初めて其歴史の第一頁を開きし時、天才非常に豊富にして且つ大に鍊磨の功を積みたる許多の著作家及び俳優を以て民衆に娛樂と教訓を與ふる機關とするを得たり。本章に於て吾人は只其著作家のみを列記するに止めん。戯曲の作者中名聲最も顯著なりしはエミール・オージエー、小アレキサンドル・デュマ (大アレキサンドル・デュマは一八七〇年の戰爭中に死せり)、ヴィトリアン・サルド、エドワール・ベレーロン、ユーゼー・ラビシニ、メーラック、アレグイーにして、此數者に加ふるにフランソワ・コッペーの名を以てするも妨げなし。但しコッペーの光は帝國の末葉より耀き始め、且つ戯曲的よりも寧ろ詩的なりしことを知らざるべからず。

エミール・オージエー 第十九世紀の中頃より後佛國の劇場に上す爲め喜劇の出でしもの殆ど算なしと雖、時世の變遷に抵抗して最も善く存続したるはエミール・オージエー (Emile Augier) 一八二八年に生れ一八八九年に死すの筆に成りた

る「ポワリーエー君の婿」(Le Gendre de M. Poirier)の一とす。此一曲は一八五四年始めて世に公にせられしが、五十餘年後の今日に至りてすら苟くも劇を好む者にして親しく之を知らざるは稀なり。これ其コメディアンサーズ演藝館(Comédie-Française)第十章を見よの演技目録中一般人民の最も愛重する一なるが故にしてその演戲を見ること幾回に及ぶも人は始めて見し時と同様の感想を起し、その新に演せらるゝを聞く毎に行きて見んとする者多し。實に此作は愉快なる社會劇なるのみならず、同時に又精良の文學にして、その中に現さるゝ主要の諸人物は活々たる生氣を有し、年月を経過せばとて頽然老耄して陳腐となることなし。故を以て始めて戲場に上りてより已に半世紀を経過したりと雖、その衣服を除くの外殆ど全く變衰する所なし。第二帝國の始めの頃巴里の社會は階級制紊亂して貴賤混淆せしが、オージエーはこの状態をその喜劇に寫したり而して方今の状態如何と尋ぬるに、階級の混雜は同様にして却つて益甚しきを致せり。方今の人が半百年前の舊劇を嗜んで飽くことを知らざるもの一は之に由る。懶惰にして零落せる侯爵が剝落磨滅せる楯の紋地を修飾する爲めに、否、紋印は已に昔

日の如く重んぜられざるを以て、寧ろ空竭せる財帛を充實する爲め、身を貧賤に起せし富翁の女と婚するが如き其一例にして、斯くの如き人物は最近に於ける佛國の社會に頗る談柄となれる者にあらずや。若し細密に世態を觀察して之を叙述するを寫實主義と稱し得べくんば、オージエーの作に成れる諸の喜劇の特徴は即ち此主義なりと謂ふて可なり。如上の喜劇より後に出で、今日世人の最も善く知れるは恐らくは「冒險家」(L'Aventurier)及び「ナンノールシャンポール」(Les Four-chambelles)の二なるべし。近世の社會に流行する喜劇を現今の如くならしむるに於てオージエーは同代の諸他の戲曲家よりも更に強烈の感化力を有せり。

小アレキサンドルデュマ 大アレキサンドルデュマの子もまた同名同姓にして (Alexandre Dumas) 一八二四年に生れ一八九五年に死す。帝國と共和國とに兩屬す。吾人は概ね思へらく、彼の文學に於けるやその精神全く近世の趣ありと、然れどもその著作中若干は遠く前世紀の中葉に溯れり。彼は三人の銃卒 (Les Trois Mousquetaires) の著者の子なるより、世人をして父よりも年齒遙に少からんと思はしめたるが、實は父より少きこと僅に二十一歳なりき。その戲曲作者として名を出せ

しは一八五二年中、カメラリアの夫人「*La Danse aux Camélias*」の現れたるに始まり、その頗る好評なりし爲めに忽ちにして之を劇に改作するに至り、又伊太利の作曲家ヅェルデー（Giuseppe Verdi）の作にしてラ・トラヴィアタ（*La Traviata*）と名くる音曲と共に音楽會に歌はれき、奇なる哉、デマのこの著は血氣盛なる情熱の破裂にして傳記的の價値なき下劣の趣味を帯ぶるものなるに、公衆は狂喜してその眞價に不相當なる賞讃を與へたり、而して彼はこの後諸の著作を出して其智力的の價値遂に前著に超絶せしに拘らず、其初作は久しく劇場に歡迎せられ、以後の諸著は却て斯くの如く盛なる衆望を集めざりき、第一作以後に出でし諸作は盡く皆健全にして、デマは戯曲家の假面を被る道徳家たり、社會の最悪なる癩疽を醫せんとする病理家たりき、社會の癩疽とは江湖に毒を流す娼婦の跋扈するが如き、射利を目的として結婚するが如き、社交に狂癡する婦人及び之を羨んで摸倣せんとする似而非的の社交婦人が華奢歡樂を熱望して飽くを知らざるが如き、或は之と同一轍を進行する男兒が徳義を紊亂し理想を賤劣にするが如きを謂ふ、而してデマの批評峻嚴辛辣にして諷刺の機智閃々眼を眩するが如かりしかば、人

その文を読みその技を見て倦怠することなかりき、晩年に及び彼は更に新機軸を開きて一種の喜劇を作りしが、誰言ふとなく之を「*ラ・ビエース・ア・テーズ*」*Pièce à thèse* 哲學等の學說を仕組みたる劇曲と稱するに至れり、其中に在る諸の人物は巴里社會に於ける世態を研究して作出せられ、徳義又は行狀に關する困難なる疑問を起し來りて主題とせり、次でデマは又大團圓とする意思を以て新一劇を作り、以て自ら前劇に提起したる問題の答とせり、然れども評論家中多數の人は思へらく、その答往々朦朧として毫毛も斷乎たる解決を與へずと、是等の喜劇は何れも始めて演技に上る毎に擾然として巴里の都人士を騒がせり、然れどもデマの逝くと共に流行も亦同時に消滅せり、一八七〇年以來の諸作中最も良好なるは「クロードの婦人」*La Femme de Claude*、「外國人」*L'Étrangère*、「バグダットの王妃」*La Princesse de Bagdad*、「フランシヨン」*Francillon*、「ダニエ」*Danièle*なり、父なる大デマは機軸あり虚構力なる著家として小デマに卓絶せしも、學士院に入るこゝと能はざりしが、子は才力劣りしに拘らず久しくその會員たりき。

エドワール・ペーユロン エドワール・ペーユロン (Edouard Pailleron) 一八三四年に生

れ一八九九年に死す)が名聲を揚げしは主として巴里の風俗を諷刺する喜劇を出せしに由り、その歴巻第一と稱するは、吾人の倦怠する世界(Le monde ou l'on s'en-
nue)にして一八八一年に公にせられたり。其筆に成れる最も優良の作は必ずしも此一著のみにあらず、その後になりし、虚偽の家庭(Des faux ménages)、忘恩の時代(Le déshonneur)、旅役者(Des Cahouins)の三作は機警の光輝閃發して寸鐵人を殺す趣あるのみならず、其文辭は十分の琢磨を経たり。然れども劇場のみに就て之を論ずるに、戯曲が永遠に存すると否とは獨りその理想の雅俗と文學的價値の有無とに關せず。一般の世人は唯娛樂を求むるに急にして文辭の巧拙を問はず、足禮場の門に及んで觀覽料を納むる時金錢を拂ふ意思如何と問はず、概ねこれ娛樂を得んが爲めなるべし。其中或は劇詞の優劣を研究せんとする好學の士なきにあらずるも僅に數名に過ぎざらん。而して斯かる學究は一般に多費なるを厭ふ者なれば、寧ろソルボンヌ學校に講義を聴くの廉價にして有效なるに如かず。吾人をしてペーユロンの喜劇を庇護せしめなば、明確に文學の價値ある故讀むに堪へたりと言はんのみ、吾人の倦怠する世界一度世に出で、より後、沒趣味の蕪詞

を濫書して讀書界を倦厭せしむる徒は彼の名を聞て多少恐怖を懷けり。文學、科學、美術を時趨に後れたる無用の長物とし、而も一として聴くに堪へたる警句を語ることを知らず、恰も雨後の符の如く續々として輩出する徒輩は最もペーユロンの名を畏れき。彼は又罪惡甚しからざる人物を譏諷すること慘酷を極めたりとて今日まで往々世の攻撃を受けたり。然り、彼は其諷刺の筆實に苛刻にして、尋常の茶談に於ても其銳利の舌動もすれば人を干犯せり。

メーラック及びアレヴィー・アンリ・メーラック(Henri Meilhac)一八三〇年に生れ一八九七年に死す)及びリドヴィック・ハレー(André Halévy)一八三四年に生れ一八〇八年に死す)の二人は夙に相協力して文墨に従事し、その諸の合著は帝國の末年に著名となれり。然れども、オッフエンバック(佛國著名の音曲作者にして一八二二年に生る)の小樂劇叢書中に二人は飄逸なる劇曲を寄せしが、この叢書は佛國に於て卑劣なる打撃に逢ひしに拘らず、一八七〇年まで久しく輿望を維持せり。翰墨界に於て此二家が同心戮力せしは第四章に文學を論ずる時アレヴィーに就て既に叙説せり。ゼロルスタンの太公妃(La Grande Duchesse de Gérolstein)の作曲家オード

ラン(Audran)一八四二年に生れ一九〇一年に死す)及び「コルンツールの鐘」(Les Cloches de Cornévillie)の作曲家ロベル・ランケット(Robert Languet)一八五〇年に生れ一九〇三年に死す)も亦知名の小樂劇作者なれども、メーラック、アレグリー二家の合作に成つて世に流行する小樂劇に比すれば文學の趣味稍劣れり。

ヴィクトリアン・サルドー君 佛國戯曲作者の淵藪中老手の名を專にする者をヴィクトリアン・サルドー君(M. Victorien Sardou)とす。其驚くべき勤勉の力と豊饒肥沃なる頭腦より湧出せし喜劇及び戯曲は積んで山を成し、實に君の爲めに記念碑となれり。今人の中縦令柔腕を揮ふて君と力量を較べんと夢想する者あるも、若し此汗牛充棟の著作と見ば恐らくは蹙然として逡巡し赧然として羞耻せん君の生れしは一八三一年にして、襁褓の中より巴里に在りし故同都に關する記憶は殆どその出生と同時に消えたり。君の設立に係るハセット會社は今こそ書籍の出版及び販賣を業とする大會社なれども、その未だ幼稚なりし時代に君は垢染みたる職工用外套を衣服の上に掛けて一事務員と共に自作の畫に札を貼附せり。父サルドーは簿記學の教師なりしが、簿記はヴィクトリアンの少しも

嗜まざる業なりき。然れども自己の胸中には將來資産を蓄積するに十分なる計算ありしなり。君は一旦醫學に志して其一斑を窺ひしが、朋友等は君が方向を誤りてその資質に相當せざる學に熱中するを憂へき。其後偶、フィルム・ヂドーの依頼を受けて人名辭典(Biographie Nivernaise)に挿入する一短篇を編することとなり。拮据して力を文墨に潜めしが、之を動機として今は翰苑に身を委ねんと決心せり。君自ら曰く、この一小篇の爲め余は幾個月間穿鑿の勞を費し、僅に三十五法を得たりと。思ふに聊か針小棒大の言ならん。之より後戯曲の著作に毫を染めんとする抱負類に心に萌して自から禁ずること能はざりしが、始めて作出したるは「薙刀手の酒樓」(Le Taverne des Tabans)にして、一旦歡迎せられて、オデオン座の劇壇に演せられたるも甚しき失敗を招きたり。次で君は五段より成る「廉直の人」(M. Corneille)てふ一作を著せしに、恰も好しデジャゼー(女優の名)を訪問する許可を得たりければ、乃ち此原稿を懐にし勇を鼓して其門を叩けり。君の心にはデジャゼーこそ實に鈞天より降り來る神女なりき。然るに豈に圓らんや盛名狼藉たる此大女優は奇香袖に滿つる紅粉ならで汚穢衣を濕ほさんとする泥土を兩手に塗て

君を迎へたり。君の言に曰く、此時予は愕然として口を開き茫然として語るに能はざりきと、女優は嫣然として徐ろに一笑し、呆然自失せる少年に謂て曰く、妾は壁を修理し居たりと。此簡短なる一語に君始めて其故を解して漸く心を静めしが、心中竊に興味を感せり、而してデジャゼーは、廉直の人を嘉賞せざりしも、其詞曲「ガラー君」(Monsieur Garni)及び「リシ」(L'Amour)の第一の武器(Les Premières armes Co-Richard)中主要なる部分を演せんことを諾し、以て君の爲め名譽と成功の路を開けり。

然れどもサルドールの盛名は詞曲より更に堅實なる著作に出づべき運命を有し、この後世人漸く君を認めて端倪すべからざる才能ある戯曲作者なりとし、輕佻なる喜劇中最も巴里の特色を現す「蠅の脚」(Pattes de Mouche)出でより後は天下の人を歡喜せしむべき異才ある大家とせり。觀聽者をして好んで自ら欺き、茫乎として夢の如くならしむる詭計に敏なる點も亦この作に現れたり。この妙技に於てサルドールはスタリオン(Augustin Eugène Scobie)は佛國絶倫の戯曲作者にして一七九一年巴里に生れ一八六〇年に死す、及びその模倣者よりも更に機巧なりと

稱せられき、且つ又曲中の對話、機智、滑稽、何れも皆新鮮なる閃光と發し、その眞言隱語は輕妙にして人を犯さず、故に時々劇を観るもの如何ばかり深く佛語の微旨に通するも此曲を耳にして決して羞耻の感を起すことなし。サルドールが群をなせる戯曲作者中に覇を稱する所以の者偏に是等の如き諸の資質を兼備せしに由れり。

サルドールは前述の如く巴里の本色を現す喜劇を陸續世に出せしが、一八八〇年に成りたる「デヴルソン」は最大の成功を收めたる一なり、斯く多數の喜劇を作出せし後、君は多少歴史に關する戯曲に注意を轉じ、殊に女優サラ・ベルナルの巧妙なる演技に注意し、この優の爲め其劇の主要なる部分を著作せり。此種に屬する作中「テオドラ」(Théodora)及び「ネドラ」(Nedra)の如きは國の内外に知られて好評を博せしこと今爰に詳論するを要せず。然れども此類の著作に於てサルドールは自家の名譽を揚ぐるよりも寧ろ直接の利益を求むる爲め筆を執りしこと明瞭なり。蓋し實を重んじて名を輕んじ利を貴んで譽を賤むは惡眼なる君の特徴なるべし。毒殺事件(L'Affaire des Poisons)は其最近に成れる曲の名なり。

アンリーベック 第十九世紀の最終に於ける十七年間を見るに、凡そアンリーベック(Henry Beuck)一八三七年に生れ一八九九年に死すの如く着々名譽の方向に歩を進めし戯曲作者なし、然れども成功に達すること容易にあらざりしのみならず、實に成功の極に達せざりき鳥(Jas. Guibent)はベックの名を世上に知らしめし初回の戯曲にして、許多の評論家は之を以て著者の一生中最良の作と思考す、この著の成りしは一八七二年なれども一八八二年に至るまで劇場に歓迎せられざりき、その原稿は十年の久しき間幾度か諸劇部の間に彷徨しながら常に原作者の手に復歸し、恰もノアの鳩の如く飛來飛去休止する所を求むる能はず、吾人の知る所を以てすれば、巴里城中六座の勾欄を歴訪して何れも皆拒絶に逢へり、アンリーベックの著作の特徴は苛烈にして躁急なる譏諷にして、鳥には此特徴未だ十分に發達せずとするも、已に夥しく茂生して全卷に滿つ、これ一冊の原稿が久しく諸所を遍歴流浪せし理由と思はれざるにあらず、ベックは屢勉なる著作家にあらざりき、故に其名聲は此一著の外主として「巴里の婦人」(Parisienne)の一曲に係る、著者は一切の社會を評論し諷刺して寛假有恕するを知らず、其峻烈痛切

なる談話は時として殘忍兇猛に逸することあり、男子を見るや彼は之を以て狡獪詭詐を極むる者とし、女子を見るや薄情輕佻利己の結晶とせり、故に其厭世觀は最も陰鬱にして之を戯場に出すに堪へざりき、然れどもその人物を描寫するに當り之をして語らしむる技倆巧妙の極に達し、對話の言語は警拔簡潔にして星光の燦として閃くが如し、彼に於て取るべき所はたゞ是のみ、吾人は共和國成立以來戯曲を作する著述家中彼が智力最も高尚なる一人なることを許さざるを得ず、然れども惜むべし、其厭世主義は尋常の程度を越え、人類を嫌忌する辯明晰に露出して隠匿するに由なし。

ジュールルマイトル君 Jules Lemaitre)は劇曲の著作を試むるに先だち文學及び戯曲の評論家として久しく鑑衡を持せり、凡そ劇部の詞曲を作る者は自然の辯性に促されて筆を執るを常とし、再三再四蹉跎して悲歎に沈むも敢て屈せざるなり、然れどもルマイトル君が戯曲の著述に志せしは斯くの如き性癖に出でしにあらず、寧ろ此徑路を利用して胸中の思想を人に傳へんと欲せしにて、實に智力高尚なる文士に見る得べき決心なり、蓋し戯曲の著

作は直接に社會の公衆と交通する路を開き、兼ねて又成功すれば巨額の報酬を得べし。故に諸の職業中人をして最も欣羨せしむる者の一なり。唯ルマイトル君に至つては則ち然らず。自家の理想を世上に傳播するを目的とし、此志望の利益と弱點は自ら其戯曲中に現る。弱點とは何ぞや、社會と交通せんとする感情に乏しきこと是なり。換言すれば公衆の嗜好に訴へて其興味を喚起すべき要點を先天的に理會するは劇曲作者の要素なるに、君は此才能を十分に具有せざるなり。ルマイトル君は一八五三年に生れ、その初回の作「代議士ルゾー」(Le Député Luvain)は一八九〇年に至り始めて世に現れしが、幾くもなくして潔白なる結婚(Mariage Blanc)「困難なる時代」(L'Age Difficile)その他諸の著作陸續として出でたり。その後現れたる戯曲中成績良好なるは「高弟」(Le maître)及び「バトラード」(Bataille)なり。世に所謂「心理的の喜劇」(英語に Psychological comedy)を流行せしめしは此著者與つて大に力ありき。高弟は善く人情を寫せる作にして興味頗る多く、その中に含める諸の活劇は眞に絶好の喜劇なり。その主題は先輩の未だ想ひ到らざりし所にして、心情の分析斯くの如く力あるも亦前人の作に見ざる所なり。其概要を述べ

んに、一人の畫工あり、名譽已に高くして又資産に富み、今は年齒漸く高からんとす。その門弟中に一人の女子ありて漸々師に愛顧せられ、高弟として繪畫室に列座する諸他の門人よりも親しく師に近接するに至る。斯くて此少交は頓て一門中の首座を占め、諸門生と先生との間に事の起る毎に常に他生の代表者となる。而して此畫工は善意の人物なれば深く妻を愛して閨門善く治まり、少女を愛すること日に甚しきも唯父の子を憐むが如くにして技術上にのみ十分の利益を興へ、自ら戒めて此以上に深く關係せず。然るに彼に一人の男兒あり、この女子と愛戀して婚を約せんと欲せしが、この事の暴露するに至り彼の心情忽ち一變して忿怒の情一時に爆發す。而してこの忿怒は要するに嫉妬心の發動に外ならず。終に妻は夫に理否を説て我子と少女の結婚に同意せしめ、曲は此にて終結す。ルマイトル君の作曲は常に文學的の價值多きを以て、豫め之を讀みたる人は其劇を見て十分趣味を味ふを得るなり。

ドボルトリシュ君　ドボルトリシュ君(M. de Porte-Riche)も亦心理的喜劇の鉛槧に従事する文士なり。君の嗜好する題目は戀愛にして、その微巧なる分析力を専ら

この一點に集中す。その生れたるは一八四九年にして、評論家は君に與ふるに方今の戯曲作中崇高の位地を以てす。然れども君の今日まで作出したる著作は太だ多きにあらず。その「情人」(Amoureux)てふ作は實に君の名を世に知らしめし媒介にして最も傑作と稱せらるゝところ、その始めて出でしは一八九一年なり。曲の趣意は人を誘惑するに巧にして躁暴なる少女あり、中年の男兒之と婚して大に困惑せしことを述ぶ。而して男子が婦人の感化力に奴隸となり、一切の智力と品性の力とを蔑視して自ら世の笑を招くに至り、この苦境を脱する爲めに争闘煩悶する狀を寫し出せり。此喜劇の趣向嶄新にして大膽を極め、加ふるに至險の題目を取て巧妙に之を叙説す。故に今日まで衆望の集まる所となり、將來に於ても久しく好評を持續すべしと思はる。初めゾードヴィル及びルネーサンスの兩劇場に演せられ、其後近年に至りコメディー・フランセーズ演藝館の演技目錄に加へられき。過去「Le Passé」も亦同著者の筆に成りし一喜劇なり。

エドモン・ロスタン君 第十九世紀の暮くるゝに垂んとせし頃佛國の戯曲界に現れて成功の光最も盛んなりしはエドモン・ロスタン君 (M. Edmond Rostand) の一

著「ベルジッタックのシラン」(Cyrano de Bergerac)なること誰人も之を否認せざるべし。現今の詩壇に在つて同君が高尙の地歩を占むるは曩に既に説示せし所にして、君は戯曲作者よりも實に詩家なり。而も戯曲家として文學上永久に存続すべき此秀絶の好著を出せり。一八九七年其始めて公にせられし以來、一般の公衆はロスタン君が再び才筆を揮ふて前作に劣らざる詩的戯曲を著はすを待つや切なり。然れども吾人は未だ君が續貂の舉あるを見ず。

ポール・エルヴィウ君 テアートル・リブール演藝館(Théâtre Libre)次章に見ゆは自然主義を呼號して濁流渾々藝術界を浸せしが、其後反動は果して起り來れり。今上に敘説せし二三家は、生きて此逆潮の襲來を見るに及べり。又オージエー及び小デマの徒は俗態の喜劇を非難して叛旗を擧げしが、これ亦この二三子の目撃したる所なり。オージエーと小デマは同一所に陣地を作りしが、これその先輩ユージェン・スクリーブの喜劇が久しく流行せしを見て少からず之に動かされしに由れり。而して近代の運動に感化せられたる戯曲作者が目的とする所、及び抱負とする所は、主として舊來の軌轍を離れて別に新路を開くに在りき。何となれ

ば舊來作曲家の遵守せし徑路は已に磨損して用をなさざるのみならず、人幾回か往還してその性質を熟知し、其陳腐なるに倦んで早晚之を棄つべければなり。此諸輩の中最も倫を絶つものはポール・エルヅィー君(M. Paul Hervey)一八五七年に生るなり。君は從來流行せし喜劇が純粹の喜劇ならず、喜劇なると同時に悲劇なるを見、その駁雜にして均齊ならざるを嫌へり。故に君の作曲には嬉笑を催すべき餘地甚だ多からず、暗澹たる陰翳全巻を掩ふ。故を以て世之を呼んで「都民の悲劇」(Tragédie Bourgeoise)と名けたり。思ふに不當の稱にもあらず、凡そ兇惡狽猛なる人性に苦惱を受けて之を嫌厭し、善美の性質を旅資として人生の行路に就きしものを惡業と窮難に陥るゝ、殘忍の命運に苦み、惡逆にして濟度し難き世界に生れ來りし誤を悟る諸人は、エルヅィー君の戯曲を以て大娛樂を得べき源泉とす。君の作中最も主要なるは「松明の進行」(La Course du Flambeau)「謎語」(L'Enigme)「岐路」(Le Dédale)「警時鐘」(Le Réveil)等にして、人間の一生を寫す是等の悲惨なる繪畫を以て心を奨勵し神を娛ましむる好劇家少からず。

エルヅィー君の寫實主義は概ね人心に悲痛を起さしむ。然れども自然主義の病

なし、君はたゞ人生中最も慘澹たる方面を描きて明瞭に之を示すのみ。而して近時の社會に於て人が野鄙殘忍邪惡の極に墮落するは有罪なる戀愛に在りとは、戯曲家の一般に唱ふる所にして、萬巻も替ならざる劇詞と喜劇は常に有罪の愛を中心點とせり。然るに君は獨り獨特の見を抱き、松明の進行に於ては大胆にも一般の定論に反し、斯かる極惡に陥ると否との分界點は戀愛にあらず、金錢の貪慾なるを證せり。此他君は又劇界に行はるゝ陳腐の法則と煩瑣曖昧なる慣習に反抗し、自ら勇壯なる革新家となりて自作に注意せり。

モリス・ドンネー君 (M. Maurice Donnay) は一八九〇年以來突如として暗黒より現れ來り、今は劇界に最大の成功を得たる作者の一人となりたり。その生れしは一八六〇年にして、一八九二年中その著「リジストラタ」(Lysistrata)世に出づる後まで巴里はドンネーなるものゝ存在を知らざりき。この外諸の篇什急速力を以つて續出せしかども、一八九八年中「ジオルゼット・ルムーニエ」(Georgette Lemennier)の出づるまでは著者の地盤未だ實に堅確なるを得ざりき。この喜劇の力はその脚色に在らず、殆ど之を脚色ある作と言ひ難きを以てなり。然れど

も人物を描寫するに妙なるはこの著の方ある所以にして、一人の男子を寫す場合に其心情を分析し得て機巧なるは殊に力の存する所とす。其大要を述べんに、此男子は一時に其妻及び他の一婦人に戀着し、兩者に對して均しく戀篤ならんと欲せり。而して妻は此事情を悟るに至りしが、一夫多妻主義を教理の中樞とするモルモン宗の學校に倫理學を學びし事なきを以て、夫の破倫を知るや怨嗟憤懣我母の許に走りて事の仔細を語れり。夫ルムーニエーは兩手に花を見て先づ自ら樂み兼ねて又妻妾兩者に樂を分たんと計畫したるに、妻の運動に由りて成竹全く破れたり。この一著の世に出るや世人忽ち興味を起せしが、思ふにこれルムーニエー夫婦と境遇を同うするもの必ず少からざるに由らん。然れどもこの一事必ずしも該著の好評を得し唯一の原因にもあらず。何となればドンネー君は山來一種の妙術を解し、極めて世故に通ずる人物を補助として曲中に挿入し、之に談話せしめて終始聽衆の注意と興味を持続する秘訣に長ずればなり。是等の人物は皆饒舌にして快活なる譏諷嘲罵種種々底極する所なく、その語る所放肆横逸にして屢、道德の縁邊に走り優雅の限域を踰えんとす。然れども巴里の好劇

家にして幾分か平淡の趣味に飽ける者は諸他の調味よりも寧ろ之を甘しとして舌を鼓す。而してその語は婉曲巧猾にして其中に微旨を隱匿すと雖、時ありてドンネー君は直白にその微旨を漏洩せしむることあり。これ道德の見地より見て第十六世紀の眞率なる風は第二十世紀の偽善よりも善ならずとせざればなり。思想に關しては方今の巴里社會恐らくは往時よりも動搖し難きに似たり。然れども著者が意思を表白するに生硬鹵莽に陥ることなく、而も直接に其事を明示する輕妙滑脱なる術の在るあり。なほ曲馬師が空中に輕捷の技を演じて名譽を博するが如し。

ドンネー君が近時作出せし戯曲中人の廣く記憶に存するは、ゼルサレムよりの歸還 (Le Retour de Jerusalem) なり。猶太種の一女子と基督教徒の一男子と相戀愛せしが遂に破鏡の不幸に至れることを主意とし、當時流行せし猶太人種排斥問題に對する佛國人の興味に輕觸する意を以て斯かる題を撰擇せしが如し。蓋しドンネー君思へらく、希伯來人と歐洲人との間には性格大に相異なる者ありて其分岐線は深く刻せらる。故に猶太人と諸他の人種とは一時感情の相融合する事あ

るも到底久しく相調和すること能はずと、君が此戯曲を著すや此見解を示すの外別に目的なき者の如し、而して其表題の如く佛國人が「セルサレムより歸還すること」を述べれども、この事實に何等の意をも含まざるは論を待たず。又「自由結婚」(free union)の事を述べれども、此制度の脆弱なるは已に顯著なり。既往數年間ドネー君は「他の危険」(L'Autre Danger)「候鳥」(L'Oiseau de Passage)「外觀」(Paraitre)の三作あり、其第二は「リュシアンデカーツ君」(M. Lucien Desarves)との共著なり、第三は一九〇六年「コメデー・フランセーズ館に演せられ、戯曲の諸作中頗る彫琢を経たる一篇にして、輕佻浮薄なる社會を寫せる甚だ快活なる繪畫なり」。

ユーゼン・ブリュー君 一八八四年離婚法制定の直前直後に於ける數年中輕快なる喜劇の作者は快活なる興味の新源泉を發見し、笑を催すべき趣向の材料を得たり。就中サルドー君とアレキサンドル・ビュッソン君(M. Alexandre Bisson)はその最なるものにして、前者は一八八〇年に「ヂヅルン」(Divorcés)を出し、後者は一八八四年に「離婚の驚愕」(Les Surprises du Divorce)を出せり。之より以後十有餘年間、巴里全都士女は談柄離婚に及ぶ毎に盧胡として大笑したるが、頗て笑ふに倦んで苦笑し

始めき、而して法律上離婚を許したる結果破鏡の悲歎に逢ふもの種を接して頻出し、豫期の如き満足を與ふること能はず、到るところ困難煩累の事情を生じて之を解くに由なく、兒童の處分に至りては最も心を苦めたり。蓋し縱令室家治まらずして夫婦相争ふことあるも、假すに時日を以てしたらんには再び相和合したるやも知れざるに、新法律の發布ありてより後は相反目する夫妻が一時の忿怒に激せられて覆水再び收め難き憂を見ること極めて夥し。これ即ち戯曲の作者が新法の社會に與へたる至大の弊害を指摘して一世を警醒すべき時節至れるなり。始めて此機に乗じて之を劇に上すことを工夫したる一人はユーゼン・ブリュー君(M. Eugène Brieux)なり。君は一八九八年中「搖籃」(Le Berceau)と名づくる一曲を公にして、直白に全問題を正義の盤石に置き、佛國人の感情に訴へてその脚色を案出せり。即ち離別の後其兒子を奈何すべきやを議論し、以て子を愛するに切なる佛人の情を叩けり。此戯曲の梗概を示さんに、ローラン・ス・シャントレルなる婦人我夫に貞操の節なきを信じ、之を法廷に出して勝訴の望十分なりとせしかば、火急に其歩武を進めて、尙に離婚の宣告を受け、先夫を忘れんが爲めにとて他夫

に再醮せり。然るに先夫に生みし一兒あり、法律上ローランヌは之を我有とせしが、不幸にしてこの童兒の貌その父に酷似しければ、妻の先父尙存するを以て後夫は嫉妬の情に堪へず、恰も先夫の眼前に在る心地して此兒を見るに忍びざりき。彼は斯かる感情を抑制せんと試みしも、自然に湧出する嫉妬盛にして之を克服するに由なく、從て妬心を挑發する此兒を膝下に見るを嫌へり。頓て兒は病に罹りて頗る大患となり、命旦夕に逼らんとす。此時恰も先夫其門を叩いて童兒を一見せんことを求め、斯くて一旦袂を別ちし夫婦は愛兒が病榻の側に再會せしが、互に往日を回想して戀々の柔情禁すること能はず、相抱持して泣く涙涕滿たり。悔悟の語は先夫の唇より洩れき。ローランヌは其心を諒として之を宥慰せり。二人は再び斷絃を續ぐに意あり、之を望めば宛然として夫の如く妻の如かりき。然れども如何せん無形の一大障壁は二人の間を遮ぎれり。法定の眞夫現に存じて愛に在るを奈何せん。ローランヌの之に嫁するや心之を好みしにあらず、寧ろ之を憎怨せり。而も友朋の切なる勸誘に動かされて心ならずも貞節を破れり。斯くする中童兒の病は癒えき。而してその結局の歸は言はずして自ら明かなり。世

上の實際を見るに離婚せし夫妻が相和合して再び婚するはその例なきにあらず。この他同一の著者が社會の弊害を醒覺する目的を以て著はせし諸作あり。デュボン君の三女 (*Les Trois Filles de M. Dupont*) は其一例なり。君は勞働階級以上の女子にして嫁資なき者が夫を求むるに苦むを慨し、此一曲には斯かる不便なる結婚制度より起る有害の結果を指摘せり。又、競馬の結果 (*Resultat des Courses*) は金錢を賭する弊害を示すものにして、此惡習が既往二十年間益々盛にして廣く佛國に瀰蔓し、今は衣食の爲めに勞作せざるを得ざる貧民の間にすら波及して害毒を流しつつあると明歴々に其中に寫出せらる。著者は近來又「アヴリエー」 (*L'Avriès*) 及び「孕婦院」 (*Maternité*) の二曲を出せしが、此中には俗人の法談をも見るを得べし。アンリーラヴダン君 (*M. Henri Lavédan*) は自己の時代に於ける生活状態と風習とを諷刺するを専らとし、其諷刺の風恰もジュヅナル (*Dein*) *Junius Juvénal* 羅馬の諷刺的詩作者にして、紀元五九九年に生れ一二八八年に死すに似たり。然れどもジュヅナルの風を學びしにあらず、又之と同一の猛烈なる着色を以て繪畫せしにもあらず。されど其諷刺の華美快活ならずして峻烈刺薄なるは

相似たり、君が劇壇に出す人物は所々の客室其他近接し得べき所に觀察研究せし者にして、之を惡むこと極點に達せり、世人に熟知せらるゝ佛國の戯曲作者は譏諷する間にも笑を含み、惡癖ある者、賤劣なる者、詭譎なる者、害意ある者を喜劇に入るゝ毎に殆ど常に談諧を雜ふること比々皆然り。たゞラヴタン君は其選を異にし、苟くも譏諷するに臨んでは決して笑貌を示さず、秋霜烈日の威を以て凡ゆる徒輩を責罰す。往時英國の法官サー・フランシス・ページ (Sir Francis Page 一七一八年に生れ一七四一年に死す) は苛酷を以て統刑法官 (Warring Judge) の名を得しが、ラヴタン君も恐らくは此種の人にして、若し性理の熟察を待たず、囚人を刑戮に處せし昔日に生れ任意に一切の刑徒を處罰する機會を得たらんには、ページと同様に統刑法官たること察するに餘りあり。君は一八六〇年に生れ、その著、ツェルチー嬢 (Menzlie Vertin) は多少價值ありと稱すべき初回の作にして一八八五年に出でたるが、當時二十五歳なる一少年の筆としては前途の望多大なりき。著者は今已に五十に垂んとするに尙少壯の戯曲作者中に數へらる。これ聊か奇怪なれども世人は著名の人士に恰好の新名を與ふるまでは、老少を論せず、少年てふ

附箋を之をに貼する習慣あり、凡そ才華煥發する名士には老少の間に中年なし、婦人に於ては益然り。プリオラ侯 (Le Marquis de Priola) はラヴタン君の述作中最も善く知らるゝものゝ一にして、其實質は現世紀に關す。其主人公は侯爵にして、近世社會に於けるドン・フリアン (人を誘惑するに巧なる人物の事) の肖像を描寫す。其一筆一畫を見るに著者は此種の人物を熟知せること明かにして、自ら觀察したる數多の人に相通する主要の特徴を凝縮して此一人を捏造せしこと疑なし。從來大詩人中にはドン・フリアンの性格を有する人物を寛恕し、戯曲の作者も恩意を之に示せし者多し。然るにラヴタン君はプリオラ侯を遇すること溫柔ならず。フリアン式の性格を見て瑣細も寛假する所なし。侯の性格は獸畜の慾と一種他の性情との結合せし者にて、他の性情とは殘忍なる禽獸の性情にあらず。思ふに魔鬼の如き極惡の性なり。何となれば其意思の主として向ふ所好む所は最大の害毒を致さんとするに在ればなり。これ天賦の性を顛倒する者にして、此種類の戀愛のみを以て其猛惡の性を現す。故に其猛惡は最劣惡の情慾なり。古往今來誘惑を以て名ある者多けれども、未だ斯くの如く醜惡なるはあらず。從來の劇に

見らるゝが如くんば、誘拐者が確實に婦人を擒獲せんとするや唯之に網罟を投ずれば可なり。されどラヴゲン君の寫出せる侯爵は斯かる舊式なる誘拐者の如く横暴にして極悪非道なるにもあらず、又斯かる目的を以て進み行かんとする膽勇もなし。作者が此新式のドン・フーアンをして醜惡異常の怪物とするよりは寧ろ賤むべき卑劣漢とせしは固より意ある所にして偶然の結果にあらず。侯爵は一切の婦人を賤んで之を輕侮し、愛意を女性に示すは其能くせざる所、而して縱令婦人に交を求むる事あるも其主要なる目的は浮華なる虚樂を傳ふるに在り。人若し侯は新に某々の婦人に懸想せられたりと語るあらば、彼は之を聞きて最大の快感を覺ゆるなり。彼は實に此類の聲聞を以て至大至重の名譽とし、其生くるは此名を維持するが爲めなり。斯かる性格の人物は吾人の往々知る所にし、てラヴゲン君が劇曲を媒介として吾人に紹介する諸婦人よりも解知し易し。されど、ブリオラ侯の一作は決して方今の世態を寫す愉快なる畫にあらず。蓋し作者は四周に在る一切の人に鞭撻を加ふればなり。凡ゆる人を鞭撻したればとて必ずしも社會一般がこの劇曲に現るゝ如く兇惡乖戾なるを證せず。此戲曲は生

硬にして彫琢十分ならざる點多し。然るにテアートル・フランセー演藝館は之を取て演技に上せり。蓋し方今は主要なる劇場の戲臺に於てすら如何なる曲を演ずるやを明定し難きなり。

ラヴゲン君は一九〇四年中「決闘」(The Duel)と名くる戲曲を出せしが、決闘の作法なる「敬禮法」(英語 Code of honour)てふ不文律の道德を是非するにもあらず、又二人の決闘を發端又は結末として脚色を作れるにもあらず。此作に所謂決闘とは思想及び感情の表裏相反する暗流の相戦ふてふ義にして、明言すれば異教と基督教との對峙なり。只趣旨を述べんに、一人の侯爵と其夫人とあり、夫は妻と同一の門閥に屬すれども罪惡と敗徳の權化にして、妻は不遇にも之と婚せり。而して夫は病に罹りて命殆ど朝夕に逼り、毫末のモルヒネだに之に投ずれば氣息忽ち絶ゆべかりき。斯くて夫は私立病院に在りしに、妻は同院の醫師に懸想して其意を得たる情人とせり。夫妻兩人の狀を傍觀するものは稍、奇異の感を懷けり。何となれば二人の間には深き懸隔ありて其思想も所信も全く相反し、人生の觀念も亦全く相反すればなり。妻は富有にして門流高き佛國貴族に生れし一般の婦人の如

く嚴肅なる天主教の雰圍氣中に養成せられ、敢て篤志の信者にあられど基督教流の道徳と氣風は密に其理想に浸潤せり。之に反し其夫は無神論者にして毫も敬虔の心なく、其性癖は粗野卑陋にして男女の關係に至つても全く異教者の見解を有せり。故を以て妻の薦むる樂餌は聊かも之を重んぜず、頑固にも無情にも自ら之を放棄せり。斯くて劇は平板に流れて軋轢の結末を知るに由なき處少からず。然れども終に侯爵は故らに病院の窓より飛躍し妻の醫師と婚するに任かし、以て圓滿に局を結ぶといふに歸着す。心理的の戯曲として此作は趣味多き所以は、主として補助の人物を添加せると、是等の輩が夫妻に疾視反目せしむることに由れり。附て言ふ、ラッゲン君は輕快活潑なる思想を表すに長せる健筆の著家にして、其用語は強く人の注意を牽引して之を記憶に存せしむるに足る。一八九八年君召されて學士院に入れり。

フランソワドキュレル君 フランソワドキュレル君(M. François de Curel)は一八五四四年に生る。その作「化石」(Les Fossiles)は近來「恐怖博物館」(英語 Museum of Horrors)に實演せられしが、恐怖博物館とは或人がアントワン君のテアートル・リール演

藝館(天章の末に見ゆ)に附せし異名なり。モリエール館が近年「空館」(Open House)となりし事情を聞て世人は奇怪なる事變とすれども、化石が再び近時に現れしに比すれば必ずしも異常の事にあらず。何となれば此劇曲の骨髓は自然主義なり。否、寧ろゾラ主義といふを當れりとすべく、而して斯かる主義は佛國に於て夙に衰廢しなければなり。化石は一兒の父が或る人なりや又は其子なりやてふ問題を主要點とす。君が率先者となつてより奇怪なる弊風を研究して之を寫し出す機會を世人に與へし事明瞭なり。此外キュレル君は又「新偶像」(La Nouvelle Idole)「獅子の饗宴」(Les Repas du Lion)「殘酷の娘」(La Fille Sauvage)等の作あれども、共に皆前作と同様に多少高雅の趣味に缺如あり。自然主義派若くはゾラ派に屬する作者の通弊を受けて風教に資すてふ美名の下に有害なる好奇心を煽動せんとするものなり。

オクターヴミルボー君 オクターヴミルボー君(M. Octave Mirbeau)は一八五〇年に生る。曾て暫らく郡長の職に在りしが吏務は其資質に適する所にあらざりしかば、頓て任を解て文學界に投じ、小説家及び新聞記者として甚だ繁忙なる日月を送りしが、更に近年に至り戯曲の作者に豹變せり。君嘗て「戲謔漢」(Le Pire)と題

する論文を公にして喜劇俳優の職業を論じ、罵倒嘲侮の語調暴慢を極めければ、之が爲め大コクラン君(第十章に出づ)と争論を起せり。これ巴里人士の今尙記憶する所なり。思ふに當時ミルボー君は後日自ら劇壇の詞曲に筆を取りて俳優の必要を感すべしとは夢にだも知らざりし所なり。その作「奸悪なる牧人」(Mauvais Bergois)は一八九八年に出で、次で一九〇三年「レーザッフェール・ソン・レーザッフェール」(Les Affaires sont les Affaires)出で、この最後の作の趣旨は近時社會人心の腐敗を暴露して其誤謬を醒覺せしむるに在り。其大要を語らんに、現今の世人が金錢の獲得に心を奪はると言ふは正しく其眞を道破せる者にあらず。何となれば貪婪の情は未だ曾て現今の如く弱かりし事なければなり。之に反し金錢を以て求め得べき事物を健美する情の切にして一般なるも今日の如きはなしと斷言し得べし。金錢にて求めらるゝ事物とは百種の娛樂、奢侈なる生活、高價なる安逸是なり。約言すれば身心を束縛する桎梏と四肢を粉碎すべき勞苦に逢はず、遊惰佚樂して外觀の美を装はんとする是なりと。爰に吾人は更に附言せんとす。幸福の眞義を誤解すること未だ今日の如く甚しきはなしと。而して斯かる人心の狀態一般

に流行する結果は急速に巨額の金錢を得んとする希望大に獎勵せらるゝに至る。これ即ち此戯曲の大意なり。ミルボー君が此曲の表面に筆耕するや、曾てバルザック(其著「メルカデー」(Mercader)中)、「小デュイ」(其著「金錢問題」(Question d'argent)中)其他の諸家が已に犁鋤を加へし地に踏み入て新に之を耕せり。然れども換骨奪胎に巧にして一層嶄新の趣を添へ、決して故人の糟粕を舐めざりき。微賤より起り急に資産を作りて高貴の風を装ひ、賤劣、尊大、暴慢、虚誇なるのみならず、詐欺の手段を以て嘲嗟に摺得せし金錢を誇示し、金力の外重んずべき物なしとする徒輩は、皆此戯曲に於て解剖臺の上に置かれ、銳利無双の刃を有する解剖刀に截斷せらるゝなり。

アルフレード・カピュー君 現世紀の叙幕開けてより以來興趣と娛樂を與ふる力量を以て社會の景仰する一星となり、今日巴里の劇場に材料を供する作者中、最も大なる輿望を負へる諸星と光を争ふ戯曲作者はアルフレード・カピュー君(M. Alfred Capus)なり。此方面に向つて君が句鍛字鍊に従事せしは近年に始まれるにあらず。されど初は其進路常に屈曲拗折せしが、其徑路を直線にして成功に導進せ

しは近年に屬し、以來今日に至るまで悠揚として平易の道を歩むを得たり。その一九〇一年に出せし作「ヴァーヴェン」(La Veine)は輕快の喜劇にして閃光飛動し、結構機巧にして而も複雑に涉らず、其精神全く巴里の本色を現す。この著には五十年前に流行せし輕快の喜劇に卻歩する徵候あるを認むべく、其翌年公にせられし城主の妃」(La Châtelaine)には同一の痕跡更に明瞭なり。思ふに巴里の士女は近年劇界の試み用ふる戯曲を見て漸く飽かんとする際なれば、スクリーブ(前に出せり)の作なる歌曲混合の喜劇及びラビシ」(L'Abichon)の滑稽劇再び勃興して巴里人を喜ばしむる兆にあらずや。更に近年に及びカピュー君の出せる著作中著名なるは「エー・アレーン君」(M. E. Arène)との合著「仇讎」(L'Adversaire)にして「吾人の少年」(Noire Jeunesse)も亦同一の好著なり。因に云ふ、同君の生れしは一八五八年なり。

諸他の戯曲作者 シャン・リシバン君(M. Jean Richepin)の才能は戯曲の作者としてよりも詩家として遙に卓越す。故に詩句を以て綴りし戯曲「ル・シニノー」(Le Clo-nincau)已に第四章文學の章に於て示せり。の善く成功せしに拘らず、本章に於て君の作を詳説するを要せず。

カチール・マンデー君(M. Octavie Mendès)も亦方今詩を以て鳴る一家にして、劇部の詞曲に其才能を著はさんと試み、一九〇五年には「スカローン」(Sarron)を出し、一九〇六年には「シャチニー」(Châtigny)及び「アヅィラの處女」(La Vierge d'Avila)を出せり。然れども何等の著しき成功をも齎らざりき。アヅィラの處女中に在る西班牙の聖人テレサは會つて劇場に演せられ、女優サラ・ベルナル夫人(次章に詳なり)之を扮せり。

エミール・ラブール君(M. Emile Fabre)は現世紀中世人に知らるゝに至りし少壯戯曲家の一人にして、或る弊害を矯正する爲め頻に諷刺の鞭を鳴らす。其著「公生涯」(La Vie Publique)は一九〇一年に出で、敏捷に且つ苛刻なる諷刺を以て政治生活を攻め、絶えず社會の大舞臺に反覆演出せらるゝ。選舉上の大喜劇には最も項門の一針なり。鍍金せる腹」(Les Ventres Dorés)に於て著者は又他人の金を保管して之を利殖し、佛國に於て「フアンシエー」(Fonciers)理財家の義あれども、又銀行家の義をも有し、富人の意にも用ひらる(てふ汎意の名を有する人物を諷刺す。

ピエール・ゾラン君(M. Pierre Wolff)は一八七〇年に生れて、齡なほ不惑に満たず、豫

め細心熟慮を要する人生の檢疫期即ち縁かに誤らば窮境に陥落すべき厄年は未だ踰越せず。君は已に數篇の作を巴里の劇場に提供したるが、初めて世に出でしものは「吾人の尊敬する人」(Céles qu'on Respecte)にして一八九二年に成り、次で出でしもの、中最も廣く知らるゝは「邪教徒」(Le Béguin) 一九〇〇年に成り、衆人の知れる秘密 (Le Secret de Polichinelle) 一九〇二年に出づ。愛憐の時代 (L'Âge d'aimer) 一九〇五年に出づ。小河 (Le Ruissau) 一九〇七年に出づ。なり。最後の一作は一婦人が一男子に「溝壑」より救出されしに、男子は婦人に「明燿々たる寶石ありて泥土に塗れたるを發見せりてふ談なり。

第拾章 俳優

佛國人と演劇 演劇を好む癖は實に佛國人の天性に出づ。佛國の人民概ね皆生れながらにして俳優なりと言ふも決して過實の言にあらず。元來佛人は自己の感情を過大に表する傾向ありて自ら感ずるより以上に之を形容す。而してその熱心誠意にして事物に興趣を寄すること深く、何事に關しても善く情緒を動かす。事の眞實ならざる時にも尙然り。況やその事の實在するに於てをや。故に人生の美をして一層色彩を増さしむ。蓋し他人に快感を與へんとするは固より一種の術に外ならず。然れども之を以て賤劣なる社交の術とするを得ず。人或は曰く佛國人は諸他の人民の如く根本的に誠意熱心なるにあらずと。されど吾人は決して斯くの如く推斷する事能はず。勿論佛國人は縦横に辯を弄して信を人に強ひ、張皇誇大に説きて虚偽に逸する弊を免れず。されど他國人が情を矯めて故らに冷淡を裝ひ、如何なる事にも驚愕の態を示すを耻辱とし、強説の臭味ある語氣を賤んで言を節し辭を慎むは却つて不愉快にあらざるなきか。

佛國人は假托せんとする意思あらば十分假托して全く真相を隠蔽することを得。然れども何の目的もなくして假托することなく、又耻づべき理由あるにあらずんば所感を表すことを耻ぢず、是を以て彼等は表情の方法單純樸素にして而も非常の力を有し、妥當の態度と手勢を以て身體顔面を動かし、由て以てその語意の力を助く、略言すれば敢て意匠を凝らさず天真爛漫の状を示すなり。

佛國人は技巧に長せる國民なり。其文字の高雅なる、其繪畫の巧妙なる、その彫刻の精緻なる、殊に其建築の宏廉なる、何れも之を證するにあらざるはなし。戯曲の嗜好強烈にして活潑なるに至りては比類最も稀なる所にして、僅々二三千人の人口を有する小都會は殆ど皆各自の劇場を具ふ。故に佛國全體を通じて演劇は即ち國民の生命にして又その天稟なり。且つ又該國の演劇は歐洲諸他の邦國に於ける劇壇に向つて強大の感化力を振へり。

往時演劇が文學と親密の關係ある有用の機關と承認せられて以來、佛國は未だ會て演藝の材能に缺乏を感せしことなし。人心騷擾して海内鼎沸する革命時代にすら優伶社會には混沌たる天地に光輝を放つ明星ありて、タルマ(Talma)の如き

マル娘(Mlle. Mars)の如きは最も人目を眩せり、而して現今生存する男女多數の名優が巷説に上り文筆に評せらるゝこと、一八七〇年の戦争以後の如く盛なるはなかりき。

政府と劇場 佛國の劇場は國民教育の大綱中に包含せられ、文部の局に當る國務卿は美術を管理すると同時に演劇にも亦最高の支配權を振ふ。凡て新劇を演せんとせば必ず文部卿の認可を受けざるべからず、然れども檢閲の制度は當今寛大にして仁恕博愛を旨とし、實際上演藝にこの規則を勵行するは外國に凌辱を與へ國際上の關係を錯亂する恐ある題目を有する時のみ、又その演ずる所は一定の限度まで禮の宜しきを失はざるを要し、若し此限界を越ゆる時は演技を許可せざる事となれり、然れどもこの制限の那邊に在るや、誰も明知する者なく、人たゞ茫漠に之を解するのみ、狼狽にして風俗を亂る演劇を興行すれば罰を受けざるべからず、然れどもこの點に關しても區域甚だ曖昧にして、狼狽てふ語に就て各自の見解區々紛々たり、巴里に於ては四人の檢閱吏を置て専ら檢閲を委託し、新劇及び新歌曲の原稿は此四人の目を經ること、思考せらる。地方に於

ては地方の長官その許否の職責を負ふ者とす。而して演劇場に對し政府は斯くの如く制裁を加ふれど、又之に與ふるに保護を以てす。巴里市に在る技藝練習所(Conservatoire)は公立の一館にして、演劇及び音楽を職とせんとする希望者を養成する目的を有し、志願者の資格具備する時は最良の専門技師に就て無料に教育を受く。且つ又巴里市に在る若干の劇場は社會に必要なりてふ理由を以て毎年政府より保護金を受く。オペラ(Opern)即ち Académie-Nationale de Musique、オペラコミック(Opéra-Comique)、コメディ・フランセーズ(Comédie-Française)、オレオン(Oléon)の四座是なり。この四座の勾欄を保護する目的を以て國會の年々可決する總額は五萬七千六百磅を下ることなく、その中四萬四千磅はオペラ館とオペラコミック館の二者之を受く。ガイテ(Gaité)は巴里市の有にして、官廳には之をシアートル・ミュニシパル(Theâtre-Municipal)即ち市有劇場と稱す。

サラ・ベルナール夫人 サラ・ベルナール夫人(Madame Sarah Bernhardt)は一八四四年に生る。その一生は概ね四十年間に亘る佛國劇界の歴史なり。その性行變幻し易くして操持なく、計策を運らして自己の名を露き、亂暴狼藉に邁進して長歲

月の間謬妄の識断を江湖に強ひき、然れども斯かる瓊瑤を忘るゝ能はざる批評家すらこの四十年間佛國がこの女優の如く機軸あり不群の器ある劇壇の才物を世界に出さざりしことを首肯せざる能はず。血液の混淆は屢人を驚かすべき創作力を生ず。ベルナールも亦この種の混血を有す。その父よりせば優は猶太人に屬し、母を以てせば佛國人に屬す。その性行のみを窺ふときは夫人が希伯來人の遠裔なることを識別し易からず。然れども渾身の力を奮ひ久しきに亘りて屈撓せざる耐久性を見れば吾人恐らくは選民の名を得たるイスラエル人が先天に享有する體質のこの婦人に潜伏するを窺ふことを得ん。而してベルナールは斯かる忍耐を以て人生の風濤に抵抗し、齡已に耳順を過ぎて耗損衰頹せざる天資あるのみならず、その美的尊崇の主義は頗る猛烈にして、一時は劇界の流域を溢れ出で諸他の美術界に汎濫せり。彼は未だ曾て猶太人と相伍してその教會の感化を受けしことなく、却て心を基督教に傾けて曾てヴェルサイユの或る修道院に教育を受け、一時は宗教生活に非常の興趣を有したることあり。故に人は言ふ、この天成の名優は殆ど全く厄となれりと。ベルナール若し生涯をこの方向に捧

げたらんには、宗教界は演劇界の損する所より多大の利益を受けたるべきや否や、これ吾人の決する能はざる疑問なり。吾人はたゞ劇壇の招命が宗教界の招命より強くして、彼の之に羅致せられしを知るのみ。ベルナールは遂に修道院を去つて技藝練習所に入り、その卒業するや成績僅に二等なりき。然れども天幸を以て十八歳の時テアートル・フランセー演藝館(即ちモリエール館)に雇聘せられき。久しからずして彼は之を去てジムナーズ館に入り、之より轉じてポルト・サン・マルタン劇場(Porte-Saint-Martin)に走り、次でオデオン館に在て一八六九年フランソワ・コッペーの作「ル・バッサン」を演せり。この一事がコッペー及びベルナル二人の爲め重大事なりしは第四章に於て吾人の已に説示したる所なり。侍兒ザネットを扮するや、その音聲及び陳辭の嬌婉なると姿態の表情巧なるとは大に觀衆を動かし、名牌の末班に在て未だ人に知られざる小女優は一時に巴里を諷がしたり。一旦名を揚げて後ベルナルは再びコメディ・フランセーズに復歸し、普佛戦争以後殆ど十年間この座に於て眩然たる光耀を放ち、一座となりて相伍する數多の優伶何れも皆梨園の名手なるに拘らず、サラは前に列する諸星をして輝光なか

らしめき。巴里滿城の士女はサラトを激賞して倦むことを知らず、世界には之を除きて復た他のサラなきが如くに思へり。サラとはこの優の自ら附したる藝名にして、本名はロジーン(Rosine)と登録せらる。彼は日常自己の行爲に關して世人に好奇心を起さしむる方法を工夫し、奇と稱せられ異と呼ぶる事は一としてなさいることなし。晝は輕氣球に搭載して雲霄に飛揚し、夜は白き縋子にて内面を覆へる棺に下り臥し、以て凡流の常套を黷ふを屑とせざるを示すが如き、忽如身を躍らして繪畫及び彫刻の版圖に侵略するが如き、蛇と猛獸とに嗜癖を有するが如き、屢人と爭論を醸し、屢人に愛着するが如き、米國に於て伴侶たりし女優マリー・コロンビエー(Marie Colombine)が「サラ・バナム」(Sarah Barnum)と題する一書警察の押收する所となれり。を著はして之に汚名を負はしめければ、その食堂に在つて食卓の周圍に此優と馳逐せしが如き、その他諸の奇行は一々日刊新聞に掲載せられ、一八七〇年の始めより八〇年の終に至るまで巴里の新聞界は之を恰好の記事とし、喜んで之を受けしこと、亞拉比亞の曠野中にイブラエル人に降されし甘露の如かりき。

然れどもサラール・ベルナル夫人が巴里の全都を擾亂して甲論乙駁せしむる怪術中最も甚しく一世を驚駭せしめたる行跡は、コメディー・フランセーズ館の規則と勢力とを無視して規律森嚴なるこの團體を脱走せし一事なり。從來同劇場の一社友たりしサラールは一朝約束を破りて關係を絶ちし爲め違約金を要請せられしが、彼は敢て之を意に介せざりき。抑彼の此に到りしは恰もエズの再來の如く外物に誘はれしに由れり。然れども彼の欲望せし果實は林檎にあらずして黃白の光なり。之を誘惑せし蛇は亞米利加人なり。此事の起りたるは一八八〇年にして、當時米國は歐洲の劇場に輝く諸名星の爲め優游惰眠し得べき樂土なりき。但し現今は復た往日の如き仙郷にはあらず。サラール・ベルナルは前代未聞の條件を以て招かれき。即ち一演劇毎に一百磅を受け、總收入六百磅以下ならば其三分の一を取り、六百磅以上ならば超過額の半を取り、一切の入費は雇傭主之を負擔する規約なり。サラールは心竊に思へらく、この約の如くんば收入以下の費を以て生活するを得べく、且つ從來貪吝の輩周圍に蟬集附隨して煩に堪へざりしが、斯かる虎狼の徒に肉を投ずるを得るまでは姑らく之を避くるを得べしと。此希

望を以て彼は契約を結び、飄然去て米國に入れり。コメディー・フランセーズ演藝館はラテールを訴へて四千磅の損害を取るべき判決を得たり。彼は敢て之に驚かず。蔑然として輕視せり。斯くて久しく米國を旅行し、或は諸他の邦國を踏遍せしが、其間に彼はサルドー君(前章に見ゆ)を得て無二の價值ある提携者とせり。蓋しサラールの米國に遊んで未だ久しからざるに、同國人の皆狂癡して自己を激衰するに拘らず、殆ど全くその言ふ所を解せざるを悟れり。曾つてテアートル・フランセール座に於て名聲を博したる古典的の諸劇が米人に適せざること明白となれり。是に於て優は動作に由て明瞭に劇の趣意を知らしめ、兼ねて又觀客の興味を集中せしむべき中心人物を含む諸作を必要とせり。サルドー君乃ち之が爲め、フェドラ、テオドラ(前章に見ゆ)等の諸篇を供給し、その趣向技術の極に達せり。若しサラール・ベルナルなかりせば是等の作は決してサルドーの腦漿より逆り出でざりしならん。サルドーとサラールは共に好結果を得て大に満足したり。この間優は絶えず巴里に歸り來り、或は自己の名義を以て或はその子モリス・ベルナル(Mr. Maurice Bernhardt)の名義を以て諸の劇場を借りしが、コメディー・フランセーズ館との

葛藤も終に全く調停せられ、漫遊演戯に由り巨額の資産を積みしかば、乃ちブライステュシャートルレーに在る舊テアートル・デー・ナシオン座(Théâtre Sarah Bernhardt)を買収して之を改善し、新に之にテアートル・サラ・ベルナル(Théâtre Sarah Bernhardt)の名を與へてその野心を満足したり。ベルナルは、今も尙該場座主となり、その光輝は佛國の梨園を照らして依然強く耀く。彼が女優として他輩に秀づる所は主として其音聲の嘹亮として宮商に諧ひ、言語の價值と節奏を文學的に解せるに在り。一八八二年サラ・ベルナルは希臘産の俳優ダマラ(M. Danule)と婚せしが、ダマラは一八八九年に死せり。

所謂モリエール館てふものに就て爰に聊か叙説する必要あるに似たり。同館は佛國に於ける主要なる男女俳優の履歴に關し人の屢口にする所なり。

コメディー・フランセーズ コメディー・フランセーズ演藝館の創設は遠く一六八〇年に溯る。本館にて方今實演せらるゝ定款は一八一二年ナポレオン・ボナパルトの作成せし所にして、世に之をモスコの法令と稱す。されどその後の諸法令に由りて多少變更を受けたり。同館は政府に於て第一等の佛國劇場とし、年々九

千六百磅の保護金を與ふ。この保護により該館は超然高き位地を占めて、投機的の企畫をなさず、社友となれる俳優をして前途の憂なからしむ。社友は其資格に由て堅實なる終極の利益を獲得する爲め外部より來る誘惑にも内部に行はるる隠謀にも抵抗すべき品性及び手段を要す。而して社友の班に列すれば合意上確定したる俸給を受くるのみならず、別に又純益中より配當を受くる者とす。純益は役割の數に應じて之を配分し、社友に分附する役割の多少は就業年限の長短に比例す。退職する者にも又年金を贈與す。一切の社友は當館に關係する各種の問題に就き發言權を有す。然れども當館の一般事務は管理者ありて之を總攬し、委員會之を輔佐す。一八八五年以來ジュール・クラルチー君(M. Jules Claretie)之が管理者なり。

コケラン兄弟 コケラン兄弟はブロンギに於て麵麩及び饅頭を製造する人の子にして、少年の其麵粉を捏ね鬆糕を製する捏糊を作る術を熟知せしが、趣味に乏しき家傳の職業を續がんよりも寧ろ喜劇の麵麩を以て社會に滋養を供せんと欲せり。兄弟が最初斯かる希望を起せし時人は頗る方向を誤れりと思ひき。

何となれば如何に輕便なる饅頭も演劇の浮薄なるに比すれば遙に堅實安固なればなり。兄コンスタン(Constant Coquelin)將來コクラン・エーネ(Coquelin aîné)兄コクランの義の名を一世に轟かすべき運命を以て一八四一年に生れ、製麵室の焙窯を棄て、俳優精練の焙窯に投じ、危険なる先例を弟アレキサンドルに示せり。弟は一八四八年を以て生れ、將來名譽の寵兒となつてコクラン・カデー(Coquelin cadet)弟コクランの義と稱せられき。兄コクランは己が地方の劇場に職を得たるが幾くもなくして大に人氣に投せり。父なる製麵者は演藝の名手家門に出でしを見喜んで人に自負するよりも寧ろ之を驚駭したるに、聽て次子が名聲隆隆たる兄の成功を羨み、捏粉糟を攪拌するを嫌ふて煌々たる舞臺の燈燭に思を馳するに至り驚愕措くところを知らざりき。斯くて僅々數年を経過せしに兄弟二人は相携へてコメディー・フランセーズ館に出演し、萬人の視線を引て巴里全部を喜ばしめたり。大コクランは口廣く鼻小にして惡意の眼を有し、相貌實にモリエールの作中に著名なる人物を扮するに理想的の喜劇俳優なりき。ジュアン・バプティスト・モリエールは佛國有名の喜劇作者にして、一六二二年に生れ一六七三年に死す。兄

は又その笑聲鐘の鳴るが如く、音調幽雅にして吼ゆるが如く、演技の姿態は善くその狀貌に適合せり。古典劇の奴僕に扮するに妙なるは今人の記憶に於て唯一無双と稱せらる。然れども彼はテアートル・フランセーズ館の分附せし役割を以て抱負を満足する能はざりき。疑もなく彼は舊友なるサラ・ベルナルが滿籜の黄金を收獲したるを見て技癢に堪へず、窃に一攫千金の空想を起せしなり。是に於てサラを學んでコメディー・フランセーズを脱奔し、サラの鳳尾に附隨して諸所を旅行せり。その近年の演技に在てはロスタン君の作りし悲愴なる詩的喜劇の人物「シラノ・ド・ベルジュラック」(前章に見ゆ)に扮せしを以て最も有名とす。この時に於ける彼の行動は優雅にして詩句を扮表するに頗る鍛鍊を經、早年の頃に比すれば遙に出色の技倆を示せり。小コクランはその技倆を兄に比して大に遜色あり。然れどもその器量に相當する藝及び徐々に笑を催さしむべき藝を演ずるに當りては明かに一個の喜劇俳優なり。彼は終始コメディー・フランセーズに忠實にして、曾つて之を離れしことなし。然れども自ら作出せし喜劇的の獨話を場外に誦して常職以外に頗る貨殖せり。この種の獨話は數年前非常に成功せしが、

アレキサンドル・コクランはこの方面に於ける成功に倦めりといふ説あり。近來彼は甚しき難病を患へて劇壇より引退せしが、人はそのたゞ一時に止まらんことを希望す。コンスタン・コクランの子ジャン・コクラン(M. Jean Coquelin)も亦喜劇に卓絶せる一優にして、今現にコメディー・フランセーズ館に着々江湖の愛顧を収めつゝあり。

ムーネー・シユリー君　ムーネー・シユリー君(M. Monnet-Sully)はコメディー・フランセーズ館に忠實なる強固の柱石なり。君は一八四一年に生る。故に年齒よりすれば又該館の父なり。今日に於ても君を以て天性の敏活殆ど少年の如き悲劇俳優と思惟する士女甚だ多し。然れどもその生年月の遠く七十年前に在りしを考ふる時に急に人をしてこの希望の空しからんことを恐れしむ。君の久しからずして梨園の門を辭するを聞くこと吾人今より豫め之を期せざるべからず。今や悲劇俳優は年々その數を減少するを以て、この老優若し退引しなば藝苑の損する所必ず大なるべし。悲劇は由來熱烈の激情を要す。然れども浮世の人情の淺膚躁佻に馳せて熱情を技藝に表露する風に乏しく、斯界の酸素稀薄にして情火の燃焼を

持續せしめ易からず。思ふに精神の休養を求むる爲め吾人を驅つて益々輕浮飄逸に向はしむる所以は、近世の生活極めて苦難にして生計の問題に心を傷むること甚しきに由るなるべし。然れどもその理由の如何を論せず。悲劇俳優が詩家と同じく漸々消滅するが如き觀あるは事實にして、吾人の見る所を以てするに、何れの名優もムーネー・シユリー君の後を承けてテアートル・フランセーズ館を飾るに堪へず。風光明媚魂を迷はせ心を奪ふドルドンギエ河の畔に沿へるベルジュラックは君の生地なり。然れども君は南部の諸州に生れて才氣に富める數多の人物と同じく夙に巴里の引力に吸收せられき。斯くて技藝練習所に梨園の弟子となりしが、喜劇科には僅に二等の褒賞を得たるに反し、悲劇に在つては優等の成績を專にせり。普佛の妖氣始めて紛起せし頃はオデオン座に勤めて其名漸く知られんとせしが、忽ち縮衣を脱し肩掠を抛ち、軍隊に入つて志願兵の士官となれり。天旋り地轉じて後一八七二年中テアートル・フランセーズ座の聘に應じ、爾來年々その名譽芳しくして益々一世の瞻仰を受けしが、古典劇及び悲劇の人物、君長(Léonide)、「フィードル」(Phédre)、「エヂップ王」(Oedipe Roi)等を扮するに至りては當代の名手一人

としてその門籬に近づく能はざりき。然れども君の演劇は古典的の悲劇にのみ専なるにあらず。傳奇的の劇曲及び外國人、冒險家(共に前章に見ゆ)の如き作曲を演ずるにも技倆均しく秀絶と稱せられ、殊にエルナニ(Hernani)及びリュイ・ブラー(Ruy Blas)を扮する技は已に堂に上れり。其多能多藝なること斯くの如くなるに拘らず、主として其芳名を揚げし所以は悲劇俳優として入神の妙あるに由る。一八七四年君はコメディ・フランセーズの一社友となり、以來繼續して今日に至りしが、その間名技無比と稱せらるゝ喜劇俳優ゴイ(Goy)一八二二年に生れ一九〇一年に死す)及びドロローネー(Dalany)一八二六年に生れ一九〇三年に死す)の謝し去りし爲め最も古參の社員となれり。一定の年齢に達する後はその劇場に古參の位を占むること必ずしも名譽にあらず。然れどもシュリー君は今に饗譽として技能衰えざれば、君に在つては實に名譽の冠なり。

バルテール嬢 (Mademoiselle Barthe) は一八五四年を以て巴里に生れ、過去二十年間コメディ・フランセーズ演藝館の女優中世評最も盛にして最も傑出するものゝ一人なりき。一八八〇年中嬢は同館の社友となりしが、戯曲及び悲劇

の兩面に技藝を演じて十分の責任を果す良優として常に信頼を受け、諸の人物を扮して喝采を博せしこと頗る夥し。

パーレンタ夫人及びヴォルム君 (Madame Paréta-Vorms) は一八五五年アヰニオンに生れ、初めて戲臺に現れしとき「女流博學者」(Les Femmes Savantes)に於ける人物アンリエット(Henriette)に扮して絶妙の手腕を證し、その後一八七六年コメディ・フランセーズの社友となれり。その今日まで扮せし所は常に主要の人物にして、演せし喜劇は枚舉するに暇なし。後ヴォルム君(M. Vorms)と婚せしが、この人は同座に勤むる社友にして、技藝堪能なる名優なるのみならず又技藝練習所に於ける陳辭術の教授として著名なり。

ミユレー嬢 (Mademoiselle Müller) は一八六五年巴里に生れ、一八八七年以來コメディ・フランセーズの社友にして、輕快の喜劇に於ける人物を扮するは人の最も稱揚するところなり。その初演に於てオン・ヌ・パチーン・パーザク・ラムール (On ne badine pas avec l'Amour)を試みしが、何等の方向に於て其才能最も適切なるやはこの時已に其徴を現せり。

デュードレー嬢 (Mlle. Duilly) は久しく悲劇の演技に加はりて要部を占めしが、其姿態より性癖に至るまで最も悲劇に適當す。その「君長」(Le Ci)、「シヤルロット・コルデー」(Charlotte Corday)、「マトラダート」(Mithradate)、「バジャゼ」(Bajazet) の如き諸劇に成功せしは近來巴里劇壇の記事中着目すべき事實とす。その生れし故郷は白耳義の首都ブラッセルスにして、一八八三年以來コメディ・フランセーズの社友なり。

フランデー嬢 (Mademoiselle Martine Brande) は才能あり人望ある女嬢にして、所々の劇場を徘徊せし後一八九三年コメディ・フランセーズ館に復歸し、その後三年にして同座の社友となれり。或る喜劇人物を扮するに優は特種の長を有し、その餘の諸優之に比肩することを難んず。「フィガローの結婚」(Le Mariage de Figaro) に於ける伯爵夫人の如きはその一例なり。然れどもその技能の及ぶ範圍廣きを以て、自若として「エルナニ」に於けるドナ・ソル (Donna Sol) 又は「冒險家」に於るクロランド (Clorinde) の如き人物を扮するに堪ふ。一八六二年巴里に生れたり。

スゴンヴェーバー夫人 (Madame Segond-Weber) は巴里の劇界に異種異様の經驗を積みし後、一九〇〇年中テアートル・フランセーズ館に招聘せられき。其技量の存する所は主としてカッサンドラ (Cassandra)、「イフィゼニア」(Iphigénie) の如き悲劇的の人物を扮するに在り。夫人は一八六七年巴里に生れき。

ソレル嬢 (Mademoiselle Sorel) 亦近來コメディ・フランセーズ館に手腕を琢磨したる一人にして、一八七二年に生れ、小樂劇に第一回の出演を試たる後之を棄るゝ。歌曲劇及び輕快の喜劇に方針を轉せり。次で高尙なる喜劇に手腕の適否を試みて成功せしかば、ジムナナーズ館を出で、オデオン座に入り、後更にコメディ・フランセーズに入れり。

シルヴァン君 (M. Silvain) は一八八三年以來コメディ・フランセーズ館の社友にして、劇部の優伶中名聲最も藉甚なるものの一なり。君は經驗豊富而も辨識力を具へて各種の劇を通曉し、之くとして可ならざる所なき良俳優なり。且つ又現今技藝練習所の教授となりて後進の風靡を誘掖す。君は一八五一年ブールグに生れ、近ごろコメディ・フランセーズを退くの意ありと言明せり。

トリュツファイエー君 ジー・セー・トリュツファイエー君 (M. J. C. Truffey) はコメディーンランセーズ館に實演せし諸喜劇の目録を經過して諸の著名なる人物を扮粧すること茲に久し。君は管に俳優なるのみならず、又戯曲の作者にして、其著作は相當に成功せり。一八五六年巴里府に生れ、一八七五年中コメディーンランセーズ館に雇備せられ、一八八八年其社友となれり。

デュフロー君 ラファエル・デュフロー君 (M. Raphael Duflo) は一八九六年コメディーンランセーズ館に選拔せられ、今はその少壯社友の一人なり。君は一八五八年を以てリールに生れ、一八八二年オデオン座に於て第一回の演技を試みし後殊に悲劇及び戯曲に於て力量と才藻の富贍なる俳優として名譽の基礎を固定せり。アンリー三世とその宮廷 (Henri III et sa Cour) の演藝に於て王に扮したるはその最も成功したるものの一なり。近年佛國の戲臺に現れしレールト (Lacres ショークスピアの悲劇ハムレットに在る人物にして、ポロニアスの子、オフェリアの兄なり。劍に毒を塗りてハムレットを殺し、自らその劍に傷きて死せり) 中成績最も良好なるは君の特技なり。

テアートルフランセー館の諸他の俳優 ル・バルジー君 (M. Le Bargy) は一八五八年巴里府の附近に生れ、一八八七年フランセー館の社友となりしが、其技能多端にして通せざる所なき故、同館中最も緊要なる社友の一にして、兼ねて又技藝練習所の一教授なり。この外コメディーンランセーズ館に出演する諸輩を左に紹介せん。

ジュアン・デルツェール嬢 (Mlle. Jeanne Davoir 一八七七年巴里府に生る)

マリー・カルプ嬢 (Mlle. Marie Kalb 一八五九年巴里府に生る)

ド・フローデー君 (M. de Fleury 一八五九年巴里府附近に生る)

アルベル・ランベル君 (M. Albert Lambert 一八六五年ルーアンに生る)

ジェルジュ・ペール君 (M. George Perr 一八六七年巴里府に生る。君は又技藝練習所の教授にして戯曲の作者なり)

エル・ペール・ロワール君 (M. L. P. L'hoir 一八六〇年巴里府に生る)

ナッサン・ヂエー夫人 (Mme. Tassandier 一八五一年リブールンに生れ、多年オデオン館に在つて悲劇中樞要の人物を扮せり)

コメディ・フランセーズ館に出務する男女の俳優中巴里府の内部又はその附近に生れし者極めて多きを見て吾人は興味を起さざる能はず。斯く演藝の才華を發展せしむる者は四周に磅礴する空氣の感化力なること勿論にして、その他の説明を試むるの必要なし。

レジャーン夫人 巴里の麗都に生れ、巴里の土と空氣に生育し、純粹なる巴里兒の標本と稱すべき名優はレジャーン夫人 (Madame Rejane) なり。優の天上より人間に落ちしは一八五六年なり。然れども之を見て齡已に半百以上を數ふることを想像するもの豈に多からんや。レジャーンは其藝名にして本名をガブリエル・シャルロット・レジー (Gabrielle Charlotte Rej) と稱し、姿態嬌艶魂を蕩かさんとする名媛にして、意氣鮮活言容生動する女優なり。初め技藝練習所に學んで喜劇の科に第二等の賞を得、一八七五年始めてゾードヴィル館に出演するや忽地にして觀衆の歡迎する所となれり。これより以後多年に亘り巴里に於ける劇場は概ね歴訪して常に顯著なる成績を收め、同都の士女はその名を耳にし口にする毎に「レ・ドミニノ・ローズ」 (Les Dominos Roses)、「アン・ラ・ソレ」 (Clara Sorrell)、「コーン」 (Uccore)、「サプノ」 (Sapho)。

情人 (Anoufense)「サン・ゼーン夫人」 Madame Sans-Gêne、「チツ・ハルン」 (Divorçons) 等の如き諸劇曲を追思せずんばあらず。嚴肅なる人物を扮するは技藝神の寵兒なる此女優の未だ曾て試みんと欲せざりし所、然れども説くべく説くべからざる秘趣を寫し出して言外に意あり意外に味あらしむるは、優が靈敏快捷に演出して而も高雅の嬌態を失はざる技なり。レジャーン一度ゾ・オードヴィル座の管理者ポレル君 (M. Porel) と婚せり。然るに連理の技は結繩の政を亂すに忙はしき離婚法の利刀を以て切斷せられき。

テオ夫人 テオ夫人 (Madame Theo) は未だ何人にもその生年月を知らしめざりき。この女優の始めて人間の活舞臺に現れたるは巴里の附近なりしが、一八七三年ルネーサンス座 (Renaissance) に樂曲を奏したるオ・フェンバックに雇はれ、此處に「嬌態快活なる香料販賣者」 (La Jolie Parfumeuse) を扮せしに、戦亂の紛塵穢に收まりて巴里漸く再び華美悅樂に向はんとする際なりしかば大に都人士の喜ぶ所となれり。テオは夙に雜駁の生活に經驗を有し、初め修道院に於て教育を受けしが十五歳有餘の時之を去て結婚せり。その後幾くもなくしてエルドラド音樂館に

歌唱したるに偶、オッフェンバックの着目する所となり、歌手のみならず俳優の才をも具ふることを認められき。同優が小樂劇の輕快なる徑路を経て名聲高き位地に進みしは、實に女優として拔群の熱情と精力ありしに由る。且つ又溢るゝが如き愛嬌人を魅する者あるを以て、一度その打扮する地獄の樂人(Orphée aux Enfers)太公の夫人(Madame Archiduc)ラタプラン、(Rataplan)ラー・マスコット(La Mascotte)等を觀る者は長く之を明記して忘るゝことなし。而してその演ずる諸劇中人をして嬉笑禁する能ざらしむる者道德の制裁弛緩なる者極めて多し。近年テオは亞米利加及び諸他の地を漫遊し、巴里人士の之を見ること甚だ稀なり。

ジュアングラニエー夫人 ジュアングラニエー夫人(Madame Trine Granier)は共和國の建設以來歌曲劇及び小樂劇に出演せし女優中人望最も盛にして娛樂を興ふるに長せるものゝ一なり。一八五二年巴里に生る。一夜グラニエーはルネーサンス座に於て二様の役割を受け、テオ夫人に代りて、嬌態快活なる香料販賣者を演せざるべからざりしが、これ實にこの優が始めて成功の光明を見し時とす。之に次で扮せしは一八七四年「シロフ・シロフ」(Girode-Girode)に於ける人物にし

て、之より後に演せしは、小公爵(Le Petit Duc)「ソニー第一の武器」(Les Premiers armes de Richelieu)「魔夫人」(Madame la Diable)「ガッロシー嬢」(Mademoiselle Gatroche)「サタン夫人」(Madame Satan)「老ひたる健行者」(Le Vieux Marcheur)等優指するに暇なく、此數者はその堂奥に入れる諸劇の一端に過ぎず。戲臺に上るや優は辛辣苛烈の氣象と笑ふべき幽默の風とを現して、遺憾なく巴里の市井に徘徊する無頼の徒を摸倣し、何れの場合に於てもその扮戯に「ガッロシー嬢」の意氣を含めり。

ジャンナーダン夫人 ジャンナーダン夫人(Madame Jane Hading)は生れて僅に三歳の時初めて戲場の舞臺に現れて年齢相應の技を演せり。故に之を稱して襁褓中よりの俳優といふも妨なかるべし。一八六一年を以てマルセーユに生れたるが、この初演は實にこの生地に起りたる珍事なり。この時の演戯には偶人に扮したるを以て、將來遠蕩の天龍を荷へる女優も之が爲めに甚しく才能を奮ふ必要なかりき。その本名はジャンネットナーダニヤ(Jeanette Hadingue)なれども、俳優を職とするに及びてジャンナーダンを優名とし、この名を以て廣く世に知らる。而して「Jane Hading」なる字形恰も英國人の名に彷彿たるを以て、之を見て優を英人なりと思

ひたるもの多し。巴里に於ける主要なる劇場はアーダン盡く之を涉獵して、コメディー・テラント・セトズ・の槍舞臺をすら蹈み來り、既往二十年間劇場に演せられし無數の戯曲を嘗試して成績頗る著しかりき。その才能の及ぶ範圍廣大にして衆藝を綜括し、戲臺に實演せし經歷は「フルートル」(Froufrou)「吾人の親友」(Nos Intimes)「冒険家」(L'Aventurier)等を包含するのみならず、「ビー・ジ・クリト・スト・ド・ラ・ムール」(Les Jorisses de l'Amour)その他諸の歌曲劇をも含めり。優は曾て結婚せしが、後破鏡の不幸に逢へり。されど何事に就ても鮮活快敏にして、時と共に相推し移る當世流の婦人なり。

ルイ・パロン君 (M. Louis Baron) は一八三八年を以てアランソンに生る。巴里劇界の一老将にして第二流の喜劇目錄中技倆凡ならざる俳優なり。初め君は騎銃兵となり、その間に軍隊生活の趣味を實地に研究するを得たり。その後一八六六年ヴァリエ座(Variétés)に於て初演を試みしが、爾來久しく巴里の劇界に生活して常にこの劇場と多少の關係を持續せり。君の今日まで出演せしは輕快淡薄なる數多の劇にして、常に其主要なる人物を扮せり。その中にも、「ニトト

ン・嬢」(Mam'zelle Nitouche)、「ラン・クニ・ム・バー・バン」(La Femme à Pappe)「貸貸馬車百十七號」(Le Financier)は度々演じて常に快味を覺えしむ。君は又小樂劇に加はりて演技を試みしことあり、劇場管理の法をも通曉せり。

アルベル・ラッスール君 (M. Albert Brasseur) は一八六二年に生る。ムーヴ・ナ劇場を創設したるブラッスールの子なり。故に之を父の笑姿を紹ぐ俳優と謂ふて可なり。君の履歷を尋ねれば巴里に星列する俳優中最も成功せしもの、一人なり。何となれば笑て樂まんと欲する士女は未だ曾て君の技を見て娛樂を感ぜざる事なければなり。凡そ世上の人を察するに嬉笑を必要として之を渴望する輩恐らくは百中九十を占むべし。故に同時代の人を笑はず智能を有し機敏にこの才を利用する者は人氣吸收の秘訣を掌中に握るなり。他種の天才も亦福利を求むる方便となるべきも、最も直接に人を貨殖の道に進ましむるは即ちこの才幹なり。若し歌曲劇を演ずるに至りてはブラッスール君は完全に劇の精神を捕へたる人なり。

諸他の俳優 **セルマン君** (M. Gormain) が巴里の劇壇に關係せしこと茲に凡そ四